

ISSN 1342-2405

D.H.ロレンス研究

第26号

2016

日本ロレンス協会

目 次

論文

- オーストラリアのブッシュ文学とロレンス——『カンガルー』における自然描写
と共同体 加藤 彩雪 3
D・H・ロレンス『虹』における生命、物質、そして個体性 巴山 岳人 19

特集：D・H・ロレンス『虹』を読む（『虹』出版100周年にあたって）

- はじめに 田部井 世志子 59
『虹』批評と現代社会——石炭とダイヤと工兵と 麻生 えりか 33
機械文明を告発する『虹』——蛇の表象を巡って
..... 田部井 世志子 60
ワークショップ：D・H・ロレンス『虹』を読む——その総合コメントとして
..... 鈴木 俊次 81

書評

- Matthew J. Kochis and Heather L. Lusty(eds.), *Modernists at Odds: Reconsidering Joyce and Lawrence* 荒木 正純 87
Nick Ceramella(ed.), *Lake Garda: Gateway to D. H. Lawrence's Voyage to the Sun* 星 久美子 93
倉持三郎 『D. H. ロレンスの大学ノート：内容と解説』 岡山 勇一 98

-
- ロレンス研究文献 106
事務局からのお知らせとお願い 108
大会研究発表のための助成制度 110
大会報告 113

会計報告	121
西村孝次賞発表および掲載論文講評	125
『D. H. ロレンス研究』第27号原稿募集要項	127
会則	129
役員一覧	132
編集後記	134

論 文

オーストラリアのブッシュ文学とロレンス ——『カンガルー』における自然描写と共同体

加藤彩雪

序

ロレンス (D. H. Lawrence) の長編『カンガルー』(*Kangaroo*) は、1923年に発表されるやいなや、様々な酷評に晒されてきた。その酷評の多くは、不自然なコラージュ的手法を用いた一貫性のない小説の構成や、各々の政治思想を持つ登場人物が繰り広げる政治的議論の非現実性や表層性に向けられている。ロレンスが20世紀初頭のオーストラリアの政情を正確に描写していないという指摘は、ホープ (A. D. Hope)、ドレイパー (R. P. Draper)、マリー (J. M. Murry)、そして プリチャード (K. S. Prichard) らの『カンガルー』批判に通じる。ダロック (Robert Darroch) の *D. H. Lawrence in Australia*(1981)¹ も、実際に存在した政治組織に発想を得て作品が描かれたのか否かという点に注目をしている。このように、ロレンスと当時のオーストラリア社会との関係は、今まで、『カンガルー』研究の大きな関心である。

同様に、小説全体を通して繰り返し描写されるオーストラリアの「ブッシュ」もまた、『カンガルー』研究の重要なテーマの1つであるが、ブッシュに関しては、前者よりも、肯定的な批評を見つけることができる。例えば、フンマ (J. B. Humma) は、ブッシュとは『カンガルー』の「主要なシンボル ("central symbol")」(31) であると述べている。また、ケンブリッジ版『カンガルー』の編者スティール (Bruce Steele) は、序文の中で、「オーストラリアの原風景の緻密な描写 ("the visual accuracy of his description of scenery")」(xxxiii) が、肯定的に受

容されてきたことを述べている。さらに、オーストラリアの批評家スティーヴンソン（P. R. Stephenson）は、自身のエッセイ “The Foundations of Culture in Australia” (1936) の冒頭でロレンスの名を挙げ、オーストラリア固有の風土に対するロレンスの認識に好意的な評価を与えた (Stephenson 43)。確かに、島国イギリスとは異なる、広大なオーストラリアの土壤で育まれたブッシュが、ロレンスの創作活動のインスピレーションとなっていることは、*The House of Ellis* として出版される予定だったスキナー（Mollie Skinner）との共作のタイトルを、ロレンスが『ユーカリ林の少年』(*The Boy in the Bush*) に変更したことからも推測できる。

ブッシュとは、一般的な英語では「茂み」という意味だが、オーストラリア英語では異なる意味合いを帯びる。エーデルソン（P. F. Edelson）によると、ブッシュは “uncultivated wilderness” (Edelson xvii) と定義でき、絵画のような美しさを見せるイギリスの自然とは対照的な、獰猛で荒涼とした自然を意味している。しかし、人間を簡単には寄せ付けないブッシュを小説の基軸に置いた初めての作家がロレンスだったのでない。ブッシュは、イギリスの入植以降、オーストラリア人作家や、トロロープ（Anthony Trollope）を始めとするオーストラリアを訪れたイギリス人作家によって、文学の中で頻繁に描写され、ロレンスがオーストラリアを訪れた1922年には、ブッシュはすでにオーストラリア文学の精神的な支柱となっていた。これから考察するように、ロレンスは、既存のオーストラリアのブッシュ文学を読んでおり、『カンガルー』には、ブッシュ文学に関するロレンスの知識が反映されていると推測できる。しかし、ロレンスは、ブッシュ文学の影響を受けながらも、その伝統に反した独自のブッシュ解釈を提示している。そこで本稿では、オーストラリアのブッシュ文学の系譜の中にロレンスの『カンガルー』を位置づけ、『カンガルー』とブッシュ文学の共通点と相違点を論じる。

1章では、初期のブッシュ文学と国民的ブッシュ作家ローソン（Henry Lawson）に注目し、ブッシュ文学と『カンガルー』の共通点や、ブッシュ文学からロレンスが借用したと推測されるテーマについて考える。2章では、ブッシュ文学特有のモチーフを使用しながらも、ブッシュ文学の系譜に組み込むことのできないロレンス独自のブッシュ表象を明らかにする。

1. ブッシュ文学の伝統と『カンガルー』

まず、オーストラリアの初期ブッシュ文学と『カンガルー』の共通項を考える。1788年から1880年まで続いた植民地時代は、イギリスで生まれ育ち、オーストラリアに移住した作家が、あくまでもイギリス人としての自己認識のもとに作品を発表した時代だった。彼らの文学的な関心は、美しさとは程遠い荒々しいブッシュの暗闇に向けられ、馴染みのないブッシュを恐ろしいものと見做す視点は、初期のブッシュ文学に共通している。その視点は、『カンガルー』の主人公サマーズ (Richard Lovatt Somers) が、月明かりに照らされたブッシュを初めて散策する場面にも見られる。ブッシュとサマーズの初対峙は以下のように語られている。

But the bush, the grey, charred bush. It scared him [Somers]... It was so phantom-like, so ghostly, with its tall pale trees and many dead trees, like corpses, partly charred by bush fires: and then the foliage so dark, like grey-green iron. And then it was so deathly still.... And he could not penetrate into its secret. (14)

ここで語られるブッシュは、『チャタレイ夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*) や、短編「太陽」("Sun") に登場するような、人間や動物などの有機体の生命を育む存在ではない。例えば、『チャタレイ夫人の恋人』においては、雛の生命やコンスタンス (Constance Chatterley) の女性性が、森の中で生き生きと描写される²。「太陽」でも同様に、南イタリアの陽光のもとで、主人公は活力を取り戻す³。

一方、『カンガルー』のブッシュには、生命を育んだり蘇らせたりするような温かさはない。“dead”や“corpses”と表現されるように、風光明媚とは対照的な、陰鬱な死のイメージがブッシュには与えられているのだ。確かに、索莫とした不毛な大地に太古から根付くブッシュの生命力は、非常に強靭である。しかし、ブッシュは、自身の生命力を人間に分け与えるような存在ではない。引用からも分かるように、ブッシュの神秘にサマーズは「入り込む (“penetrate”)」ことができず、むしろブッシュは、サマーズら人間の侵入を拒んでいるかのようだ。短

編「アドルフ」("Adolf") に登場するうさぎが、人間に保護されながらも彼らのペットにはならず、最後まで野生の動物であり続けるのと同様に、人間の手に簡単になつかない自然として、ブッシュは描かれていると言える。

無論、「アドルフ」で描かれる自然よりも、ブッシュの自然環境の方が荒々しく、ロレンスに恐怖心を与えたことは、彼と共にブッシュを散策したリーズ (Marjorie Rees) の論文 "Mollie Skinner and D. H. Lawrence" からも明らかだ。リーズによると、ロレンスは、"It [the bush] frightens me.... My very soul shakes with terror when I wander out there in the moonlight (Rees 43)" と発言したようだ。そもそも『カンガルー』は、ロレンスの自伝的小説と言われており、例えはニン (Anaës Ninn) は、「最も純粹なロレンス ("an undiluted Lawrence")」(Ninn 89) が現れた作品として『カンガルー』を考察している。ロレンスのブッシュへの第一印象が、サマーズが初めてブッシュ散策をする場面に反映されていると言っても過言ではない。

ここで、初期のブッシュ文学について具体的に考察する。ブッシュを初めて文学の中で表現したハーパー (Charles Harpur) の詩集は、*The Bushrangers and Other Poems* と題され、1853年に発表された。その後、不毛なブッシュは、*Bush Ballads and Galloping Rhymes* (1870) で知られる詩人ゴードン (Adam Lindsay Gordon) ら、多くのブッシュ作家を生み出す土壤となっていく。なかでも、クラーク (Marcus Clarke) のブッシュへの洞察は注目に値する。クラークは、"What is the dominant note of Australian scenery?" (Clarke 6) という問題提起に対し、「不気味なメランコリー ("Weird Melancholy")」(6) と即答している。そして、クラークは、"The Australian mountain forests are funeral, secret, stern" (6) と続ける。"funeral" という形容詞に象徴される否定的な語彙は、サマーズのブッシュ散策の場面で使われる "ghostly" や "dead" といった単語を想起させる。このように、異国の自然への違和感は、サマーズや初期ブッシュ作家の両者によって明示されている。

ここで、ブッシュが、マイティップという、ブッシュ文学特有のモチーフを生み出したことを指摘したい。このモチーフを積極的に使ったのが、ブッシュ文学の代表格ローソンだ⁴。ローソンが活躍した1890年代には、オーストラリア独自の暮らしがしっかり根を下ろし、オーストラリア人の視点からブッシュを描くこ

とで、アイデンティティを確立しようとする風潮が生まれていた。この考えを普及させたのは、文芸誌『ブレテン』(*The Bulletin*)⁵である。「ブッシュマンのバイブル」と呼ばれる『ブレテン』は、ローソンの短編を数多く掲載し、ブッシュの内部に生きる人間として、自然との新しい関係を築こうと試みた。その広大で酷薄な自然環境の中で生き抜くために必要だったのが、ローソンの短編の主軸となっているマイツップである。マイツップとは、以下のように定義することができる。

The term [mateship] is traditionally used among men and especially to describe the bond during times of challenge or hardship. In Australia, mate is more than just a friend; its usage implies a sense of shared experience, mutual respect, and unconditional assistance. (Abjorensen and Docherty 284)

マイツップとは、ブッシュの中で営まれた男性同士の労働や、困難を共にすることで生まれた連帯感や、仲間意識を意味するというわけだ。ローソン自身“*The Shearers*”という詩の中で、マイツップについて以下のように語っている。

'Tis hardship, drought and homelessness
That teach those Bushmen kindness:
The mateship born of barren lands,
Of toil and thirst and danger. (3-6)

ここでローソンは、仲間と力を合わせなくては生きていけない程、ブッシュの自然環境が過酷であることを伝えているが、このマイツップというブッシュ文学の伝統を、巧みに織り込んだ作品がロレンスの『カンガルー』である。実際に『カンガルー』では、11回ほど『ブレテン』への言及があり、マイトという単語も頻繁に使われている。エリス(David Ellis)が、『ブレテン』のジャーナリストへの紹介状を、ロレンスが持っていた可能性を指摘していることからも、ブッ

シュ作品の宝庫である「ブレテン」やマイツップについて、ロレンスが知っていたことが推測できる(Ellis 50)。さらに、これから考察していくように、当初は奇妙に思われたブッシュが、次第にサマーズの心象風景となる過程は、自己のアイデンティティの一部として自然を認識するに至ったブッシュ文学の発展過程と重なる。「他なるものの真髓」を描くことは、ブッシュの中に生きる「自分自身のアイデンティティを探すこと」に繋がっていったのである。

このように、確かに『カンガルー』は、ブッシュ文学を背景に組み入れている。しかし、ロレンスの意図は、ブッシュ文学の伝統に追随した作品を書くことではなかった。2章では、マイツップに注目し、ブッシュ文学の系譜に属さないロレンスのブッシュ解釈を明らかにしたい。

2. ブッシュの再定義——マイツップをめぐって

では、『カンガルー』の中で、どのようにマイツップが描写されているのか、具体的に考察する。前述したように、ローソンらブッシュ作家は、ブッシュの中で育まれる男性間のマイツップを積極的に描いた。しかし、ロレンスは、自然とマイツップを結び付けるのではなく、ブッシュの外部に形成された政治組織ディガーズを通してマイツップを描いた。

ここで、実際『ブレテン』が、ブッシュを礎として生まれたマイツップを、都会の読者に向けて発信していたことを指摘したい。オーストラリアとしてのアイデンティティを形成しようという政治的意図のもと、ブッシュ派生のマイツップを、社会的認識に拡大しようとしていたのだ。しかし、マイツップが、社会的かつ政治的解釈を帯びる時、男性同士の仲間意識を意味するマイツップは、その本来の意味を保つことができるのだろうか。ロレンスは、政治的共同体を通してマイツップを描くことで、この問いに向き合っているように思われる。

では一体、ディガーズのマイツップの特徴とは何であろうか。まずは、6章『カンガルー』の中で、ディガーズの一員コールカット(Jack Calcott)が、彼らの秘密組織について、サマーズに説明する場面を考察する。コールカットが、サマーズの妻ハリエット(Harriett)を退席させ、サマーズと男性同士で会話をしようとする場面は、以下のように展開する。

"Men fight better when they've got a mate. They'll stand anything when they've got a mate," he went on again after a while. "But a mate's not all that easy to strike. We're a lot of decent chaps, stick at nothing once they wanted to put a thing though, in our lodge – and in my club. But there's not one of them that I feel's quite up to me – if you know what I mean. Rattling good fellows – but nary one of 'em quite my cut." (105)

このように、コールカットは、仲間がいてこそ闘志が湧き上がり、様々な困難に耐えることができるのだ、と述べている。ローソンらブッシュ作家の主張するマイティップに関するロレンスの知識が、この場面に反映されていると言える。また、気心の合うマイトには、なかなか出会えないものだと主張するコールカットは、秘密組織とその運動を通して、サマーズと仲間になろうとする。一方で、「友を持てないこと ("friendlessness")」(107) を嘆くサマーズも同様に、「何か他者との生きた関係 ("some other living relationship")」(107) を結びたいと思っていることが、6章では示唆される。"the same yearning for intimate comradeship" (106) や "some living fellowship" (107 イタリックは原文) など、マイティップを想起させる言葉は、6章で頻繁に使われている。4章でも、"I feel I must fight out something with mankind yet. I haven't finished with my fellow-men. I've got a struggle with them yet" (68 イタリックは原文) と、サマーズはハリエットに主張するほどだ。さらに、「生および生の最も強い衝動 ("life's deepest urges")」(112) に突き動かされるディガーズの荒々しい男性性と、ブッシュの野生は、呼応しているように思われる。

しかしながら、母国イギリスでは得ることができなかつたマイティップに惹かれながらも、サマーズは、それに身を委ねることができない。マイティップが体現する共同体の魅力と、「海の中を孤立してスイスイと泳ぎ回る魚 ("isolated swift fish")」(125) が体現する孤独な精神世界との間で揺れ動くサマーズの内的な葛藤は、以下のように語られている。

He half wanted to commit himself to this whole affection with a friend, a comrade, a mate.... All his life he had cherished a beloved ideal of

friendship – David and Jonathan. And now, when true and good friends offered, he found he simply could not commit himself, even to simple friendship. The whole trend of this affection, this mingling, this intimacy, this truly beautiful love, he found his soul just set against it. (106-07)

ここで、サマーズがマイツップに入り込めない理由の1つとして、ディガーズのマイツップが、指導者を必要とすることを挙げたい。さらに、その指導者の提示する規律への服従が求められることは、コールカットの “When you've [Somers] been through the army, you know that what you depend on is a general, and on discipline, and on obedience” (89 イタリックは原文) という発言からも明らかだ。カンガルーという愛称で知られる、組織の指導者クーリー (Benjamin Cooley) も、“Yet there must be the law, and there must be authority” (112) と述べ、制度化された組織においては、指導者の提示する規律の遵守が必要と考える。マンダーソン (Desmond Manderson) の近年の著書 *Kangaroo Courts and the Rule of Law: The Legacy of Modernism* (2012) では、ある法の下に営まれる共同体ディガーズの姿が、そのタイトルを通して、「カンガルーの法廷」(“Kangaroo Courts”) と表現されている。

このように、カンガルーは、組織の一員でありながらも、マイツップではなく、「憲法 (“a constitution”)」(112) を制定する「君主 (“tyrant”)」(112) であるのだ。マイツップの基本原理として「平等」を唱えるローソンらのブッシュ文学と、『カンガルー』との相違点は、マイツップからリーダーシップが生まれることへの危惧をロレンスが描いた点にあると言える。

ここで、サマーズがディガーズに身を委ねられない2つの理由を考える。マイツップにリーダーが存在すること以外にも、マイツップを信じられない理由がサマーズにはあった。そのためには、12章「悪夢」を考察する必要がある。戦時中のロレンスのトラウマ的な体験が綴られる「悪夢」では、母国イギリスこそが、腐敗したマイツップの象徴であり、ディガーズがイギリスの内なる他者であることが露呈されるからだ。

「悪夢」の冒頭ではまず、サマーズがイギリスで、多くの恐怖を体験していたことが明示される。そして、政府や一般大衆は、「犯罪者 (“the criminal mob”)」

(212) と表現され、イギリスの男性が理性を失って戦場に向かうのとは対照的に、どの集団にも属すことができない、孤立したサマーズの姿が描かれる。これは、軍事組織ディガーズに入りこめない、オーストラリアでの彼の姿と重なる。また、戦時中の画一化された「大衆の精神 (“the vast mob-spirit”)」(213) に支配され、戦争へと押し流される人間は、「男らしい孤立 (“manly isolation”)」(213) を失っていると、否定的に述べられる。教会のような組織にオーストラリアを導くという大言壯語なスローガンのもと、特定の規律に従うこと強いるディガーズと、「愛国心 (“patriotism”)」(212) や「民主主義 (“democracy”)」(212) という、漠然とした大義名分のもと戦場に送り込まれるイギリス人兵士の姿は、個としての自律を失う点において、こうして重なり合うのである。

さらに「悪夢」では、ドイツ軍の空襲によって破壊される1915年のロンドンが描かれ、戦争一色に染まっていく大衆の姿が、執拗に繰り返し強調される。そして、大衆の各々が「孤立したひとりの人間 (“a separate, single man”)」(214) になることを阻害する戦争、つまり「人間冒涭と破壊の精神 (“the spirit of collapse and of human ignominy”)」(217) から離れるように、サマーズ夫妻は、イギリス南西部のコーンウォルに移る。しかし、大西洋に面したコーンウォルで新しい生活を送ろうとするサマーズ夫婦は、海岸警備隊による厳しい監視を受けることになる。さらに、自国の警察から猜疑の目で見られるだけではなく、サマーズは、この地で徴兵検査に呼ばれる。これがサマーズの「悪夢」となるのである。刑務所のような兵舎は「牢獄 (“gaol”)」(218) に例えられ、そこでサマーズは、医者による身体検査を受けることになるが、その結果サマーズは、「R - 不合格 (“R. Rejected”)」(220) という「恥ずべき文字 (“the ignominious word”)」(220) が記されたカードを渡される。サマーズは、前線ではなく、銃後に回され、何らかの形で戦争が象徴する集団行為に協力することを求められるが、「R」と書かれたカードや、「兵役免除 (“We shall *reject* you”)」(219 イタリックは著者) という医師の言葉によって、サマーズの男性性は、否定され、深く傷つけられたのである。その後、サマーズは、再び軍隊に召集されるが、前回と同様に、「英國の同胞 (“English, his own people”)」(219) から拒絶 (“reject”) される結果となった。また、サマーズは、軍隊という大きな組織からだけではなく、コーンウォルの自宅から退去するように命じられ、愛着を持った西の果ての土地からも

追い出されてしまう。サマーズは、母国イギリスにおいて、居場所を失うのである。

このように、戦争に否応なく巻き込まれ、しまいに、その集団から一方的にはじき出されるという恥辱は、サマーズにとってトラウマとなっていく。と同時に、この体験はサマーズに、イギリス社会の求める規範を満たし、共同体の一員として責務を果たすのではなく、「一切の圈外（“outside of everything”）」(222)に存在し、束縛のない自由な「思想の冒險者（“thought-adventurer”）」(222)として生きようと思わせるのである。集団と距離を置く孤高な自己を尊重しようと決心するサマーズの様子は、以下のように語られる。

Richard Lovatt had nothing to hang on to but his own soul. So he hung on to it, and tried to keep his wits. If no man was with him, he was hardly aware of it, he had to grip on so desperately, like a man on a plank in a shipwreck. The plank was his own individual self. (222)

このように、戦時中の悪夢へのフラッシュバックは、共同体への不信感や不安感を、サマーズに再認識させた。また、共同体ではなく、「自分の魂（“the individual self”）」と向き合うことに安らぎを覚えた戦時中の記憶は、サマーズがマイツップを棄却する後押しとなる。その結果、特定の価値観に個人を収斂させるディガーズのマイツップや、そこから生まれる過度なリーダーシップから逃げるかのように、最終章でサマーズが、ブッシュへ向かうのは興味深い。自然を礎として生まれたマイツップが政治的解釈を帯びる時、マイツップは本来の意味を保てるのか、という問題に対して、ロレンスは首を横に振ったのだ。政治体を構成しない人間が、生存のためにブッシュという自然の中で団結している間は、ローソンの作品のように、互いに協力するという肯定的な意味でマイツップを捉えることができるが、マイツップが政治的で社会的な意味合いを帯びると、本来の意味から派生して、誤った解釈が付加されていくかもしれない、とロレンスは考えたのだ。

一方でブッシュは、社会における画一化や集団的束縛から個人が解放されて、「1人で」存在できる場所として、最終章で描写される。本稿の1章で考察した

ように、上陸当初は違和感を覚えたブッシュが、サマーズの心象風景となるのだ。なぜならば、集団ではなく、孤立した自己に戻ろうとするサマーズの孤高さと、勇猛にも毅然と存在するブッシュの「沈黙の世界（“the age-unbroken silence of the Australian bush”）」(354) が、共鳴し合うからである。サマーズは次のように、楽園としてブッシュを見做し始めるほどである。“.... as if angels had flown right down out of the softest gold regions of heaven to settle here, in the Australian bush.... Yet a stillness, and a manlessness, and an elation, the bush flowering at the gates of heaven” (355)。このように、人気のない静逸としたブッシュは、他者との対話のない孤独な世界に安らぎを求めるサマーズの心情を映し出しているように感じられるのである。

以上のように、マイトと「共に」存在する場所として、ローソンを始めとするオーストラリア人作家がブッシュを捉えたのと対照的に、マイトシップから自由になる場所として、ロレンスは大自然ブッシュを描いた。ここに、集団とブッシュが結びつくローソンらのブッシュ文学と、ロレンスの『カンガルー』の決定的な違いがあるのである。

結び

ロレンスは、マイトシップというブッシュ文学特有のモチーフを、確かに『カンガルー』に織り込みながらも、ブッシュ文学との相違点を提示した。言い換えると、人との繋がりを求めるながらも、孤独に立ち返ってしまうロレンス自身の挫折を、マイトシップというブッシュ文学の伝統をその背景に巧みに織り込むことで、明確に浮き彫りにしたと言える。連帯に憧れながらも、どうしてもそれに入り込めない葛藤を描くために、ロレンスは、ブッシュ文学を器用に利用したのではないかと、考えられるのである。

20世紀前半は、パウンド (Ezra Pound) とイタリアの軍事組織、ジョイス (James Joyce) とアイルランドのナショナリズム、ハイデガー (Martin Heidegger) とナチズムなど、ファシズムの萌芽があらゆる場所で現れ、作家や思想家を惹きつけた時代であった。『カンガルー』では、最終的に共同体や指導者の権威が否定されるが、オーストラリアからアメリカに渡ったロレンスは、再度作品の主題として、リーダーシップや共同体を選び、その結果生まれたのが

『羽鱗の蛇』(*The Plumed Serpent*) である。西洋「文明」が生み出した思想であり、集団的結合の象徴とも言える全体主義を、ロレンスが敢て、非ヨーロッパ諸国の「文化」の中で描いた点は興味深い¹。本稿では、『カンガルー』に登場する女性に言及することができなかったが、今後は、ジェンダーや神話の視点から、ロレンスの離国作品を読むことを課題としたいと思う。

註

本稿は、日本ロレンス協会第46回大会（2015年6月27日、愛知大学）における口頭発表の原稿に基づき、それに加筆・修正を加えたものである。

¹ オーストラリアでの実地調査を行ったダロックは、『カンガルー』の登場人物が、実在の人物をモデルとしていることを明らかにした。ダロックは著書の中で、スコット (Jack Scott) や、ローゼンタール (Charles Rosenthal)、そしてスクリヴィナー (Bertie Scrivener) をはじめとするオーストラリアの退役軍人が、『カンガルー』執筆に影響を与えたと主張している。そして、スコットら3人のイメージが複雑に融合された人物こそが、ディガーズのメンバーであると強調している。例えば、ジャズ (Jaz) という愛称のジェームズ (William James) は、スクリヴィナーとローゼンタールの両者が混同された、巧妙かつ複雑な描かれ方をされていると、ダロックは指摘している (Darroch 53)。しかしながら、デイヴィス (Joseph Davis) は、ダロックの論を否定しており、その真偽を巡って様々な論争を巻き起こしたダロックの主張は、"The Darroch Thesis" として知られている。

² イーストウッドの森を舞台とした『チャタレイ夫人の恋人』では、3月の森の中で蘇生する植物の命が、瑞々しく描写されている。ここで描かれる自然は、『カンガルー』の冒頭に登場する陰鬱な冬のブッシュとは異なり、太陽の暖かさのもとで生気に満ち溢れている。さらに、光に満ちたその自然は、人間であるコンスタンスの存在を受け入れ、彼女を「不思議に興奮 ("strangely excited")」(86) させる。また、生まれたばかりの雛鳥をコンスタンスが目にする場面では、薔薇色の太陽が、美しく森を照らし、生まれ変わった森の中で、雛鳥の新しい命を見たコンスタンスは、感涙にむせぶ。生命を育まない不毛なブッシュが、サマーズを震え上がらせたのとは対照的で

ある。

- 3 ニューヨークから、療養のために南イタリアにやって来たジュリエットは、オリーブや葡萄が成る新天地で、太陽に裸体を晒す。そして、地中海に面した岩場にて、イタリアの自然や太陽と交感することによって、健康や女性性を取り戻す。『チャタレイ夫人の恋人』同様に、海辺を照らす太陽が、心身ともにジュリエットに活力を与えていた様子は、次のように語られている。“She could feel the sun penetrating even into her bones: nay, further, even into her emotions and her thoughts. The dark tensions of her emotion began to give way, the cold dark clots of her thoughts began to dissolve”(277–78).
- 4 2011年の12th International D. H. Lawrence Conferenceにて、エガート(Paul Eggert)は、“D. H. Lawrence and Henry Lawson: A Parallel Path”というタイトルで講演を行い、ロレンスが『ブレテン』を読んでいた可能性を指摘している。
- 5 『ブレテン』は、アーチバルド(J. F. Archibald)と、ヘインズ(John Haynes)によって、シドニーを拠点として、1880年に創刊された。ローソンと対照的に、ブッシュをロマンティックに描いたパタースン(Banjo Paterson)のようなブッシュ作家も存在したが、オーストラリア人読者の心を掴んだのは、前者であった。
- 6 マンダーソンは、政治的ロマン主義の、権力や指導者への志向を、シュミット(Carl Schmidt)を例に挙げて説明し、全体主義がロレンスにとっても魅力的に映ったことを主張している。“Yet, like many a romantic seeking a way out Weber's 'iron cage' of modernity, he felt strongly the lure of authoritarian solutions to the institutional crises which grew out of the Great War”(Manderson 56 イタリックは原文)。

引用文献

Abjorensen, Norman and James D. Docherty. *Historical Dictionary of Australia*. Lanham: Rowman & Littlefield, 2014. Print.

- Clarke, Marcus. "Preface." Adam Lindsay Gordon. *The Poems of Adam Lindsay Gordon*. Raleigh: Hayes Barton, 2000. 4-7. Print.
- Darroch, Robert. *D. H. Lawrence in Australia*. Melbourne: Macmillan, 1981. Print.
- Edelson, Phyllis Fahrie. *Australian Literature: An Anthology of Writing from the Land Down Under*. New York: Ballantine, 1993. Print.
- Ellis, David. *D. H. Lawrence: Dying Game 1922-1930. The Cambridge Biography*. Vol 3. Cambridge: Cambridge University Press, 1998. Print.
- Humma, J. B. *Metaphor and Meaning in D. H. Lawrence's Later Novels*. Columbia: University of Missouri Press, 1990. Print.
- Lawrence, D. H. *Kangaroo*. Ed. Bruce Steele. Cambridge: Cambridge University Press, 1994. Print.
- . *Lady Chatterley's Lover*. London: Penguin Books, 1994. Print.
- . "Sun." *The Woman Who Rode Away and Other Stories*. Ed. Dieter Mehl and Christa Jansohn, Harmondsworth: Penguin Books, 1996. Print.
- Lawson, Henry. *Henry Lawson Poems*. Sydney: Angus & Robertson, 2000. Print.
- Manderson, Desmond. *Kangaroo Courts and the Rule of Law: The Legacy of Modernism*. New York: Routledge, 2012. Print.
- Ninn, Anaïs. *D. H. Lawrence: An Unprofessional Study*. Athens: Ohio University Press, 1994. Print.
- Rees, Marjorie. "Mollie Skinner and D. H. Lawrence." *Westerly* 1 March. 1964. Web. 19 August 2015.
- Stephenson, P. R. "The Foundations of Culture in Australia." *The Words that Made Australia*. Ed. Robert Manne and Chris Feilk, Collingwood: Black Inc, 2014. 43-55. Print.

Australia's Bush Literature and Lawrence: Nature and Community in
Kangaroo

Ayu KATO

Kangaroo (1923), one of Lawrence's provocative novels, has often been criticized for its incoherent narrative structure and unrealistic characters. However, Lawrence's portrayal of Australian bush has received positive response by critics who consider the bush to be a key component of *Kangaroo*. The bush means "uncultivated wilderness" of Australian mysterious soil, which completely differs from European picturesque landscapes. In fact, Lawrence was a keen observer of the bush, which had an immense impact on his writing. However, Lawrence is neither the first nor the only writer who cast attention to the bush. In general, how to represent the bush is an important theme of Australian literature that has produced a great number of so-called "bush literature." Considering Lawrence had read some magazines full of bush stories during his stay, it can be guessed that *Kangaroo* was inspired or influenced by the prevailing Australian bush stories.

This paper considers how similar or different *Kangaroo* and Australian bush literature are, by exploring the works of Marcus Clarke and Henry Lawson. Given that Lawrence redefines the meaning of the bush in relation to a political union, this paper focuses on two things: nature and human communities. Then, the paper clarifies a peculiar place where Lawrence stands in the tradition of the Australian bush literature.

D・H・ロレンス『虹』における生命、物質、 そして個体性

巴山 岳人

序論

1914年6月5日に、D・H・ロレンスはE・ガーネット（Edward Garnett）に宛てていわゆる「炭素の手紙」を送っている。この手紙については従来から『虹』（*The Rainbow*, 1915）との強い関連が指摘されてきたが、特に目を引くのがそこに示されているロレンスの一貫のとまどいである。

I don't care about physiology of matter—but somehow—that which is physic—non-human, in humanity, is more interesting to me than the old-fashioned human element... it is the inhuman will, call it physiology, or like Marinetti—physiology of matter, that fascinates me. (Lawrence, *Letters II* 182-83)

ダッシュや言い換えが多用されているこの文面には、自身の考えをうまく伝えられないもどかしさを感じているロレンスの姿を読み取ることができる。その原因は人間の「非人間的な」側面への見方にあるだろう。つまり人間の「生理学」または人間の活動を生み出す物理的な作用に興味を覚えつつも、明らかに機械とは異なる生命を帯びた人間の物質性をどう表現すればよいかという点で、ロレンスは明確な言葉を選び出せずにいる。

ここでロレンスが示しているとまどいは、当時の（新）生氣論者と称されたH・ベルクソン（Henri-Louis Bergson）やH・ドリーシュ（Hans Driesch）らの著作にも見出せるものである。彼らもまた生命とその物質的側面との関係を理解しようとする中で、それぞれの思想を構築していったといえよう。本論は特にベ

ルクソンの「創造的進化」(*Creative Evolution*, 1911 [L'évolution créatrice, 1907]) を参照しながら、そこにみられる生命観をてがかりにロレンスの『虹』を考察することをねらいとする。その中で生物の物質性や個体化といった概念が密接に関わってくることが示されるだろう。最終的には第3世代のアーシュラの自己生成について、これまであまり取り上げられることのなかった彼女の妊娠にも注目しながら、それらのテーマとの関連を検証してみたい。

1. ベルクソンの「創造的進化」にみられる生命哲学

19世紀後半における生物学の発展は、生命に対する見方を大きく変容させたといえる。林真理と廣野善幸によれば、19世紀初頭にはじめて「生物学」が誕生して以来、生命について体系的に説明しようとする試みが繰り返されてきた。その中でも特に重要であったのが、細胞説と進化論であったという。細胞説は植物と動物が共通の組成構造を有しており、よってそれらが同じ法則により説明可能であることを示した。一方進化論は「すべての生物の単一の起源がある」こと、そして「そこに自然選択という規則性があること」を提示したのである（林、廣野 11）。さらにこの時期の生物学の確立に寄与したのが「物理・化学的な手法の導入」であり（林、廣野 14），それは様々な生命・生理現象の説明に適用された。このように19世紀から20世紀にかけての生命観においては、還元論的・機械論的な見方が主流となりつつあったのである。

ベルクソンがその著作を発表し始めたのは、こうした実証主義的科学の隆盛の時期であり、「創造的進化」にはその影響と共にそれに対する批判を看取することができる¹。本書においてベルグソンは、そうした還元主義的な手法に対して明確に疑念を呈している。しかし他方で生物が物理・化学の諸法則の例外であるというわけではなく、それらにしたがって存在しているという認識が随所で示されている。むしろベルクソンが強調するのは、生命はそうした還元論・機械論的な視点だけでは説明しつくされない、ということである。つまり「曲線が直線で構成されているわけではないのと同様に、生命も物理・化学的要素から成っているわけではない」のであって、こうした科学が扱えるのは「死んだもの」にすぎないと、ベルクソンはいう（Bergson 31, 35）。このような言葉からうかがえるように、ベルクソンは静止した時間においてではなく、流れや動きの中で生物を

理解することを重視している。生命は常に絶えざる変化の中にある、「状態そのものが変化以外のなにものでもない」(Bergson 2)。よってベルクソンは生命を予測できない可能性に満ちた、不可逆的な「傾向」であるとみなす。「生命の諸特性は決して完全に実現されない、常にその途上にあるとしても、それらは^{状態}というよりは^{傾向}なのである」(Bergson 13 [強調原文])。

こうしたベルグソンの「生命の哲学」(Bergson 50) はまた、個体性に重きをおくものもある。生命は「個体性の追求」を示すものであり、「自然に孤立し閉じた組織を構成しようとする」とベルクソンはいう (Bergson 15)。こうした個体は所与の環境が行使する影響力に服従することで機械論的に形成されるのではなく、むしろ自ら創造的にそれへ「応答する」という形で「適応する」(Bergson 58)。そのようにして「生の自発性は新しい形態が他に引き続いている」という絶え間ない創造によってあらわとなる」(Bergson 86)。

ベルクソンにとって流れとしての生命は、一つの生物個体についてのものだけでなく、世代間にわたってのものもある。その流れは源にある「はずみ (impetus)」から発し、「発達した有機体という媒体を通して、ある世代の胚から次の世代の胚へと通過する」(Bergson 87)。しかしながらこのような場合、ベルグソンによって最も重要視されるのは流れそのものであり、この点において生命の個体化に関する彼の批判的な見方が表出することとなる。物質化した有機体は生命の動きを「無限に遅らせる」(Bergson 181) ように作用するので、よって生命は「不活性な物質 (inert matter) の法則から自らを逃そうと全力を尽くす」とベルクソンは述べるのである (Bergson 245)。ベルクソンは生物に還元主義的な科学により理解できる以上のもの、すなわち動きや流れとしての生命を見出そうとしている。しかしそれゆえに物理・化学の対象である物質性に対して、生命が個体として形をとるのはそれによってであるにもかかわらず、「不活性な」ものとして否定的にみなしてしまっているのである。ここにおいて、ベルクソンと前節で確認した「炭素の手紙」におけるロレンスとは、その対応は異なるといえ同じ問題系の中に位置しているといえよう。次節からは『虹』のテクストに沿いながら、そこでのベルクソンとの近似性、そして生命と物質性との問題意識がどのように反映されているのかを確認していきたい。

2. ロレンスの生命観における物質性と個体形成

『虹』のテクスト形成過程とも関連の深い「トマス・ハーディ研究」においては、主に進化論を思わせるような生物学的語いや概念の使用をテクストの随所に確認することができる。それは「ハーディ研究」の構成要素としての生物学の大きさを示すものといえるだろう。そしてそこではまた『創造的進化』でのベルクソンと同様に、生命の個体化に関する議論が行われている。しかしその見方については、微妙な差異を見出すことができる。

ロレンスは成長する人間について、それが「震えながら伸びようとしている生の若枝」であるというが、その一方でその成長がすでに木の幹となって存在している部分の反復となることを批判する (STH 34)。それは「すでに証明され蓄積された経験」に留まることに過ぎず、人にとっては「牢獄」を意味するからである (STH 35)。この点においては、変化や動きを重視するベルクソンの論と共通するもののように思われる。しかしロレンスは彼とは異なったところに力点を置く。

For is he [a man] not in himself a growing tip, is not his own body a quivering plasm of what will be, and has never yet been.... And is not this his deepest desire, to be himself, to be this quivering bud of growing tissue which he is. (STH 35)

人の個体化について述べられたこの箇所で読み取ることができるのは、「震えるプラズム」や「成長する組織」といった言葉にみられるように、それが生物の細胞レベルでの作用としてとらえられていることである。さらに“in himself”や“his own body”, “his deepest desire”などの表現は、その成長の変化が他の外部からではなく、その細胞自体の内部からもたらされる動きや力によるものであることを強調している。いわばここでは生物の細胞自らのはたらきが生命を生み出し、そしてそれを駆動させているという見方がなされているのではないだろうか。その点において、流れとしての生命を重視することにより物質性に対して批判的であったベルクソンとの差異を見出すことができるだろう。その違いはまた、ロレンスが「若枝」とした有機体の個体性が、ベルクソンでは「こぶ (excrescence)」

と表現されているところにも表れているように思われる (Bergson 27).

ただベルクソンとロレンスの見解が対立している、というわけではない。むしろロレンスの物質性への関心は、還元主義的な科学に対してベルクソンが提示した生命のあり様にさらなる可能性を付与するものであるといえるのではないだろうか²。以下ではこれまでにベルクソンとロレンスを通じて得られた生命とその物質性についての視点と『虹』との関連について、特に第3世代のアーシュラの表象に注目しながら考察してみたい³。

『虹』の第3世代がアーシュラの自己の成長の物語であることについては、論を待たないであろう。そしてそこにベルクソンの示したような、常に変化の中にいるというあり方もまた見出すことができる。たとえばアーシュラが大学入学後に自らの人生に思いを巡らす箇所では、「それぞれの段階で彼女はとても違っていた。しかし彼女は常にアーシュラ・ブラングウェンであった」と述べられている (R 404-05)。ここではベルクソンとの近似性を指摘することにくわえて、さらにもう少し思索を先に進めてみたい。つまり各段階で「違っていた」にもかかわらず、なぜ彼女は「常にアーシュラであった」のだろうか。このように聞くことで、彼女のアイデンティティを支えている生物学的身体が否応にも視界に入ってくることになる。ケンブリッジ版の注はここで「炭素の手紙」の同素体についての言及を参照するように示しているが (R 532)、いわばこの箇所には、新陳代謝による変化と成長を繰り返しながらも、常にアーシュラの個体性を創出し保持している物質的存在としての生物のあり方が前景化されているのではないだろうか。

こうした読みを可能としているものとして、アーシュラが顕微鏡で細胞片を観察する場面の存在が挙げられるだろう。ここでアーシュラはフランクストン博士による「生命は物理的そして化学的活動の複合体から成る」とする還元主義的な見解に反感を覚えながら顕微鏡に向かっている。そこで観察されるのは細胞がプレートの上を動く様子とその「核の輝き」であり、それに対して彼女は「それは生きている」という直観を得ている (R 408)。しかしここでアーシュラに生命の存在を看取させたのは、細胞が動いているというその事実だけではない。それは一つには、彼女がそこに「目的」ないしは「意思」を見出したことによる——「何の目的のために数えきれないほどの物理的そして化学的な活動が、顕微鏡の

下のこのほんやりとした動く点に結びついているのだろう？ それらを結びつけてそして彼女が見ているひとつのものを創造している意志とはいっていい何なのであろう？」(R 408)。この自問に対し、アーシュラは「自己になること」という答えを想起するが (R 408)，さらに彼女はそこから以下のような啓示を得るに至る。

She only knew that it was not limited mechanical energy, nor mere purpose of self-preservation and self-assertion. It was a consummation, a being infinite. Self was a oneness with the infinite. To be oneself was a supreme, gleaming triumph of infinity. (R 409)

ここに示されているのは、細胞が示す個体化のはたらきにくわえて、それが「無限との一体化」でもあるという認識によりアーシュラが生命を感じているということである。そしてこの「無限 (the infinite)」はどのように解釈することができるだろうか。ここでそれを一つの個体にとどまらない生命の広がりの感覚としてとらえるとすれば、このアーシュラの生命の認識には、ベルクソン的な流れとしての生命観に近いものを見出すことができる——「各々の個体は生物全体と見えないつながりで結ばれているといつてもよい……もしも生命の世界に目的があるとすれば、それは分割できないような一抱えのうちに生命全体を含みこんでいるのである」(Bergson 43)。

しかし同時に注意しておきたいのは、ここでアーシュラに上述のような生命の啓示をもたらしたのが、自己を生成しようとしている細胞の動きそのものであったということである。この点に、生命はあくまで生物としての個体における諸作用に存在し、そしてまたそこに看取されるものであるということを読み取ることはできないだろうか。すなわち生命を「物理的そして化学的活動」のみに還元することはできないとしても、それらも含めた生物個体における物質的なはたらきは、生命を認識する上で看過することはできないということがここで示されているように思われる所以である。そしてこの点はまた、本節の冒頭で参照した「ハイディ研究」における生命の物質性の強調に通じるものではないだろうか。

3. 「虹」におけるアーシュラの自己生成と物質・生命

テクストにおいては、前節で取り上げた細胞片の観察の場面がアーシュラの自己生成に、そして彼女とスクレベンスキーとの関係に強い影響をもたらしたように描かれている。アーシュラは観察の後にスクレベンスキーに会いに行かなければならぬにもかかわらず、しばらく動くことができず、彼と再会した際も「霜の陽射しのような寒気」を感じてしまう (R 409)。この点に垣間みられるよう、これまでの節で考察してきた「虹」における生命、物質、そして個体化の概念は、スクレベンスキーによる支配に対するアーシュラの抵抗に大きく関わっている。本節ではその点について確認してみたい。

再会後のアーシュラとスクレベンスキーとの性的関係においては、彼女の物質的な側面が前景化されていることがわかる。たとえば二人で闇の中を歩いている時、彼女の身体の様子は以下のように描かれている。

She quivered, taut and vibrating, almost pained.... Her limbs were rich and tense, she felt they must be vibrating with a low, profound vibration. She could scarcely walk. The deep vibration of the darkness could only be felt, not heard. (R 413)

この箇所で目を引くのが「振動 (vibration, vibrate)」という語句の反復である。アーシュラの四肢に発する振動は、「振動で振動する」といった表現が示すように、身体という物質が意志とは無関係に生み出す動きであるかのように描かれており、ついには「闇の振動」となって、周囲の震えなのかアーシュラの身体のそれなのかが不明瞭になっていく。つまりここでは、周りの環境とアーシュラの身体とが物質的に一体化していくかのような状態を読み取ることができるのである。

このアーシュラの表象には、意識の制御が及ばない身体のはたらきのうちに他の存在との物質的なつながりがあらわとなり、それゆえに人間としての境界があいまいになってくる傾向を見出すことができるだろう。その意味において、人間の物質性に注目することは脱人間主義的な可能性を示すものもあり⁴、そしてまさにその点がスクレベンスキーに対するアーシュラの抵抗の要となっている。

彼らが最後に海辺で性的関係を持つ場面では、アーシュラは月明かりの中で忘我の境地となり、「破壊の力」をもって衝動的にスクレベンスキーを求める（R444）。それに応じた彼が我に返ったあと目にしたものは、アーシュラの「普通ではない胸の動き」と「金属のように微動だにしない硬直した顔」であった（R445）。これらは意識を欠いた人間の物質的な身体性を明白に示したものだといえるが、それをスクレベンスキーは「恐ろしい姿」と形容し、すぐにでも逃げ出さないと「彼の骨が碎かれ、体が潰され、永遠に跡形もなくなってしまう」ようにならえている（R445）。

このスクレベンスキーは何に対して恐怖しているのだろうか。ここで彼は「自分自身の生きた体を愛していた」とされているが（R445）、実際に彼の身体が物理的に破壊されることではもちろんない。テクストのその少し前の箇所は、彼のその身体について「美しく」「完成している」一方で、「何の実りある豊かさ」も持たずに「積み上げられてしまって、仕上げられてしまっている」と述べている（R438）。このことがスクレベンスキーの恐怖を理解する手掛かりであるように思われる。つまり彼の身体は人間のそれとして完成したものであって、^{インヒューマン}非人間的な存在とのつながりやその中の変化の可能性を持たないことがここで暗示されているのではないだろうか。だからこそ人間としての境界が揺らいでいるアーシュラの姿を見て、自身の存在の危機を感じ怯えたといえよう。この点においてアーシュラのスクレベンスキーに対する抵抗には、彼女の自己の確立にくわえて人間中心主義に対する異議もまた申し立てられているのである⁵。

物質性が人間の脱中心化の契機をはらんでいるとすれば、そこに宿る生命的決して人間に支配されないありようを示しているのが、テクスト最終章におけるアーシュラの馬との遭遇の場面である。特にここでは彼女の妊娠と関連付けて馬の表象を解釈することを試みたい。アーシュラの妊娠については従来の批評あまり扱われてこなかったが、なかでも彼女の体内にいる胎児についての考察はほとんどみかけることがない。それはスクレベンスキーとの子供ということもあり、その存在については否定的な見方をせざるを得ないという前提が（暗に）共有されてきたことにも一因があるよう思われる⁶。

しかしこの馬との遭遇の箇所においては、胎児の生命の存在が馬の表象を通じて示され、それがアーシュラの自己実現のための思索へとつながっていることを

読み取ることができる。まずこの場面では馬の「腹（flank）」という語が執拗に何度も反復されており（R 452-53），それは否応なくアーシュラの妊娠を想起させる効果を持っている。またアーシュラの心の重さは「馬の重さであった」とされ，両者の重なりが強調されている。さらにここでの馬は，中川僚子が「巨大なエネルギーの塊」と形容したように（中川 82），男性性や自然といったような何らかの象徴ではなく，物質的なエネルギーや動きを生み出す生命のはたらきそのものを表象しているかのようである。その体は「決して緩まない」力により「引き締まった」姿を示しており，“burst”や“powerful”，“pressing”といった語は，その動きの力強さを示しているといえよう（R 452）。そしてその源は，まさに馬の腹にあることが示されているのである——「雨の間も湿り気も，脇腹の内にある激しく切迫した巨大な炎を消すことは決して，決してなかった」（R 452〔強調筆者〕）。

こうしてみるとここで馬の示す物質的なエネルギーは，まさにアーシュラの胎児の生命の動きをもまた表しているのではないだろうか。そして付かず離れずの位置を保ちながら彼女を翻弄する馬の姿は，そのような生命が人間の意志に支配されることなく独立して存在していることを意味しているようである。そうだとすれば，その馬の姿を目の当たりにしたアーシュラが自己の生成，すなわち個体化について思索することになることは不思議ではないだろう。それはあたかも，細胞片の観察がもたらした啓示と同様の役割を果たすものである。自身の妊娠および出産をスクレベンスキーとの結婚と一体のものと考えることで家父長制的価値観に従おうとしていたアーシュラは，馬との遭遇のあととの諧妄状態のうちに「なぜ子供が彼女をスクレベンスキーと結びつけるのか？ 彼女は自分自身の子どもを持てないのか？ 子供は彼女自身の問題では，本当に彼女自身の問題ではないのか？ それが彼とどんな関係にあるというのだ？」と思いを巡らすのである（R 455）。

結論

このように『虹』のテクストには，同時代のベルクソンの生命哲学との強い近似性が見出される。それは直接的な関係によるというよりは，両者が共に同じ問題系の中で思索をおこなっていたことによるのではないだろうか。すなわちそれ

は還元主義的科学に対して生命とその物質性をどのように位置付けるかという問題である。この点において、ロレンスはベルクソンとは異なり、物理・化学的側面も含めた生命の物質性のうちにより積極的な意味合いを見出し、それを個体生成の概念へ接続させているといえよう。『虹』においては、それはアーシュラの自己実現の過程に関係しており、そこでは人間中心主義に対する批判の視点もまた生み出されている。結果として『虹』のテクストには、物質が現実に対してもつその力強い潜在性をとらえようとするロレンスの真摯な思索の跡を追うことができるのではないだろうか。

本稿は日本ロレンス協会第46回大会ワークショップ「D・H・ロレンス『虹』を読む（『虹』出版100周年にあたって）」（2015年6月28日、愛知大学）における発表原稿に大幅に加筆・修正を施したものである。

注

¹ M・A・ジル（Mary Ann Gilles）は、20世紀初頭、特に1910～12年にベルクソンがその著作の英訳と英国内での講演によりブームともいえるような影響をもたらしたことを示している（Gilles 97-98）。

² ベルクソンと同時代の「生気論者」としてしばしば名を挙げられるドリーシュは、生物の物質的側面により強い関心を持っていたように思われる（ドリーシュ [2007] を参照）。しかしロレンスがその思想に直接触れていたかどうかは、今後検証すべき課題であろう。

³ J・ウォレス（Jeff Wallace）もまたロレンスにみられるベルクソンとの関係や生物の物質性への関心といった点に注目して分析をおこなっている。しかし『虹』のアーシュラの表象についてはあまり詳細には検討していない。

⁴ ロレンスのポストヒューマニズム的な側面については、ウォレスやC・ロウマン（Carrie Rohman）らも論じている。

⁵ 本論は行為体としての物質そのものが示す創発性に注目する「新唯物論（New Materialism）」から着想を得ているが、その中心人物の一人であるJ・ベネット（Jane Bennet）は以下のように述べている。 “[T]he case for matter as active needs also to readjust the status of human actants: not by

denying humanity's awesome, awful powers, but by presenting these powers as evidence of our own constitution as vital materiality." (Bennet, ch. 1)

- ⁶ たとえば以下の引用中の“liberate”という語には、どのような意図が込められているだろうか。 “[N]ear the end of *The Rainbow*, the miscarriage, of her pregnancy by Anton Skrebensky, liberates Ursula.” (Sklenicka 146)

Works Cited

- Bennet, Jane. *Vibrant Matter: A Political Ecology of Things*. Durham, NC: Duke UP, 2010. Kindle file.
- Bergson, Henri-Louis. *Creative Evolution*. Trans. Arthur Mitchell. New York: Henry Holt, 1911. Print. (ベルクソン『創造的進化』真方敬道 [訳], 岩波書店, 1979)
- Gilles, Mary Ann. “Bergsonism: ‘Time out of Mind.’” Ed. David Bradshaw. *A Concise Companion to Modernism*. Malden, MA: Blackwell, 2003. 95-115. Print.
- Lawrence, D. H. *The Letters of D. H. Lawrence*. Vol. 2. Ed. George J. Zytaruk and James T. Boulton. Cambridge: Cambridge UP, 1981. Print.
- . *The Rainbow*. 1915. Ed. Mark Kinkead-Weekes. Cambridge: Cambridge UP, 1989. Print.
- . “Study of Thomas Hardy.” *Study of Thomas Hardy and Other Essays*. Ed. Bruce Steele. Cambridge: Cambridge UP, 1985. 7-128. Print.
- Rohman, Carrie. *Stalking the Subject: Modernism and the Animal*. New York: Columbia UP, 2009. Print.
- Sklenicka, Carol. *D. H. Lawrence and the Child*. Columbia: U of Missouri P, 1991. Print.
- Wallace, Jeff. *D. H. Lawrence, Science and the Posthuman*. Basingstoke: Palgrave, 2005. Print.
- ハンス・ドリーシュ『生氣論の歴史と理論』米本昌平（訳・解説），書籍工房早

山、2007.

中川僚子「「何かがいる」という感覚——D・H・ロレンスと自然」『水声通信

【特集】交感のポエティクス』第4巻3号、水声社、2008. 76-85.

林真理、廣野善幸「近代生物学の思想的・社会的成立条件」廣野善幸、市野川容

孝、林真理（編）『生命科学の近現代史』勁草書房、2002. 1-34.

Life, Matter, and Individuality in D. H. Lawrence's *The Rainbow*

Gakuto Hayama

In *Creative Evolution* (1907), Henri-Louis Bergson criticizes the reductionist view of living things that states that they can only be explained by mechanical laws. For Bergson, life consists in continuous and unpredictable changes. It is like a flow through time which penetrates into matter and creates each individual being. D. H. Lawrence also presents ideas similar to that of Bergson, but some difference can be found between them. While Bergson regards matter as an obstruction to the life flow, Lawrence argues that each material body itself creates life and moves it forward.

In *The Rainbow* (1915), Lawrence identifies Ursula's development with the self-organization of life. In the process, Bergson-like characteristics of life such as ceaseless changes, individualization, and unity of beings are foregrounded. The text also shows that they are based on the materiality of living things. Through Ursula's strife with Skrebensky, her posthumanist corporeal life not only resists his domination but also urges her to seek her own individual self. In addition, this paper shows that the horses in the last chapter represent the vital force of Ursula's unborn baby.

特集：D・H・ロレンス『虹』を読む (『虹』出版100周年にあたって)

はじめに

田部井 世志子

D・H・ロレンスは1913年3月より『姉妹たち』の仮題で物語を書き始め、前半は1914年に入ると『結婚指輪』と題を変え、更に1915年に現在の『虹』を完成させた（後半は『恋する女たち』として1916年に完成）。今更いうまでもないだろうが、『虹』は1915年11月13日、猥褻出版物として発禁処分を受け、以後、批判が続き、物議を醸した作品である。しかし時代も変わり、その『虹』が今ではロレンスの代表作の一つに数えられるようになり、2015年の9月で出版100周年を迎えることとなった。それを記念してMLAでは2015年1月9日“D. H. Lawrence's *The Rainbow and War*”と題する会合(session)が開かれた。日本ロレンス協会においても、第46回大会において100周年を機に『虹』に関するワークショップを企画することになった。

統一的なテーマは「『虹』の現代的意義」である。近年、大学の学部・学科再編がなされる中、多くの文学部が解体され、他の名称に座を譲る傾向にあった。このような状況の中、果たして文学は役に立つかといった、文学そのものの存在意義が問題視されるようになってきた。更に拍車をかけるかのように、2015年になって、文部科学省が国立大学に対して、教員養成系や人文社会科学系の学部・大学院の廃止や社会的要請の高い分野への転換を通知したことは記憶に新しい。目に見えて役に立つことばかりが珍重される実用主義的な今日の日本社会で、肩身の狭い思いをしている人文系の領域の一つである文学が、重要かつ不可欠なものであることを発信するために、『虹』を現代にいかに生かすか、どう読むと現代の（日本）社会において役に立つか、という視点で議論ができればと考えた次第である。そこで、ワークショップでは本作品の批評史を辿るとともに、各発表者がテーマにそって、それぞれの関心の領域で作品を再評価すること

にした。発表者として麻生えりか氏、巴山岳人氏に依頼し、快くお引き受けいただいた。

本特集にはワークショップでの発表をもとに各自が作成した論考を掲載した。巴山氏の論考は投稿論文のセクションに掲載されているのでそちらを参照していただきたい。3つの論考だけでは、実に多くのものを内包している豊かな作品『虹』の全貌を概観できるはずもないが、今後の『虹』の、ロレンスの、そして包括的に文学の意義を問い合わせる動きの一部として位置づけていただければと思う。

最後になったが、鈴木俊次氏にはワークショップの当日、コメントイターとして貴重なご意見をいただき、また本誌におけるワークショップ全体の総括もお願いした。この場を借りてお礼を申し上げたい。

『虹』批評と現代社会——石炭とダイヤと工兵と

麻生えりか

1 はじめに

本稿では、2015年9月に出版100周年を迎えたD・H・ロレンスの小説『虹』(*The Rainbow*, 1915) 批評の可能性について考える。まずは、この作品の批評を概観し、そこに今、私たちが何を加えることができるのかという問題を、戦争に焦点を当てて探ってみたい。具体的には、この小説にロレンスが第二次ボア戦争を登場させたことの意義を考える。ロレンスと戦争というテーマでは、これまで第一次世界大戦に注目が集まることが多かった¹。一方、それに先立つ19世紀末に起きたアフリカでの侵略戦争である第二次ボア戦争は、ブランゲン家の年代記『虹』においては第三世代の恋人たちの会話に登場するだけで、一見すると重要な意味を持たない。しかし、石炭とダイヤと工兵をキーワードにこの戦争を読みとくことで、第二次ボア戦争が『虹』に登場する必然性、そしてグローバル資本主義と戦争の本質を鋭く見抜いていたロレンスの姿が浮かび上がるだろう。

同時に、第二次ボア戦争を描いた『虹』の現代作家にとっての意義を考えたい。ほかの作家への「影響 (influence)」というとき、性愛、機械文明批判、労働者階級の表象などの、いわゆるロレンス的なテーマが現代作家たちにいかに文化的、文学的に継承され発展されているか、という議論が中心となる傾向があり²、もちろんそれらは現代においても有効な問い合わせである。が、現代社会でますますその傾向を強めるグローバリゼーションを批判する作品として『虹』を読む本稿では、ボア戦争に出征しようとするスクレベンスキーにアーシュラが投げかける問い合わせ——「そんな遠いところで戦争をして、いったいあなたたちは何をしているのか、自分で分かっているのか」という問い合わせ——に対して、スリランカ系

カナダ人作家マイケル・オンダーチェ (Michael Ondaatje, 1943-) が小説『イギリス人の患者』(The English Patient, 1992) において、いかなる「応答(response)」をしているかを考える。『イギリス人の患者』は、『虹』のテクストが投げかけた問いを異なるコンテキストに置き換えて繰り返すことで、戦争の愚かさを訴え、その向こうにある平和を志向しようとする。『虹』が提示した戦争への意識を現代小説がいかに自らの問い合わせているか、つまり時代と場所を超えた作品同士の応答を考えることで、『虹』批評のあり方を模索し、現代におけるロレンスの「存在(presence)」(Goodheart 142) の意義を再確認することが本稿の目的である。

2 これまでの『虹』批評

昨今、ロレンスの作品は人気がないらしい。アメリカの大学のシラバスから抜け落ちて久しいロレンス作品を授業で読んでも、ほぼ全員の学生がロレンスに強い反感を抱くことに危機感を持ったゲーリー・エイデルマンは、110人の現代作家たちに手紙を出し、以下のようにロレンスの意味を問いかけた。

Why is D. H. Lawrence no longer important? For some time now I have felt in my bones that he has 'disappeared' as a point of reference for writers, especially novelists. As a matter of fact, he has undergone a sudden, remarkable decline at the university. Not so long ago we thought him one of the most astonishing writers of the century! (Adelman 28)

エイデルマンが手紙を出した作家110人のうち、返事が来たのは44人だった。その中には、ドリス・レッシング、ジョン・ファウルズ、A・S・バイアット、マーガレット・ドラブル、ティム・オブライエンなど、ロレンスを熱烈に支持する作家たちがいる一方で、ロレンスをまったく重視しないと言う作家もいたという (29)。そもそも彼が手紙を送った作家の半分以下の44人しか返答しなかったという事実は、21世紀を生きる作家にとってロレンスの位置づけがけっして高くないことを示している。大学生にも作家にも読まれなくなったロレンスの代表作品『虹』は、これまでどのように読まれてきたのだろうか³。

論集 *New D. H. Lawrence* (2009) を編纂したハワード・ブースは、1970年代末に始まったケンブリッジ版ロレンス作品の刊行により、ロレンス批評に転機がもたらされたと指摘する。それは、リーヴィス批評が固定化した作品間のヒエラルキーにとらわれない批評、つまりマイナーで注目に値しないという低い評価に甘んじてきた作品を扱う批評が増えたことを意味する。しかしその一方で、ロレンス作品のキャノンとされ、多くの批評が著されてきた『虹』や『恋する女たち』に関する注目すべき研究が近年出されていないことも彼は指摘する (Booth, "Introduction" 2)。このような状況を前に、私たちは今、小説『虹』について何を論じることができるのだろう。まずは、この作品の批評を振り返ることから始めたい。

『虹』の批評を概観するにあたり、本稿では、神話対歴史、ジェンダー、セクシュアリティ、現代作家への影響という4つの観点から紹介する。最初の「神話対歴史」の「神話」とは、「神話的解釈」を意味し、男女の生（性）の営みを不变の真理として描いた神話として『虹』を読む解釈を指す。その代表格が *D. H. Lawrence: Novelist* (1955) におけるF・R・リーヴィスの批評である。

The rendering of the continuity and rhythm of life through the individual lives has involved a marvellous invention of form, and no one who see what is done will complain of the absence of what is not done. It is the same life, and they are different lives, living differently the same problems—the same though different—in three interlinked generations: that is how the form is felt.... The wealth of the book in this respect is such as must make it plain to any reader that, as social historian, Lawrence, among novelists, is unsurpassed. (Leavis 172-73)

“continuity”, “rhythm”, そして繰り返される “same” という言葉には、プラングウェン家の年代記に普遍的な人間の姿やモラルを読み取ろうとするリーヴィスの姿勢が表れている。したがって、引用最後の “social historian” とは、時代の流れに押し潰されることなく代々受け継がれる精神を追求する人々の姿、すなわち普遍的、根源的な人間のあり方を描く作家という意味で使われているのだ。

リーヴィス批評の影響力の大きさについては今さら指摘するまでもなく、どんな『虹』批評も彼の批評を無視することは不可能だったと言っても過言ではない。

一方、「神話対歴史」の「歴史」は「歴史的解釈」を指し、同時代の社会の急速な変化、とりわけそれに伴う社会の矛盾や闘争の反映を小説に読み取ろうとする読み方のことである。マルクス主義者のグレアム・ホルダネスは、文明社会への憎悪をあらわにしながらもそれと正面から戦うことを避ける主人公を描く『虹』は、ばらばらの神話や非現実的な悪夢から成る失敗作であり、歴史から逃避した作品だと酷評した。“A novel like *The Rainbow*...excludes so much and orders its inclusions in such a way that it ceases to be a realist novel at all; and in doing so(though this is by no means an inevitable conclusion)it ceases to be a historical novel”(Holderness 12). ホルダネスが槍玉にあげるのは、アーシュラが一目見て“gruesome dream”(Lawrence, *The Rainbow* 321)⁴を見ているようだと強烈な嫌悪感を覚え、その中に入りこむことのない炭鉱町ウィギストンの描写などである(Holderness 177-81)。リーヴィスとホルダネスの『虹』批評は、その歴史観、小説観、作品評価において一見鋭く対立している。しかしながら、前者が人間の生命力と普遍性、後者が社会変化と階級闘争という、自らが最も重視する価値観の反映を小説に見い出そうとし、見い出せない場合には小説自体の評価を下げる批評姿勢において、共通点を持つともいえるだろう。

ケンブリッジ版ロレンスの伝記第2巻の作者で、ケンブリッジ版『虹』の編者でもあるマーク・キンキード・ウイークスは、“The Sense of History in *The Rainbow*”(1989)において、リーヴィス批評とホルダネス批評の中庸ともいえる批評を展開する。以下の引用の前半部では社会の変化という「歴史」、後半部では男女の普遍的な姿を通して描かれる「歴史」、それぞれの反映をこの小説に見ている。

The novel will turn out also to be very much concerned, though in Lawrentian ways, with major changes in English life between 1840 and 1905: with effects of industrialism and urbanisation, with education, the emancipation of women, the decline of religion.... *The Rainbow* is very much aware of how the widening horizons of Ursula's generation relate to

the mine and the factory.... History, for Lawrence, is only to be finally understood in terms of the timeless deep-structure within personal stories, those basic and opposite impulses within all people and relationships... (Kinkead – Weekes 122-31)

キンキード・ウイークスは、都市化や教育制度の拡充、女性の社会進出など、当時のイギリスにおける重要な社会変化の反映をこの小説に見出し、『虹』はホルダネスが考えるよりも多分に歴史的であると指摘した。アーシュラが小説最後で見る虹は、歴史を排除した個人主義的なヴィジョンにすぎないと切り捨てるホルダネス（187）に対し、キンキード・ウイークスは、その虹のかかる地平線が工場や炭鉱に支えられていると主張し、アーシュラが現実から逃げてはいないと反論したのである。言い換えると、ホルダネスが社会闘争という狭義の歴史、“The History”を重視するすれば、キンキード・ウイークスは、広義、しかも複数の“histories”に目を向けているといえるだろう。結果的には、先の引用最後の文章に見られるように、神話的な解釈をも排除しない彼の批評は神話的解釈と歴史的解釈の融合というべきものになっている。だが、キンキード・ウイークスの批評が神話と歴史について重要な問題提起をしたことは間違いないだろう。

先にも言及したブースは、*New D. H. Lawrence*において、キンキード・ウイークスが切り拓いた『虹』の歴史的解釈の地平をさらに拡げようと試みる。彼は、1930年代イギリスのマルクス主義批評を振り返りつつ、この小説がグローバルな植民地主義と結びついていることを指摘する。

Ursula is left acutely aware that her individual existence is conducted under a global imperial system. She is certainly not a Brangwen as constructed in Holderness's reading, believing herself abstracted from the whole, and rooted to the Marsh Farm.... *The Rainbow* defines the everyday world as unreal, where the uncertainty produced by high imperialism is answered by the utopian vision. (Booth, “*The Rainbow*” 50-52)

アーシュラの強めるユートピア志向に社会からの孤立を見るホルダネスに対し、

ブースはそれをグローバル資本主義による篡奪の結果だと解釈し、社会や歴史からの逃避だと単純に切りすることはできないと反論するのである。以上、概観しただけでも、『虹』批評における神話と歴史の問題が、これまで活発な論議を呼んできたことがわかる。

次に、『虹』をジェンダーで読み解く批評を紹介する。『虹』を女性の問題と結びつけたロレンス自身の手紙の一節は批評家によってしばしば引用され、攻撃も擁護もされてきた。その一節とは、1912年12月23日付のサリー・ホブキン宛ての手紙の中の 'I shall do my work for women, better than the suffrage.' (Lawrence, *Letters*, I 490)、そして1914年4月22日付のエドワード・ガーネット宛ての手紙の中で宣言した『虹』のテーマ、'...woman becoming individual, self-responsible, taking her own initiative.' (Lawrence, *Letters* II 165)、つまり、『虹』が女性についての女性のための小説であるというロレンスの言葉である。攻撃派の代表として、*The Second Sex*(1949) を著したシモーヌ・ド・ボーヴォワールの名がまず挙がる。またケイト・ミレットは *Sexual Politics* (1970)において、60年代のヒッピー文化の勢いに乗って若者たちを中心に人気を得ていたロレンス作品に通底する男性優位思想を糾弾し、その人気を失墜させたことで有名である。彼女は、『虹』の執筆当時活発だった第一波フェミニズム運動に対し、ロレンスが敬意も注意も払っていないと非難したあとで、『虹』の続編『恋する女たち』におけるアーシュラとバーキンの関係に、ロレンスの本音が表れていると主張する。 "His method here is half derogatory, half vaporous... Attentive readers will of course know that the big want is a husband, provided in the sequel in the form of Birkin, who is no less a personage than Lawrence himself" (Millett 261)。彼自身を投影した男性バーキンがアーシュラには必要だという結末を「恋する女たち」に与えたロレンスは、女性の妥協と敗北を是認しているとミレットは強く非難したのである。

他方、ジェンダー批評におけるロレンス擁護派としては、アナイス・ニン、リディア・ブランチャード、ヒラリー・シンプソンなどの名が挙げられる。とくにシンプソンは、*D. H. Lawrence and Feminism*(1982)において、ロレンスが実際に接したフェミニズム運動の状況をたどり、できるだけ中立的な立場からロレンス作品を解釈しようとした。彼女は、イーストウッドやクロイドンでの女性参

政権論者との交流を経たロレンスの女性観の変遷を追い、究極的に彼は参政権に象徴されるような法律や政治の問題に興味があったのではなく、そのような次元に還元できない女性のあるべき姿、あるいは自立をテーマとしたのだと述べる(Simpson 42)。

3つ目の批評テーマとして、セクシュアリティ、性の表象があり、この観点からロレンス作品を読む批評家に、リンダ・ルース・ウィリアムズとマリアンナ・トーゴヴニックがいる。ロレンスの描いた性というと、『チャタレイ夫人の恋人』裁判の影響もあり、性行為の描写や四文字語(four-letter word)を読者は連想しがちだが、*Sex in the Head*(1993)において“The sexuality in Lawrence's texts is not straightforward”(Williams 147)と述べるウィリアムズは、表層的な性描写にとどまらない、ロレンスによるいわば権力としてのセクシュアリティの表象に注目する。“He is a writer of sexuality in and through his struggle with the gaze, its history and its cultural objects”(148)。映画論を援用しつつ、彼女はロレンスが時に暴力にも匹敵する女性の視線をいかに巧妙に利用して性を描いているかを解明しようとする。

他方、トーゴヴニックは、“Narrating Sexuality: *The Rainbow*”(2001)において、ロレンスによるセクシュアリティの「語り」を再評価する。『虹』の執筆当時流行していたポルノグラフィーや性科学の言説が性行為そのものに焦点を当てたのに対して、ロレンスの描く性行為には人間の複雑な思考や感情を含めたセクシュアリティが表出されていること、つまり彼が性描写を通して肉体と精神の両方を語っていることを彼女は指摘し、それこそがロレンスの真価だと強調する。“Lawrence investigated sex not just as mechanical, physical action, but as a tissue of thoughts, fantasies and emotions. Lawrence *narrated sex*. Few others have even tried”(Torgovnick 47)。

最後に紹介するのは、ロレンスの現代作家への影響を探る批評である。ジョン・ベイリーは、イギリス文学の血脈となっているロレンスの存在の大きさを指摘する。

Obviously the novel after him [Lawrence] was never quite the same again: he entered the bloodstream of fiction in English in the way that Henry

Crawford, in Jane Austen's *Mansfield Park*, describes Shakespeare as being 'in the blood' of all English writers and readers. (Bayley 18)

同じく、ピーター・プレストンは“‘I am in a Novel’: Lawrence in Recent British Fiction”(2003)において、読者や批評家の間で賛否両論を巻き起こしてきたロレンスが「今も生きている」ことを強調する。本節冒頭で紹介したエイデルマンの著書 *Reclaiming D. H. Lawrence*(2002) の翌年に発表されたプレストンの論文からの以下の引用後半で何度も登場する“still”という単語には、ロレンスを前景化したいという彼の熱い思いが表れている。

What other twentieth-century writer is so frequently named, alluded to, argued with in the fiction of the past thirty years? The authors may wish to defend, re-vision, challenge, or dismiss their constructions of Lawrence's ideas.... The fact remains that in spite of all the accusations of bad artistry, misogyny, sexual and political fascism, Lawrence is still *there*, still 'in' our novels, still to be reckoned with, still our contemporary. (Preston 45)

この主張に賛同する批評家は数多く、メイヤーズ、クッシュマン、ハーマリアン、そしてプレストン自身が編纂した論集においては、ロレンスの影響を受けたさまざまな作家の作品が論じられている。その際、作家たちは階級、出身地、性別によって特徴づけられることが少なくない。労働者階級出身の作家としてアラン・シリトー、デイヴィッド・ストーリー、ジョン・ウェイン、メルヴィン・ブラッグ、アメリカ作家としてヘンリー・ミラー、シャーウッド・アンダースン、ユードラ・ウェルティ、レイモンド・カーヴァー、そして女性作家としてクリスティー・ナ・ステッド、マーガレット・ドラブル、ジョイス・キャロル・オーツ、ドリス・レッシングなどの名が挙げられている。ロレンスの影響を公言するバイアットは、小説四部作 *The Virgin in the Garden* (1978), *Still Life* (1985), *Babel Tower* (1996), *A Whistling Woman* (2002)において、自身を彷彿させる女性主人公がロレンスの呪縛から解放され自立する過程を描き、現代作家にとってのロレンスの存在の意味を改めて問い合わせている⁵。

3 「虹」と第二次ボア戦争

ペイリーやプレストン、バイアットといった熱烈なロレンス擁護派はいるにしても、ロレンス作品は近年では目立った論議を呼ばず、エイデルマンの著書が明らかにしてしまったように、現代作家の多くにとって最も重要な作家とはいえないのが現状である。だからといって、『虹』が100年前の名作であって現代世界ではアクチュアリティを持たないかというと、けっしてそんなことはない、というのが本稿の主張である。まずは、このテーマの布石となる四つの文章を紹介することから議論を始めたい。

最初は、前節でも取り上げたブースの文章で、戦争とロレンス作品という研究テーマの可能性を述べたものである。このテーマを考える際、戦争、とくに彼の経験した第一次世界大戦がロレンスに与えた影響のみに注目するのではなく、もっと広い政治的なコンテクストを視野に入れること、さらにはロレンスと他の作家の戦争表象を比較することについてはさらなる研究の余地があるというブースの指摘は非常に示唆的である。 "Though there has been much work on the impact the war had on Lawrence and his writing, there is more to be done on his relationship to the political context, as well as comparisons of Lawrence's response to the war with that of other writers" (Booth, "Introduction" 7)。ロレンスが描いた戦争と現代社会との関わりを考えることは、作品を現代社会とつなげる、「開かれた」批評を実践することになるだろう。その批評の目的は、先述したリーヴィス、ホルダネス、ボーヴォワール、ミレットらの批評のように、特定の価値基準に従って作品の優劣を判断することにあるのではない。そうではなく、一つの作品を異なるコンテクストの中で書かれた作品と結びつけることで、その意味を拓げ、時には反転し、多くの人に読まれ考えられ論じられる作品にしていく可能性を探ることにある。本稿では、本節でロレンスの描いた第二次ボア戦争を考察したあと、次節で『虹』をオンダー・チェの作品と比較し、ブースの提案する批評を試みることで、ロレンス作品の現代的意義を改めて考えてみたい。

続く二つの文章は、本稿が再考すべき主張である。まずは、社会闘争を「歴史」とみるホルダネスの『虹』批判の一節である。

At precisely that moment, in 1914, when the tragic view of society should have appeared with new urgency and insistence, Lawrence's art denied and refused that recognition. In *The Rainbow* real historical forces are abstracted into separate myths, and the myths arranged into the sequence of an 'organic/mechanical' theory of history.... Tragedy is therefore never seen as a true historical process, and never really lived through, in *The Rainbow*. (Holderness 188)

第一次世界大戦勃発の年である1914年という決定的な時期に『虹』を執筆しながら、大戦をそこに描きこまなかったロレンスは、現実の歴史に背を向け、有機的／機械的という二項対立に単純化される歴史、つまりリーヴィス的な神話の世界に逃げたのだとホルダネスは批判する。

そして、次に引用するのは、このホルダネスの攻撃に対してロレンスを擁護した拙論中の文章で、『虹』の発禁処分を逃れるためにロレンスはボア戦争を登場させ、第一次大戦を表だって批判することを避けたのだとしている。

ロレンスは、第一次大戦をボア戦争に重ねることで、当時の支配階級の政策を盲信するスクレベンスキーが体現する全てのもの——国家主義、大戦、植民主義——への批判を、アーシュラの言葉に託して間接的に表明したのではないだろうか。もし彼が、当時のイギリス政府に不満を感じながらも自国で小説を出版したいと望むなら、何らかの妥協策を見出す必要があったはずである。結果的に *The Rainbow* は発禁処分の憂き目をみたが、それは大戦批判のためではなかった。(花尻 124-25)

この作品に第二次ボア戦争が登場するのはボア戦争自体を前景化するためではなく、直接には描きにくい第一次大戦を描くためだったという指摘はほかの批評家によってもなされているし⁶、第一次大戦が『虹』執筆中のロレンスに打撃を与えたにもかかわらず、経済的理由から彼がこの小説を出版しなければならなかつことは事実だろう⁷。しかし、本稿では、第二次ボア戦争が本当に『虹』出版のための妥協の産物でしかないのかどうか、問い合わせみたい。

最後に紹介するのは、「虹」批評に必ずといっていいほど引用される、1914年6月5日付のエドワード・ガーネット宛てのロレンスの「炭素の手紙」の一節である。小説の役目は、人間の本質、元素としての炭素を描くことであって、その同素体である石炭やダイヤモンドを描くことではない、という彼の持論が展開されている⁸。

You mustn't look in my novel for the old stable ego of the character. There is another ego, according to whose action the individual is unrecognisable, and passes through, as it were, allotropic states which it needs a deeper sense than any we've been used to exercise, to discover are states of the same single radically-unchanged element. (Like as diamond and coal are the same pure single element of carbon. The ordinary novel would trace the history of the diamond—but I say 'diamond, what! This is carbon.' And my diamond might be coal or soot, and my theme is carbon.) (Lawrence, *Letters* II 183, 下線は引用者による)

本稿で注目したいのは、従来の批評で注目されてきた象徴としての炭素ではなく、引用下線部で否定的に言及されるダイヤモンドと石炭である。これらは、本質としての炭素の同素体であるがゆえに表層的で重要でないとされてきたし、実際、井上麻未が指摘するように、炭鉱夫の息子であったロレンスの作品だけでなくイギリス小説における炭鉱や石炭の表象に批評家の注目が集まることはこれまでほとんどなかったといってよい（井上 57）。しかし、エネルギー源として長きにわたってイギリスの繁栄を支えた石炭、そして法外な価値をつけられ消費社会で珍重されてきたダイヤモンドが、戦争の論理を強固に支える源としていかに『虹』に描きこまれているかという問題を考えることは、この小説の新たな解釈を生むことになるかもしれない。以上の四つの文章が提起する問題を意識しつつ、以下では、石炭、ダイヤ、工兵を軸に『虹』における戦争表象を考察する。

『虹』には戦争は直接描かれないが、第三世代のアーシュラの恋人スクレベンスキーはイギリス工兵隊に所属する軍人で、1999年から始まる第二次ボア戦争に参加する。まずは、スクレベンスキーの出征前に交わされる二人の会話を振り

返る。戦争に行って、すぐに破壊されることになる鉄道や橋を作つていいか何になるのか、まるでゲームのようではないか、と言うアーシュラに対し、スクレベンスキーは戦うことは“the most serious business”(288)だと反論する。彼はマフディーの反乱——アフリカのスーダンでイギリスも加わり戦った19世紀末の植民地戦争——を持ち出し、個人のためではなく国家の利益のために戦うことには意味があると主張する。あくまで個人として生きることを望むアーシュラと彼の会話がかみ合うことはない。

“You either kill or get killed—and I suppose it is serious enough, killing.”

“But when you’re dead, you don’t matter any more,” she said.

He was silenced for a moment.

“But the result matters,” he said.“It matters whether we settle the Mahdi or not.”

“Not to you—not me—we don’t care about Khartoum.”

“You want to have a room to live in: and somebody has to make room.”

“But I don’t want to live in the desert of Sahara—do you?” she replied, laughing with antagonism.

“I don’t—but we’ve got to back up those who do.”

“Why have we?”

“Where is the nation, if we don’t?”...

“I would fight for the nation.”

“For all that, you aren’t the nation. What would you do for yourself?”

“I belong to the nation and must do my duty by the nation.”...

“It seems to me,” she answered, as if you weren’t anybody—as if there weren’t anybody there, where you are. Are you anybody, really? You seem like nothing to me.” (287-89)

二人の間の溝の深さが明らかになるこの場面には、『虹』というテクスト自体の問題意識が刻印されている。それは、マフディーの反乱を持ち出して国家という傘の下に逃げるスクレベンスキーに対してアーシュラが投げかける問い、つまり、

「あなたはそんなところまで行つていったい何をしているか分かっているのか」という問い合わせる。「国家のため」という聞こえのいい大義に疑問を持たない人間たちが、植民地の住民の生活環境や命を破壊し、莫大な利益の獲得とさらなる搾取をもくろむ大英帝国の便利な部品になり下がっていること、つまり生を否定する戦争の非人間性をこそアーシュラは糾弾していると考えられる。

ボーア戦争勃発の報に接したアーシュラは意氣消沈し、次の引用下線部にあるように、「地獄（the bottomless pit）」に落ちたような気分を味わう。

The idea of war altogether made her feel uneasy, uneasy. When men began organized fighting with each other it seemed to her as if the poles of the universe were cracking, and the whole might go tumbling into the bottomless pit. A horrible bottomless feeling she had. (303, 下線は引用者による)

第一次ボーア戦争に負けて面目をつぶされたイギリスでは、第二次こそ勝利あるのみと国内世論が盛り上がっていたが、それとは対照的にアーシュラは、底なしの穴に落ちたような恐怖に襲われ、人間から人間性を奪う戦争の恐ろしさを実感する。

炭鉱を意味する“pit”という言葉がここでは地獄という意味で使われているが、『虹』においては実際の炭鉱が人間性を奪い取る悪の権化、つまり戦争と非常に似通ったものとして描かれていることは重要である。アーシュラは、炭鉱主トムおじの屋敷を女学校の教師インガーと訪ねた際、醜い炭鉱町ウィギ斯顿と生氣のない住民たちの姿に衝撃を受ける。彼女をもっとも驚愕させるのは、トムの家で女中として働く未亡人についての彼の言葉である。トムは、炭鉱夫だった夫や親族を次々と肺結核で亡くした彼女はもう人の死に慣れていて、誰でも大差ないのだからそのうちまた別の炭鉱夫と再婚するだろうと笑みさえ浮かべながら答えるのだ。"... The pit matters. Round the pit there will always be the side-shows, plenty of 'em."—He looked round the red chaos, the rigid, amorphous confusion of Wigginton..." (323) ここで読者は、代替のきく消耗品として人間を扱う炭鉱を国家と、部品としての炭鉱夫を兵士と置き換えて、まったく違和

感がないことに気づくだろう。トムの屋敷のまわりに広がる“red chaos”，赤く混沌とした汚らしい炭鉱夫たちの居住地は戦場をも思い起こさせる。この小説において、戦争と炭鉱はどちらも人間性を踏みにじる巨大な悪のシステムとして描かれているのである。

『虹』における炭鉱町の表象は、アーチュラと労働者たちとの距離を示す⁹からというよりも、炭鉱が当時の世界で果たした重要な役割をあぶり出す点で注目に値する。つまり、イギリスの炭鉱から産出される良質の石炭が戦争の動力源となり、世界支配の手段としての役割を担っていた点、さらには石炭が植民地をめぐる「戦争の際には戦争当事国の命運をも左右する戦略物資となった」(山崎 51)ことを暗示するのだ。世界に先駆けた産業革命の成功とその後の圧倒的な政治的経済的勢力の拡大をイギリスにもたらしたのは、国内で豊富に算出された石炭にほかならない。19世紀後半から第一次世界大戦にいたる時期のイギリスにとって、「黒いダイヤ」とも呼ばれた石炭は、工場や鉄道、家庭向けの国内消費のためだけでなく海外輸出においても最重要品の一つであった。まさしくイギリス国家の未曾有の発展と繁栄を支える基幹産業であった炭鉱業は、1913年を頂点として「空前の繁栄を享受していた」(山崎 96)のである¹⁰。と同時に、ヨーロッパ諸国や南米に輸出され、その資本主義の発展に「不可欠」であり「脅威的な存在になった」(19)。イギリスの石炭のなかでもとりわけ良質とされた南ウェールズ産のカーディフ炭は、アメリカ南北戦争やボーア戦争、日露戦争などの際には石炭を動力源としていた艦隊派遣のために一気に需要が高まり、政府によって「国家政策の切り札の1つ」(51)として大いに利用された。まさに、イギリスの石炭は世界を駆けめぐり、列強による植民地争奪戦の土台を支えていたのである。これまでのイギリス小説や批評において炭鉱や炭鉱ストライキに充分な光が当てられてきたとは言いがたいが(井上 57-58)、イギリスの発展と拡大を支えたエネルギー源である石炭そのものの役割についての記述はさらに乏しいと言わざるを得ない。前述のように、『虹』において炭鉱町を支配する非人間性が戦争の論理に重ねられることは、炭鉱こそがその戦争を可能にしていたことを考えると、必然以外のなものでもない。

アーチュラは、人間性を失った炭鉱夫によって掘られる石炭が供給する電力の恩恵を受ける現代人の一人だが、こうこうと照る町の灯りに強い嫌悪感を抱く。

以下の引用冒頭の “stupid lights” (414) に込められているのは、暗黒の中でのスクレベンスキーとの性の交わりに対立するものとしての、人間の表層的な社会生活への軽蔑である。

“The stupid lights,” Ursula said to herself, in her dark, sensual arrogance. “The stupid, artificial, exaggerated town, fuming its lights. It does not exist really. It rests upon the unlimited darkness, like a gleam of coloured oil on dark water, but what is it?—nothing, nothing.” (414-15)

引用中の “It does not exist really.” というアーシュラの言葉を、ホルダネスなら現実逃避として批判するだろうが、アーシュラは町での生活のような表層的で無駄の多い生活を選ばず、自分は資本主義の論理に屈しないで生きていくのだ、という意味でこの言葉を発していると解釈することは不可能ではない。さらに、東日本大震災と福島第一原発事故の記憶の新しい私たちはここに、自然環境を破壊し、人命を軽んじてまで得られる電力は本当に必要なのか、という問いをも付け加えることができるのではないだろうか¹¹。

石炭と同じく炭素の同素体であるダイヤモンドは、ボーア戦争をはじめとするアフリカにおける資源をめぐる流血の争いの原因となってきた一方で、「永遠の輝き」を持つ貴石として世界の人々の憧れを集めてきた。スクレベンスキーが参加する第二次ボーア戦争は、ダイヤモンドと金の利権をめぐって戦われ、数多くのボーア人（オランダ系アフリカ人）、アフリカ人、イギリス人、そしてイギリス軍に参加した植民地人たちの命を犠牲にした戦争である。岡倉は、ボーア戦争が正義の戦争ではなく、利権争いの戦いにはかならないことを指摘する。

トランスヴァール共和国とオレンジ自由国は、一八一五年のウィーン会議後にイギリス人の勢力が強まったケープ植民地から逃れ、内陸部に入ったボーア人が、アフリカ人との衝突をくり返しながら建設した共和国である。しかしながら、一八六七年以降、この二つの共和国においてダイヤモンド鉱脈と金鉱脈が相次いで発見されると、大挙してイギリス人がここに入り込み、掠奪的な行動に出たため、ついにはボーア人と衝突するにいたった。一口でい

えば、経済的利害の対立が戦争の主要な原因であった。（岡倉 12）

先に入植していたボーア人からケープ植民地を奪ったイギリスは、北に追いやつたボーア人の支配地域に金とダイヤモンドの鉱脈が発見されると、またもや彼らを追い出しにかかったのである。「経済的利害の対立」とは、イギリス人がオランダ人からアフリカで産出される金とダイヤを奪い取るための対立を意味する。

当時のイギリスの有力政治家たちは、公の場でも個人的な会合でも、イギリスの方針は金産出地を支配することであるなどとは決して口にしなかった。その代わりに、南アフリカにおけるイギリス統治を維持しなければならない、という言い方をした。彼らの考えによれば、金産出地を武力で奪うなどという野蛮な手段を用いるべきではなく、間接的な影響力の行使という洗練された手段によって目的を達成しなければならなかったからである。（ロス 81）¹²

イギリスの植民地大臣セシル・ローズは1888年、のちに世界最大となるダイヤモンド産出会社デビアス社を設立し、かの地でのダイヤの利権を手に入れている。1899年には南アフリカの大半のダイヤモンド鉱山を管理下に置き、ローズの亡き後、20世紀初めにユダヤ人のアーネスト・オッペンハイマーに経営を引き継がれたデビアス社は、子会社の中央販売機構（COS）を設立することでダイヤの流通量をコントロールし、その価格を不当につり上げた。この会社が1947年に「ダイヤモンドは永遠の輝き」というキャッチコピーで広告を出し、ダイヤのエタニティー神話によって莫大な利益を得るグローバル企業となったことはよく知られている¹³。『虹』でアーシュラにアフリカまで行って何をしているのかわかっているのかと問われ、「国家の利益のため」と答えるスクレベンスキーは、まさにグローバル資本主義を貪欲に追求するイギリス国家の便利な部品にほかならないのだ。

2006年のレオナルド・ディカプリオ主演の映画「ブラッド・ダイヤモンド」は、近年国際問題となっている「紛争ダイヤ（blood diamond）」をめぐる映画である。この映画では、西アフリカのシェラ・レオネ（1808年にイギリス植民地

となり、1961年に独立）で内戦に用いる武器輸入のための資金源——この武器は、誘拐され不法ドラッグなどで洗脳された多くの少年兵によても使われる——として密輸出されている高価なダイヤの引き起こす悲劇が描かれる。現地の住民にとってダイヤは石にすぎないが、彼らはその採取のために監視のもと、日夜酷使される。この映画は、ダイヤが、いかに幾多の争いや犯罪を引き起こしアフリカの流血と破壊を招いているか、またいかに闇取引の対象となって正規の市場に紛れこみ、先進国のショーウィンドウやセレブリティの身を飾る高価な装飾品として珍重されているか、グローバル資本主義の巧妙さと愚かしさをあぶり出し、無邪気にダイヤを珍重する先進国の人々に警鐘を鳴らしている。

ここで、『虹』の次の箇所に注目したい。それは、アフリカから一時帰国したスクレベンスキーとアーシュラがロンドンで安物の指輪を買って新婚夫婦を裝い、つかの間の二人きりの生活を楽しむ場面である。

They went to an hotel in Piccadilly. She was supposed to be his wife. They bought a wedding-ring for a shilling, from a shop in a poor quarter....

Thus a tissue of romance was round them. She believed she was a young wife of a titled husband on the eve of departure for India. This, the social fact, was a delicious make-belief. (420)

二人が買った安物の指輪には金もダイヤも使われていなかったことだろう。また、アーシュラの祖母リディアの指に光っていた二つの結婚指輪（237）に比べると、この指輪は材質だけでなくその担う意味も格段に軽いといえる。ここでアーシュラは、指輪一つでだまされる周りの常識人たちを軽蔑し、結婚制度を嘲笑すると同時に、ダイヤを無意識に拒絶することによって、戦争の論理、すなわち利益獲得のためには他国を破壊することを厭わないグローバル資本主義を批判しているとも考えられるだろう。

最後に、工兵（sapper）について考える。スクレベンスキーが工兵であるという設定は、第二次ボーア戦争以降の戦争を考えるとき、非常に重要な意味を持つ。キンキード・ウィークスも指摘するように、来るべき第一次大戦でヨーロッパの

破壊に加担することになるだろうスクレベンスキーは、初期の工兵として位置づけられるからである。 "The novel may end in 1905, but we know Anton will have to return from India to help engineer the destruction in Europe"(Kinkead-Weekes 126)。軍事史的に見て、「ボーア戦争は、史上最初の近代戦であった」という岡倉の指摘にもあるように、「無煙火薬が広く使用されるようになり、黒色火薬時代とは異なり、目に見えない敵を相手に戦うことになった」(岡倉 81)この戦争は、近代兵器、つまり大量殺人兵器を大幅に取り入れた最初の戦争であった。それにともない、複雑な兵器や地雷を取り扱う知識と技術を持つ工兵の担う役割が格段に大きくなつたのである。

第二次ボーア戦争だけで約7万人の死者を出したと言われるが、イギリス軍として戦った兵士の中には、スクレベンスキーのような外国からの移民に加え、イギリスの植民地出身者も少なからずいた。その中でとりわけ大きな存在感を示したのがインド人兵士である。「ガンディーをも含め、イギリス軍への積極的協力を惜しまなかつたインド人たちは、その代償として戦争の終結後にかれらが公正な取扱いをイギリス人から受けるであろうことを信じて疑わなかつた。しかし、結果的にかれらは裏切られ、一九〇六年にナタールで反乱をおこすことになつた。」(岡倉 206-7)自国の独立を夢見てイギリス軍に参加したインド人兵士たちは、その貢献に対する報いを受けることなく期待を裏切られ、結局インドの独立は不本意な形で第二次大戦後の1947年に実現することになった。

ポーランド出身のスクレベンスキーが南アフリカで、金とダイヤをイギリスのものにするために、インド人兵士とともに、オランダ人を相手に、石炭を大量に消費しながら最新兵器を駆使して工兵として参加する戦争——ボーア戦争に関するすべてを把握していたわけではないアーシュラが本能的に投げかけた問い、つまり「あなたたちはそんな遠いところまで行って、いったい何をしているのか分かっているのか」という問いかけは、現代の戦争と資本主義の急所を鋭く突いており、依然として、あるいは以前にもまして現代社会で有効な問いである。石炭もダイヤも工兵も、資源獲得を人命に優先させる資本主義の手段であったことを、この作品は露呈しているのだ。小説『虹』は、第二次ボーア戦争を登場させることで、グローバリゼーションという言葉であいまいに表現されている大国による後進国搾取の構造を100年前に見通していたことになる。

4 「虹」への応答——『イギリス人の患者』¹⁴

最後に、『虹』におけるアーシュラの問い合わせに対する、現代小説による応答の一例を紹介したい。オンダーチェの小説『イギリス人の患者』は、第二次世界大戦末期のイタリア、フィレンツェ近郊の廃墟となった修道院を舞台に、ハンガリー人スパイのアルマーシ、カナダ人看護師のハナ、カナダ人スパイのカラヴァッジョ、そしてインド人工兵キップの四人の交流と別れを描く。次の引用は、敗北を前に北上するドイツ軍がイタリア全土に仕掛けた地雷の除去を任務とするキップに向かって、カラヴァッジョが発する言葉である。母国インドの独立を夢見てはるばるイギリスに渡って工兵の訓練を受け、イギリス人のつけたキップという愛称に愛着を持ち、連合軍の兵士としてイタリアで地雷を除去するキップに対して、カラヴァッジョは、「おまえはいったいこんなところで何をしているのか分かっているのか」と問いかける。

"...[K]ip will be probably get blown one of these days. Why? For whose sake? He's twenty-six years old. The British army teaches him the skills and the Americans teach him further skills and the team of sappers are given lectures, are decorated and sent off into the rich hills....

"The trouble with all of us is we are where we shouldn't be. What are we doing in Africa, in Italy? What is Kip doing dismantling bombs in orchards, for God's sake? What is he doing fighting English wars?..."
(Ondaatje 121-22)

アーシュラから同じように問われたスクレベンスキーは国家を持ち出して自己弁護し、この問い合わせには答えられなかった。しかしキップは、この場ではこの問い合わせを心にしまうものの、小説最後で自ら答えを出すことになる。

そのクライマックスの場面では、広島と長崎への原爆投下をラジオで知ったキップが、帝国主義のおおもとであるイギリスに憤り、イギリスとの決別、つまり戦争からの離脱を決心する。彼は、19世紀末から20世紀にかけてベルギー自由国で現地住民の右手首を切り落としながら自動車のタイヤに使うゴムの篡奪に明け暮れたレオポルト2世、そして広島、長崎への原爆投下の決定を下したアメリ

カ大統領トルーマンの名を挙げて、西歐列強が有色人種を差別してきた構造は昔から何も変わらない。イギリス人をはじめとして白人はみな、有色人種を騙して利用してきたのだと、アルマーシに向かって怒りを爆発させる。事故による大怪我のため顔の判別もつかないアルマーシはハンガリー人であるが、「イギリス人の患者」として扱われていたからだ。

You and then Americans converted us. With your missionary rules.
And Indian soldiers wasted their lives as heroes so they could be pukkah.
You had wars like cricket. How did you fool us into this? Here...listen to
what you people have done....

One bomb. Then another. Hiroshima. Nagasaki....

American, French, I don't care. When you start bombing the brown
races of the world, you're an Englishman. You had King Leopold of
Belgium and now you have fucking Harry Truman of the USA. You all
learned it from the English....

He[Kip] feels all the winds of the world have been sucked into Asia. He
steps away from the many small bombs of his career towards a bomb the
size, it seems, of a city, so vast it lets the living witness the death of the
population around them.... In the tent, before the light evaporated, he had
brought out the photograph of his family and gazed at it. His name is
Kirpal Singh and he does not know what he is doing here. (283-87)

引用最後の段落では、爆弾処理班にいたキップにも想像がつかない激しい威力を持つ原子爆弾を落とされ、その熱風で一瞬にしてがれきに変貌したアジアの地、広島と長崎を彼は想像する。一発の原爆は、彼が今まで除去してきた数知れない爆弾すべてを合わせたよりもはるかに大きな破壊力を持つだろう。なんのために自分は故郷を離れて連合軍の工兵となり、爆弾処理に従事してきたのか、それは祖国インドの独立のためであって日本人を殺すためではない。もう連合軍の歯車になるのはやめ、祖国のために生きるのが自分の道ではないのか。そう思ったからこそ、彼はここで家族の写真を取り出し、本名のキルパル・シンを心に刻むの

だろう。自分はキップではなく、自分のすべきことは地雷除去ではなく、自分いるべき場所がイタリアではないことを彼は悟るのだ。

『虹』のスクレベンスキーは、父の祖国であり、列強の搾取の対象となっていたポーランドに思いを馳せることはない。ひたすらにイギリス国家に仕える彼は、アーシュラと別れたあとに将校としてインドへ赴き、そこでイギリス人社会に溶け込むだろう。そして第一次大戦勃発後は、西部戦線で工兵として活躍し、ヨーロッパ本土の破壊に加担することになるだろう。その時には主要エネルギー源は石炭から石油に代わり¹⁵、略奪の対象もダイヤから他の希少資源になるだろう。だが、そこを支配するのが戦争の論理であることは変わらない。その絶望的な不毛さを、『虹』のテクストはアーシュラを通して糾弾するのだ。『イギリス人の患者』はその糾弾を異なるコンテクストで引き継ぎつつ、戦争の不毛なサイクルを断ち切るインド人を描くことで、『虹』の問いかけを改めて前景化している。

このように、『虹』を『イギリス人の患者』とならべて読むことは、『虹』の解釈の射程を現在に伸ばし、ロレンスの「影響」よりも「存在」を重視する批評になるだろう。“Perhaps ‘influence’ is not the word we want. Every writer, no matter how original, experiences the presence of other writers, past and present. The question is, what form or forms does that presence take?”(Goodheart 142) ロレンス擁護派のエイデルマンは、作家たちへの手紙で問いかける。“What I’d like to know is how you feel about Lawrence, whether he clarifies things for you, whether you think of him at all?”(Adelman 28) エイデルマンの問い合わせ、すなわち私たちがロレンス作品に何を感じるか、ロレンス作品を読むことで世界の見え方が明確になるか、そもそもロレンスのことを考えることがあるかという問い合わせのすべてに、私たちはポジティブに答えることができる。『虹』における「あなたはそんなところまで行つていったい何をしているのか、自分で分かっているのか」というアーシュラの問い合わせは、今日のグローバル資本主義世界を生きる私たち自身にも向けられている。現代社会におけるロレンス作品の意味は、けっして薄れてはいない。ロレンスはたしかに、今も、私たちとともに生きている。

注

- ¹ 代表的なものとしてWussowを参照.
- ² たとえばMeyers, Cushman & Jacksonを参照.
- ³ 1997年の秋学期に授業でロレンス作品を読んだ学生たちのロレンスへの反感が、「恋する女たち」に始まり『古典アメリカ文学研究』で最高潮に達したことを見手紙で紹介するエイデルマンに対し(23), ロレンスを擁護する作家たちはそれをポリティカル・コレクトネスの弊害だと見る。2000年春学期のエイデルマンの学生のポリティカル・コレクトネスに基づく反応についてはAdelman第3章を参照。また、1930年代以降のロレンス批評の変遷についてはBaldick, Eggertを参照。
- ⁴ 以下、本文における*The Rainbow*からの引用は、括弧内にページ数のみを記す。
- ⁵ セクシュアリティの批評で紹介したトーゴヴニックは、サーシャ・ブリストルというペンネームで、小説*The Novelist's Wife*を2015年に発表した。彼女は、これまであまり肯定的に評価されてこなかったロレンスの妻フリーダにロレンスとの出会いや恋愛を語らせ、ロレンス作品におけるセクシュアリティの豊かさを逆照射している。
- ⁶ たとえば倉持を参照。
- ⁷ 大戦と『虹』の関わりを強調する批評家には、たとえばBentley, Eggertがいる。
- ⁸ この手紙と『虹』との関係については吉村に詳しい。また、本号の田部井論文、巴山論文も参照。
- ⁹ 炭鉱夫の息子であったロレンスが炭鉱町や炭鉱夫にある種の連帯感を感じながらも次第に距離を大きくしていった過程と彼自身の作品との関係については、Inoue, Dalyに詳しい。
- ¹⁰ イギリスの炭鉱業の盛衰については、山崎を参照。なお、輸出用のカーディフ炭に対し、アーシュラが訪ねたと思われるイングランド中東部の石炭は、主に国内工業用であった(山崎 28-29)。
- ¹¹ 100年前には石炭を動力源としていたイギリス社会は、第二次世界大戦中の

原爆開発でアメリカに遅れをとったことを教訓に、大戦後は国をあげて原発先進国を目指し、今では世界有数の原発大国になっている。人間から人間性を奪う炭鉱町ウィギストンの構造は、現代の原発の町（その最大のものがカンブリア州のセラフィールド）においても全く変わっていない。イギリスの原発については、秋元、Daviesを参照。

¹² イギリスと南アフリカ、ボア戦争の歴史については、岡倉のほか、ロスの特に第3章を参照。

¹³ ダイヤモンドの歴史については、ヴォワイヨの特に第3章を参照。

¹⁴ オンダーチェの小説『アニルの亡靈』(Anil's Ghost, 2000) とロレンスの詩「ババリアのリンドウ」("Bavarian Gentians") の関係については、Preston (28-29) を参照。

¹⁵ 河野真太郎は、E・M・フォスターの『ハワーズ・エンド』(Howards End, 1910) 論において、1910年代半ばがイギリスのエネルギー政策転換、すなわち石炭から石油への転換の重要なモメントであったことを指摘する (108)。

引用文献

- Adelman, Gary. *Reclaiming D. H. Lawrence: Contemporary Writers Speak Out.* London: Associated UP, 2002. Print.
- Baldick, Chris. "Post-mortem: Lawrence's Critical and Cultural Legacy." *The Cambridge Companion to D. H. Lawrence.* Ed. Anne Farnough. Cambridge: Cambridge UP, 2001. 253-69. Print.
- Bayley, John. "Lawrence and the Modern English Novel." Meyers. 14-29. Print.
- Bentley, Michael. "Lawrence's Political Thought: Some English Contexts, 1906-19." *D. H. Lawrence: New Studies.* Ed. Christopher Heywood. London: Macmillan, 1987. 59-83. Print.
- Booth, Howard J. "Introduction." *New D. H. Lawrence.* Ed. Howard J. Booth. Manchester: Manchester UP, 2009. 1-16. Print.
- . "The Rainbow, British Marxist Criticism of the 1930s and Colonialism." Booth. 34-58. Print.

- Cushman, Keith, and Dennis Jackson, eds. *D. H. Lawrence's Literary Inheritors*. New York: St. Martin's, 1991. Print.
- Daly, Macdonald. "D. H. Lawrence and the 1912 Miners' Strike." *English Studies* 75 (1994): 133-45. Web. 25 November 2015.
- Davies, Hunter, ed. *Sellafield Stories: Life with Britain's First Nuclear Plant*. London: Constable, 2012. Print.
- Eggert, Paul. "The Biographical Issue: Lives of Lawrence." *The Cambridge Companion to D. H. Lawrence*. Ed. Anne Fernihough. Cambridge: Cambridge UP, 2001. 157-77. Print.
- Goodheart, Eugene. "Lawrence and American Fiction." Meyers. 135-55. Print.
- Hamalian, Leo. *D. H. Lawrence and Nine Women Writers*. London: Associated UP, 1996. Print.
- Holderness, Graham. *D. H. Lawrence: History, Ideology and Fiction*. Dublin: Gill and Macmillan, 1982. Print.
- Inoue, Mami. "The Role of Industrial Disputation in the Writing of D. H. Lawrence." 常磐大学人間科学部紀要『人間科学』第23巻第1号 (2005年10月) : 21-41頁. Web. 2015年11月25日.
- Kinkead-Weekes, Mark. "The Sense of History in *The Rainbow*." *D. H. Lawrence in the Modern World*. Ed. Peter Preston and Peter Hoare. London: Macmillan, 1989. 121-38. Print.
- Lawrence, D. H. *The Rainbow*. 1915. Ed. Mark Kinkead-Weekes. Cambridge: Cambridge UP, 1989. London: Penguin, 1995. Print.
- . *The Letters of D. H. Lawrence* Vol. 1. Ed. James T. Boulton. Cambridge: Cambridge UP, 1979. Print.
- . *The Letters of D. H. Lawrence* Vol. 2. Ed. George J. Zytaruk and James T. Boulton. Cambridge: Cambridge UP, 1981. Print.
- Leavis, F. R. *D. H. Lawrence: Novelist*. 1955. London: Penguin, 1994. Print.
- Meyers, Jefferey, ed. *The Legacy of D. H. Lawrence: New Essays*. New York: St. Martin's, 1987. Print.
- Millett, Kate. *Sexual Politics*. 1970. London: Virago, 1993. Print.

- Ondaatje, Michael. *The English Patient*. 1992. New York: Vintage, 1993. Print.
- Preston, Peter. "I am in a Novel": Lawrence in Recent British Fiction." *D. H. Lawrence: New Worlds*. Eds. Keith Cushman and Earl G. Ingersoll. London: Associated UP, 2003. 25-49. Print.
- Simpson, Hilary. *D. H. Lawrence and Feminism*. DeKalb, Illinois: Northern Illinois UP, 1982. Print.
- Torgovnick, Marianna. "Narrating Sexuality: *The Rainbow*." *The Cambridge Companion to D. H. Lawrence*. Ed. Anne Fernihough. Cambridge: Cambridge UP, 2001. 33-48. Print.
- Williams, Linda Ruth. *Sex in the Head: Visions of Femininity and Film in D.H. Lawrence*. Detroit: Wayne State UP, 1993. Print.
- Wussow, Helen. *The Nightmare of History: The Fictions of Virginia Woolf and D. H. Lawrence*. Bethlehem, Pennsylvania: Lehigh UP, 1998. Print.
- 秋元健治「核燃料サイクルの闇——イギリス・セラフィールドからの報告」現代書館, 2006年。
- 井上麻未「イギリス炭鉱業の繁栄と衰退：1880年代から1920年代における炭鉱労働者とストライキについて」常磐大学人間科学部紀要『人間科学』第23巻第2号（2006年3月）：57-72頁. Web. 2015年11月25日.
- ヴォワイヨ, パトリック著『宝石の歴史』ヒコ・みづの監修, 遠藤ゆかり訳, 創元社, 2006年.
- 岡倉登志『ボア戦争——金とダイヤと帝国主義』教育社, 1980年.
- 倉持三郎「マフディ教徒の反乱, ボア戦争とD. H. ロレンス」「東京家政大学研究紀要』第42集(1), 2002年. 163-72頁. Web. 2015年5月20日.
- 河野真太郎「『ハワーズ・エンド』とグローバル・イングランド文化の出現」「言語社会』第5巻, 一橋大学大学院言語社会研究科, 2011年, 96-112頁.
- 花尻えりか「『神話』と『歴史』——*The Rainbow* 批評をめぐって——」「藝文研究』第68号, 1995年, 111-29頁.
- 山崎勇志『石炭で栄え滅んだ大英帝国——産業革命からサッチャー改革まで』ミネルヴァ書房, 2008年.
- 吉村宏一「E・ガーネット宛書簡の解釈と評価をめぐって」, 『ロレンス研究——

「虹」 D. H. ロレンス研究会編, 朝日出版社, 1977年. 229-88頁.
ロス, ロバート『南アフリカの歴史』石鎚優訳, 創土社, 2009年

映像作品一覧

Blood Diamond. Dir. Edward Zwick. Perf. Leonardo DiCaprio. Warner Bros, 2006

機械文明を告発する『虹』——蛇の表象を巡って

田部井 世志子

はじめに

現代日本社会を表わす言葉といえば、どのようなものがあるだろう。例えば『キーワードで読む現代日本社会（第2版）』を参照すると、「資本主義」、「福祉国家」、「新自由主義」、「グローバリゼーション」、「ナショナリズム」等、様々なキーワードが提示されている（cf. 中西）。本稿で特に焦点を当てたいのは「機械文明」、あるいは「機械化」という言葉である。昨今の機械技術の進歩には目を見張るものがある。自動車のセンサーによる自動ブレーキや、発光ダイオード（LED）を使用した照明器具の開発、犬のペットロボット、アイボの誕生¹等々、人間による機械化、技術開発はすばらしいものであり、世の中が便利に、そしてある意味豊かになってきているのは確かである。しかし、機械化されることによる問題は生じていないだろうか。人類は機械とどのようにつき合っていくべきなのかという疑問を提示し、その問題に真剣に取り組むべき時期に、そろそろ差し掛かっているのではないだろうか。新保淳氏が「中世ヨーロッパにおける心身関係の視点から」、「身体」を考察することの現代的意義を説く中で、機械文明の問題点を次のように論じている。

……現代社会に生きる我々は、機械文明の発達にともなって、簡単・便利・迅速といったすばらしい贈り物を洪水のごとく送りこみ、また、人間はそれを追い求めてきた。しかしながら、それを受け入れ続け、その中にどっぷりつかればつかるほど、手先の不器用な子どもを大量に作り出す結果になったのも事実である。さらに人間は、手を充分動かすことによって、今日の文化・文明を築き上げてきたにもかかわらず、その一方で、手抜き教育・

手抜きしつけは手抜き文化を作ることになり、ひいては人間的なものの本質を失う状況にあることも否定できないであろう。

人は、自らの「生」をまとうするために、様々なことを自らの手（身体）で行ってきた。火をおこし、狩りをし、果実を採取する等々、これらのこととはまさしく自らの手（身体）を使用することなくしては不可能であった。しかしながら、先にも述べたように、機械文明の発明、追求のプロセスにおいて、換言するならば、身体性の追放と精神性への傾斜の中で、その原点としての生の「一方」の存在拠点をないがしろにしていると言っても過言ではないであろう。（79-80）

このように、機械文明が進むことによる「人間的なものの本質」ともいべき身体性の喪失を問題視している²。機械に頼ることの多い今日にあって、このような主張を読むにつけ、他にも機械が人類にとって負の要因をもたらすことはないのかといった問題を改めて問うべき時期がきているといえるだろう。D・H・ロレンス（Lawrence）についても、とりわけ晩年の作品には機械文明に対する批判が著しい。長編小説はいうまでもなく、第Ⅲ章で触れるが、例えば『続・三色すみれ』や『最後詩集』といった詩集の中の一連の詩群においてさえ、その批判の表明を見出すことができる。

では、比較的初期の作品、中でもロレンスの代表作の一つに数えられる『虹』においてはどうだろうか。この疑問を念頭に置きつつ、まず第Ⅰ章では本作品を巡る重要な議論の一つ——「炭素の手紙」の中でロレンスのいう「炭素」が一体どのように描かれているのか——を取り上げ、具体的に蛇を中心とした動植物のイメージで人間が描写されているという事実を確認したい。その上で、第Ⅱ章では、その蛇の表象の中でも特に脱皮現象に焦点を当てることで、『虹』の現代的意義、つまり機械文明批判の萌芽を読み解くことができればと思う。

I. 「炭素の手紙」を巡って

ロレンスはE・ガーネットに『虹』の前身である『結婚指輪』に関して、その新規さ、書くにあたっての姿勢、そして作品に対する確信等について述べた手紙を1914年6月5日付けで送っている。これがいわゆる「炭素の手紙」である。

I don't care about physiology of matter—but somehow—that which is physic—non-human, in humanity, is more interesting to me than the old-fashioned human element—which causes one to conceive a character in a certain moral scheme and make him consistent.... I don't so much care about what the woman *feels*... in the ordinary usage of the word.... I only care about what the woman *is*—what she IS—inhumanly, physiologically, materially—according to the use of the word, ... instead of what she feels according to the human conception.... You mustn't look in my novel for the old stable ego of the character. There is another ego, according to whose action the individual is unrecognisable, and passes through, as it were, allotropic states which it needs a deeper sense than any we've been used to exercise, to discover are states of the same single radically-unchanged element. (Like as diamond and coal are the same pure single element of carbon. The ordinary novel would trace the history of the diamond—but I say, 'diamond, what! This is carbon.' And ... my theme is carbon.) (*Letters II* 182-83)

ロレンスは手紙の中で、「一定の道徳体系の枠の中で捉える」ことのできるような因襲的人物描写をやめ、「同一で単一の本質的に不变の要素」を作品に描こうとしたと言明し、自分の「テーマは炭素なのだ」と高らかに宣言している。

この手紙を巡っては様々な議論が繰り広げられてきたが (cf. 吉村), 中でも、その「炭素」が小説に果たして反映されているのかどうかという問題について触れないわけにはいかないだろう。手紙は「理論上の陳述にすぎない」のであり、結局その理論は具象化されていないと主張をする批評家としてJ・モイナハン (Moynahan), A・ハックスリー, S・マイコ, H・M・ダレスキー, M・B・ハウなどが挙げられる。記述芸術である小説に人間の存在 ("isness") そのものを表現することは不可能であるというモイナハンの主張 (cf. 41-42) は確かに分からなくはない。しかし一方でユーディシュター (Yudhishtar) が、ロレンスは手紙の中で、「炭素」だけしか書かないといっているわけではないということを

指摘し、人物は当然のことながら従来のキャラクターを具えつつ、同時に「炭素」をも垣間見せることがあるのだと反論している。大事なのはユーディシャターも論じるように、内部から影響を与えていたる「炭素」の存在を見逃さないことなのだ (cf. 116)。

本章では後者の立場に立ち、ロレンスが描こうとしたその「炭素」は具体的にどのように描かれているのか、また、その「炭素」とは一体何なのかという点を問題にしたい。もっともこれらの問題については、筆者は拙論「『虹』における蛇のイメージ」の中で既に論じているので、以下にその内容を補強しつつ要約してみよう。

『虹』を一読すれば、作品全体を通じて登場人物たちが馬、狼、虎、狐、鶴、鷹、モグラ、あるいはどんぐりといった様々な動植物のイメージで描写されていることに気づく。中でも蛇のイメージはほとんどの人物たちの容貌や振る舞いに多かれ少なかれ付加されている。「蛇のように」といった直接的な表現、蛇の属性を想起させる「まぶたを閉じない」(The Rainbow 80, 以下 R と略す) 光輝く目の描写、他にも “hiss” “coil” “bite” といった蛇の存在を感じさせる表現が目白押しである。またカップルたちの抱擁シーンについても、やはり蛇の交尾を想起させる箇所が散見できる³。物語の舞台が「マーシュ・ファーム」となっており、蛇の巣を連想させる地を中心に物語が繰り広げられているのも、故なしというわけではないのである。

では蛇の比喩で人間を描写することで、ロレンスは何を伝えたかったのか。蛇は一体何を象徴しているのだろうか。簡潔にいえば、それは「蛇」の詩で謳われている「生命力」だといえるだろう。それは、我々の内に潜み、「蛇の如く敏捷であり、唐突であって、また龍の如く威圧的」な「行為の遂行者」、「人間の全身全靈を貫いて波打つ流動的・電撃的で、しかも打ち勝ち難く、透視力すらもつ潜勢力」(cf. Apocalypse 90-91, 以下 A と略す)⁴ である。

このように、人間の内には人間を内側から刺激し行為を促すような生命力、あるいは「潜勢力」が人間の意図にかかわらず存在するとロレンスは考えており、しかもその不变の根本的要素を蛇（龍）のイメージで捉えているのである。

しかもロレンスはその蛇（龍）のヴィジョンは、人間的、あるいは「個人的な」ものではなく、本来大自然に存する「宇宙的な」ものであったという (A 92)。

実際『虹』の中でも、物語の中の川や海、雨、暗闇、月といった自然界の物に蛇や龍のイメージが付加されているのである。その「非人間的な」大自然における蛇（龍）が、地球（大地）の深みから地表へと生命力のメッセージを運ぶ伝達者としてやってくるとロレンスは考えている。それはキリスト教におけるエデンの園の蛇、人間に知恵の木の実を食べさせた邪悪な伝達者としての蛇というよりは、オーファイト（拝蛇教）における知の伝達者、あるいは、S・ギルバート（Gilbert）のいう「秘義の知の伝達者」(173) なのである。

大自然のその蛇（龍）が登場人物たちに鼓舞するがごとく影響を与えていることも忘れてはならない。具体的にはアーシュラに何度も影響を与える、蛇の目のような月をはじめ様々あるが、以下にロレンスの技巧の妙が發揮されている一つの例を挙げてみよう。アナとウィルが小麦の束を運ぶ場面である。音読してみよう。

There was only the moving to and fro in the moonlight, engrossed, the swinging in the silence, that was marked only by the splash of sheaves, and silence, and a splash of sheaves. And ever the splash of his sheaves broke swifter, beating up to hers, and ever the splash of her sheaves recurred monotonously, unchanging, and ever the splash of his sheaves beat nearer. (R 123-24)

[s] 音と [ʃ] 音の繰り返しが著しく、それはまさに蛇のシューという音を連想させ、まるで蛇がシューシュー音をたてながらあたりを這い回っているかのような印象を与えている。リズミカルな蛇の動きとその存在を髣髴とさせる効果を發揮するこの技巧については、G・ハフ（Hough）も “Snake” の詩を論じる際に触れている (cf. 207) ことを指摘しておきたい。アナとウィルは最初、自由意志で束を運んでいたが、月（蛇の目）に見つめられつつ、蛇の存在を感じ取れる暗闇の中で、未知なる力によって次第にリズミカルになり、二人はついに一つになっていくのであった。

また物語の結末に現れる虹については、F・R・リーヴィス（Leavis）が「全く即席で裏づけがない」(142) と批判的に捉えているが、必ずしもその批判は当

たっていない。虹やアーチもまた蛇との関連で捉え（オーストラリアをはじめとする多くの国々に存在する虹蛇伝説との関連で捉え）、更にその虹蛇の概念で3世代の在り方を分析・解釈することで、物語の全体的統一が取れていることが論証できるからである⁵。

人間存在そのものの根幹（「炭素」）ともいるべき生命力や「潜勢力」がいかに彼／彼女を内側から、大自然の影響を受けつつ突き動かしているかを描こうとしたロレンスの意図は、「虹」において蛇（龍）を中心とした象徴、比喩やイメージの駆使により、重層的、総合的、かつ卓越した詩的描写によって実に巧妙に遂げられている。以上が拙論「『虹』における蛇のイメージ」の中で論じた概要である。

II. 機械文明の告発——脱皮する人物と脱皮しない人物

第1章を踏まえた上で、本章では現代社会に対するロレンスの警告を読み取るにあたり、蛇の生理現象の中でも神秘的かつ最も重要とさえいえる脱皮に焦点を当ててみよう。人間という生き物は蛇のように皮膚を直接的に脱ぐということはない。しかし、日々皮膚が新陳代謝を繰り返しているのは事実であり、また、日常的な生理的再生現象だけではなく、折に触れて精神的、象徴的な新生、再生を経験しているという事実を忘れてはならない。そういう意味では人間もまた脱皮をしているといえなくはない。日常的、あるいは断続的に脱皮をするということは、生命を更新するということであり、逆に脱皮をしないということは、そこに生命体としての重要な機能の欠如を見ることができる。

そもそもロレンスが『古典アメリカ文学研究』⁶ (*Studies in Classic American Literature*) の中で、人間の変化や成長を蛇の脱皮に喩えていたという事実を指摘しておきたい。ヨーロッパから海を渡ってアメリカに出かけて行った白人たちの目的を次のように脱皮の比喩を用いて説明している。

- (1) To slough the old European consciousness completely.
- (2) To grow a new skin underneath, a new form. This second is a hidden process. (58)

またロレンスもいう通り、脱皮とは失敗すれば死に至ることもある、一種の破壊作用である (*cf.* 58)。その危険を冒しても将来の新生を期して、蛇は、人は脱皮に全精力を注ぐのである。卵も壊れるからこそ新しい命の誕生があるのであり、腐敗を避け、生を更新させるためにも、脱皮は生命体にとっては必要かつ避けることのできない重要な神秘的メカニズムだといえるだろう。

このように考えると、蛇のイメージで描かれている登場人物たちが脱皮現象を行なうかどうかを探ることは重要な意味を持つだろう。とりわけ脱皮をすることなく、生を更新しない人物の在り方に焦点を当てることで、作品、あるいは作者の問題提起や警告を読み取ることができるるのである。

『虹』におけるほとんどの登場人物たちは蛇の脱皮現象を想起させるイメージで満ち溢れしており、古い自我を脱ぎ捨て再生する。次の引用は、バターを求めてトムを訪問したリディアが戻った後のトムの状態である。まさに蛇の脱皮前のまどろみ状態を想起させる描写になっている。

Since she had come to the house he went about in a daze, scarcely seeing even the things he handled, drifting, quiescent, in a state of metamorphosis. He submitted to that which was happening to him, letting go his will, suffering the loss of himself, dormant always on the brink of ecstasy, like a creature evolving to a new birth. (*R* 39, see also *R* 32)

また、次の引用は、新生前のトムとリディアの様子である。

She would have to begin again, to find a new being, a new form, to respond to that blind, insistent figure.... A shiver, a sickness of new birth passed over her, the flame leaped up him, under his skin. She wanted it, this new life from him with him, yet she must defend herself against it, for it was destruction. (*R* 40)

「おののき」を感じつつ、破壊作用を伴なうこのような新生を求めるリディアだった。また、トムの皮膚の下にも「炎の蠢き」が生じており、脱皮の可能性を

感じさせてくれる。こうして二人は、自分たちの意識、意図とはかかわりのないところで突き動かされ、最終的には「新世界」へと誘われるのだった。

次にウィルとアナを見ていこう。納屋の中で愛を確かめ合う姿が、子宮の中の誕生前の赤ん坊に喩えられることがある二人だが (*cf. R 130*)、結婚により初めて「生まれ出る」経験をする。それはとてつもない「変化」であった。

He surveyed the rind of the world: houses, factories, trams, the discarded rind; people scurrying about, work going on, all on the discarded surface. An earthquake had burst it all from inside. It was as if the surface of the world had been broken away entire: Ilkeston, streets, church, people, work, rule-of-the-day, all intact; and yet peeled away into unreality, leaving here exposed the inside, the reality: one's own being, strange feelings and passions and yearnings and beliefs and aspirations, suddenly become present, revealed, the permanent bedrock, knitted one rock with the woman one loved. (*R 150*)

このように、ウィルは結婚により「家、工場、電車——そういった世間の外殻」を脱ぎ捨て、「内部の真実」、「自己存在の本質、新しい感情と情熱と憧憬と信念と熱望」の啓示を受け、「愛する女と結ばれて一つの岩……永遠の岩盤」を作り上げ、「新世界」に辿り着くのだった (*R 150*)。 “the rind”, “discarded”, “peeled away”, “shed away”, “a new world” といった脱皮現象を想起させるような表現が目白押である点にも注目しよう。

アーシュラも然り、スクレベンスキーと別れた後、病気になった彼女は将来の新生を期待させるような描写で満ちている。植物が殻を脱ぎ捨て、種子が露出するイメージである。

And again, to her feverish brain, came the vivid reality of acorns in February lying on the floor of a wood with their shells burst and discarded and the kernel issued naked to put itself forth. She was the naked, clear kernel thrusting forth the clear, powerful shoot, and the world was a

bygone winter, discarded, her mother and father and Anton, and college and all her friends, all cast off like a year that has gone by, whilst the kernel was free and naked and striving to take new root, to create a new knowledge of Eternity in the flux of Time. And the kernel was the only reality; the rest was cast off into oblivion. (R 493)

以上、見てきた通り、トムやリディアについては、古い自我を脱ぎ捨てる前のほんやりとしたまどろみの状態が蛇の脱皮2,3日間の生理現象と酷似した様子で描かれていたり、また、第2世代についても特にウィルは既に見えてきた描写以外にも「軟らかい肥えた地面に投げ出された」「毬から落ちた栗」のように、「世知、経験という固い殻を捨て」(R 145)るといった描写も含め、脱皮現象を頻繁に繰り返す人物として描かれている。アーシュラに関しても、成長過程が生命体の脱皮現象として描かれているのである⁷。

このように蛇の脱皮のイメージと相俟って、毬にしろドングリの殻、古服にしろ、何かを脱ぎ捨てるという比喩表現が多用されることで、変化し新生するイメージで迫ってくる人物たちが多く存在する中で、脱皮しそうにない人物たちが存在する。とりわけ、アントン・スクレベンスキー、トム叔父、ミス・インガーについては、脱皮し、新生するイメージで描かれることはない。彼らは変化をせず生を更新しないがゆえに、「腐敗臭」(R 351)が漂い、「崩壊」に向かう人物として描かれている。本稿では紙面の都合上、トム叔父とミス・インガーに焦点を当てるにしよう⁸。拙論「『虹』における蛇のイメージ」においては、ロレンスの『黙示録』を援用することで、彼らが脱皮できない理由として、彼らの内なる「生命的鼓吹者たる龍」が、求めるものの変化故に「灰色の小蛇」になり下がってしまったという点を強調したが(3)⁹、本稿では彼らが固執するものを、より具体的に提示することで、そもそもどうして彼らが内なる龍を見失ってしまったのかを見ていくことにする。

まずアーシュラが二人をどのように捉えているのかを以下の引用に見てみよう。

She [Ursula] saw gross, ugly movements in her mistress [Miss Inger].

she saw a clayey, inert, unquickened flesh, that reminded her of the great prehistoric lizards. One day her Uncle Tom came in out of the broiling sunshine heated from walking.... He too had something marshy about him—the succulent moistness and turgidity, and the same brackish, nauseating effect of a marsh, where life and decaying are one.... Now she wanted to be rid of them both. Their marshy, bitter-sweet corruption came sick and unwholesome in her nostrils. (R 351)

両者から鼻を突く腐敗した沼地を感じ取るアーシュラだが、それはどうしてなのだろうか。もともとは動物的な要素を具え、また、生命力を想起させる「流れ」のイメージも具わっていたトム叔父ではなかったのか。炭坑の町ウイギストンに住む彼は、そこで働く坑夫たちを「でくの坊、ただ突っ立っているだけの機械」(R 349)と批判するミス・インガーと同様、炭坑を批判し、機械のような坑夫たちを批判している。

"It is the same everywhere," burst out Winifred [Miss Inger]. "It is the office, or the shop, or the business that gets the man, the woman gets the bit the shop can't digest. What is he at home, a man? He is a meaningless lump—a standing machine, a machine out of work."

"They know they are sold," said Tom Brangwen. "That's where it is. They know they are sold to their job. If a woman talks her throat out, what difference can it make? The man's sold to his job. So the women don't bother. (R 349)

一見二人は反生命的なものに対して批判の目を向けているかのように見える。ウイギストンの町を訪れたアーシュラがそこを歩く坑夫たちを脱皮できない「貝殻」(R 346)とみなす件があるが、その町はまさに「生よりも死を思わせる」(R 345)町だったのだ。

ところが実はトム叔父やミス・インガーこそが、炭坑や機械に埋没し、それらに絡め捕られてしまっている人間であるという事実が、二人の会話を聞くアーチュ

シュラの意識を通じて語られる。

But she [Ursula] knew moreover that in spite of his [Uncle Tom's] criticism and condemnation, he still wanted the great machine. His only happy moments, his only moments of pure freedom were when he was serving the machine....

His real mistress was the machine, and the real mistress of Winifred was the machine. She too, Winifred, worshipped the impure abstraction, the mechanisms of matter. There, there, in the machine, in service of the machine, was she free from the clog and degradation of human feeling. There, in the monstrous mechanism that held all matter, living or dead, in its service, did she achieve her consummation and her perfect unison, her immortality. (R 350)

本音のところで機械に仕えるトム叔父とミス・インガー。彼らにとっての「本当の（女）主人」は機械なのである。内なる蛇の存在を認めず、脱皮による生の更新をしようともせず、徒らに機械崇拜に身を委ねたために、彼らは内なるマーシュを腐敗させてしまったと考えられる。お互いに「仲間」(R 352)ともいるべき二人はその後結婚するが、その結婚は「自己欺瞞の夫婦生活」に他ならず、次のように語られる。彼らに対するアーチュラの嫌悪感も読み取れる引用文である。

Tom Brangwen was an attentive father, a very domestic husband. But there was something spurious about his domesticity. Ursula did not like him any more. Something ugly, blatant in his nature had come out now, making him shift everything over to a sentimental basis. A materialistic unbeliever, he carried it all off by becoming full of human feeling, a warm, attentive host, a generous husband, a model citizen. And he was clever enough to rouse admiration everywhere, and to take in his wife sufficiently. She did not love him. She was glad to live in a state of complacent self-deception with him, she worked according to him. (R 434)

同時にアーシュラが、二人のよう人に人間を「奴隸」にしてしまう炭坑や機械に「屈従はしない」と固く意を決する次の場面も忘れてはならないだろう。

No more would she [Ursula] subscribe to the great colliery, to the great machine which has taken us all captives. In her soul, she was against it.... And she knew it was meaningless. But it needed a great, passionate effort of will on her part, seeing the colliery, still to maintain her knowledge that it was meaningless. (*R* 350)

機械に対する、そして彼ら二人に対するアーシュラの憎しみを以下に引用してみよう。

Hatred sprang up in Ursula's heart. If she could she would smash the machine. Her soul's action should be the smashing of the great machine. If she could destroy the colliery, and make all the men of Wiggiston out of work, she would do it. Let them starve and grub in the earth for roots, rather than serve such a Moloch as this.

She hated her Uncle Tom, she hated Winifred Inger. (*R* 350)

このようなアーシュラの憎しみの内に、作者ロレンスの意図を汲み取ることは牽強付会とはいえないだろう。

III. 機械（文明）の問題点

『虹』においてロレンスが批判をしている現代社会の諸相は、スクレベンスキーの描写を通じて批判をしているものをはじめ、他にも様々あるが、本稿では特にトム叔父とミス・インガーに対する批判に見出せる、機械あるいは機械文明批判に焦点を当てよう。アーシュラは、そしてロレンスはなぜ機械文明を忌避するのだろうか。機械が便利になればなるほど、人間の様々な能力が衰え始めている点については、既に簡単に触れた。機械は人間が本来持っている様々な能力の

発達を妨げているのだ。例えば計算能力についても、現在のように電卓が発達し身边に使えるようになった今、もはや人間は自己の計算能力を伸ばす必要がなくなってしまった。一事が万事である。

少し異なる視点からこの問題を考えてみよう。生命を重んじるロレンスにとって機械とはどういう存在なのだろうか。まず、「有機的」("organic") と「機械的」("mechanical")¹⁰ の違いを、ロレンスは葉と木の関係に喻え、次のように説明している。

There is the organic connection, like leaves that belong to a tree and there is the mechanical connection, like leaves that are cast upon the earth.
("Fallen Leaves" *The Complete Poems of D.H.Lawrence* 615, 以下CPと略す)

人間などの有機的な生命体と機械との違いは、木についている葉と、木から落ち大地に放り出された葉との違いに等しいという。つまり両者の違いは、関係性の中で常に影響を与え合いつつ生成するかどうかの違いだといえるだろう。

生命体である人間の身体はそれぞれの臓器の寄せ集めであり、それら臓器は循環する血液によってすべて結びつけられている。そういう意味では、機械も部品の寄せ集めではあり、それぞれの部品が電流で繋がっているという意味では生命体と同じではないかといわれるかもしれない。しかし、機械の場合、部品は基本的にすべて孤立した存在であり、電流を流してもそれぞれの部品同士が影響を与え合うことで変化をすることはないのに対し、人間の場合は臓器同士が影響を与え合う。臓器の一つに問題が発生した場合、それが他の臓器にも何らかの影響を与えるのである。まさに、それぞれの部分同士が繋がっており、お互いに影響を与え合うというのが有機的であるということなのだ。

また、有機的な相互交流には常に両者の「^フ^フ^フ^ナ」¹¹ が存在するという点に注目してみよう¹¹。木と葉との間でも、両者が直接的に触れているからこそ、そこに生命の交流が発生するのである。ところが機械は、その重要な直接的「^フ^フ^フ^ナ」を奪う役割を果たすことにもなりかねないという。ここで興味深いロレンスの比喩を見てみよう。「ニューメキシコ」("New Mexico") の中で彼は、地球をボ

ンボン（キャンディ）に、交通手段である列車や車を「キャンディを覆う透明のセロファン」に、そしてその上を旅する人間を蠅に喰えている。そうすることで、機械による便利さに胡坐をかき、表層的な旅経験しかできていないにもかかわらず、直接的な触れ合い経験ができると錯覚に陥っている現代の旅行者の批判をしている。

The same is true of land travel. We skim along, we get there, we see it all, we've done it all. And as a rule, we never once go through the curious film which railroads, ships, motor-cars, and hotels stretch over the surface of the whole earth. Peking is just the same as New York, with a few different things to look at.... Poor creatures that we are, we crave for experience, yet we are like flies that crawl on the pure and transparent mucous-paper in which the world like a bon-bon is wrapped so carefully that we can never get at it, though we see it there all the time as we move about it, apparently in contact, yet actually as far removed as if it were the moon. (*Phoenix* 141. 以下Pと略す)

ロレンスは更に、「セロファン」を機械文明や知的認識方法、あるいは観念偏重主義など、物事の抽象化を促すものすべてを指すと論を展開している。その透明な「セロファン」の存在ゆえに、蠅は直接キャンディを舐めて味わおうにも味わえない。機械は確かに我々の生活を豊かに、そして高尚にしてくれたのかもしれない。しかし実際は、居心地の良さを保証してくれる機械文明の進展による抽象化作用ゆえに、人間も生命体との直接的な「触れ合い」を見失いつつあるというわけである。深みを探っているようでありながら、実際にはすべてにおいて表層的になり、その深みを極められてはいないのだ。

以上の議論を踏まえると、ミス・インガーとトム叔父の関係において「触れ合い」の描写がないのも故なしというわけではないのである。トムは鈴木俊次氏も指摘する通り、まさに「生を喪失した現代文明人」なのであり(17)、同様のことはミス・インガーについてもいえるだろう。

そもそも「生きる」とは、ロレンスにとってどういうことなのだろうか。

What can a man do with his life but live it? And what does life consist in, save a vivid relatedness between the man and the living universe that surrounds him? Yet man insulates himself more and more into mechanism, and repudiates everything but the machine and the contrivance of which he himself is master, god in the machine. ("Pan in America" P 27)

このように、人間が生きるということは、「人間を取り巻く生きた宇宙との間の生き生きとした絆（関係性）」を築く事であるとロレンスは「アメリカのパン神」の中で宣言する。ところが、人間は機械に身を捧げることで「メカニズムにのめり込み」、一見、自分が支配していると錯覚している機械や装置以外のものを排除するようになってしまっているというのである。このような機械によって人間は実質的に牛耳られ、次第に非有機的になっていくことにロレンスが不安を抱いていたであろうことは想像に難くない。

もっとも、ロレンスがもともと機械自体を否定しているわけではなかったという事実は指摘しておく必要があるかもしれない。「トマス・ハーディ研究」("Study of Thomas Hardy") の中でロレンスは、中世の手工業の時代に戻るべきだという考えを「ばかげている」(P 426) と否定し、引き続き、機械に求めるべきことは何なのかということを明確にし、そうはない現実を批判する。

I can ask it [the machine] for perfect accommodating utensils or articles of use, and I shall get them.

Wherefore I do honour to the machine and to its inventor. It will produce what we want, and save us the necessity of much labour. Which is what it was invented for.

But to what pitiable misuse is it put! Do we use the machine to produce goods for our need, or is it used as a muck-rake for raking together heaps of money? Why, when man, in his godly effort, has produced a means to freedom, do we make it a means to more slavery? (P 426-27)

問題は、人間が機械を支配しているつもりが、それによって「奴隸状態」になってしまうということ、つまり、機械の使い方が間違っているのだとロレンスは考えていた。しかし、一旦機械に隸属してしまうと、なかなかそこから抜け出せないのが実態だといえるだろう。トム叔父やミス・インガーはまさにそのような袋小路に陥っているのである。部品同士の間に生きた関係性もなく、日々有機的に変化することのない機械に仕え、機械を「主人」として仰ぐ（R 350）彼らは、「愛の無い」（R 434）欺瞞に満ちた偽りの結婚生活を送り、その中でただ腐食していくだけの存在として描かれることになる。

ロレンスの機械文明批判については、既に触れた通り、『続・三色すみれ』や『最後詩集』の中の一連の詩群において、より直接的な主張が見受けられる。以下にその一部を紹介することで、本論を締めくくることにしよう。

今では社会自体が機械に支配され（*cf. "Side-Step, O Sons of Men!" CP 642*），人間までもがロボットになり、それはあたかも、機械が人間を生み出しているようなものだとロレンスはいう。人間は、本来「生命の驚異に対する崇拜者」であるにもかかわらず、ロボット人間になってしまふと「エゴイズム」に陥り、ロボットのような「機械的で自己中心的なシステム」に成り下がってしまうのである（“Worship” CP 649）。今や、ロボット人間ばかりになってしまっている（“The Gods! The Gods!” CP 651）中で、ロレンスはまず、生き生きとした人間はこれ以上機械に身を捧げるな、ロボット人間から身を引けと訴える。

Oh men, living men, vivid men, ocean and fire / don't give any more life
to the machines! / ... / withdraw, withdraw your flow / from the
grinning and insatiable robots. (“Hold Back!” CP 639)

また、「いやしくも人間ならば」（“If You Are a Man”）の中では次のように機械（更には財産や金）とかかわらずに「生命」との、他の仲間との接触を持つと主張する。

If you are a man, and believe in the destiny of mankind / then say to

yourself: we will cease to care / about property and money and mechanical devices, / and open our consciousness to the deep, mysterious life / that we are now cut off from. /

The machine shall be abolished from the earth again; / it is a mistake that mankind has made; / ... and we will find the way to immediate contact with life / and with one another. (CP 666)

大自然の生命との「触れ合い」、あるいは人間同士の「触れ合い」によってのみ機械文明を「溶かし去る」ことができるのだ ("Future States" CP 611)。これこそがまさに「機械文明」ならぬ「『触れ合い』の文明」("the civilisation of touch") のだと「未来の闘い」("Future War" CP 612) の中で希望を謳うロレンスであった。

終わりに

登場人物たちの「炭素」は「^{インバーソナル}非人間的」なもの、つまり様々な動植物などのイメージで描かれ、時として彼らを内から突き動かしていた。中でも生命力、あるいは「潜勢力」を表わす蛇はほとんどすべての人物にイメージ化されているということを今一度、強調しておこう。ロレンスの技巧の妙は、人間存在そのものを表現することなど不可能であるというモイナハンの論を、こうして覆してしまっているのである。

甲斐貞信氏も論じる通り、「人道主義」("humanitarianism") ならぬ「人間中心主義」("humanism") という言葉すら生み出した近代の西洋人にとって、「ロレンスのこうした人間の「炭素」化、「原形」化というものは、これまで大切なものとして固執しつづけてきた人間の我思う表層的「自我」を全く否定し去るものであった」(25) ことは容易に想像がつく。更には動物の擬人化ならぬ人間の「擬蛇化」をやってのけたロレンスの、人間に対する痛烈な風刺、批判を感じ取っても良いのかもしれない。まさにエコロジー的平等主義といえるだろう。

またそのような人間の内なる「潜勢力」は、大自然にも当然存在するものであり、その大自然の人間への働きかけにもロレンスは目を向けていた。物語のタイトルにもなっている虹を含め、作品の中の様々な自然界の物象を蛇との関連で読

み解くことで、作品全体が一貫性をもって読者にメッセージをつきつけてくるのだ。

さて本稿の目的は、蛇の表象にこだわりつつ、このようなロレンス独特の「擬蛇化」。特に蛇の大事な生理現象の一つ、脱皮に焦点を当て、その現象による生の更新、新生をするかどうかという点にこだわって人物分析をすることで、新たなメッセージを読み解くことであった。とりわけ脱皮しない人物——変化をせず、新生しない人物——の存在様式にこだわることで、ロレンスの現代社会への警告、つまり科学・機械文明礼賛への警告を見てきた。現代は機械文明の進展ゆえに、蛇（龍）の表わす生命力、「潜勢力」の低下が著しい時代になってしまっているというわけである。

『虹』をはじめ、後期の作品にもうかがえる機械文明に対するロレンスの批判は、今日の日本社会にもあてはまるだろう。「はじめに」で触れた機械化の問題はもちろんのこと、ネット、携帯、スマホ等の通信機器、コンピュータ、ロボット等が引き起こす人間関係の表層化の問題を指摘する研究者たちも各分野で増えている。例えば、機械、とりわけ「ケータイ」による人間同士のコミュニケーション力の低下については、人類学者の正高信男氏が『ケータイを持ったサル』等の中で詳しく論じている。また社会学者の土井隆義氏も『友達地獄』『キャラ化する子どもたち』等において、携帯電話やネットによる人間関係の問題、コミュニケーションの欠落について問題提起をしている。このように、現代の日本社会においても機械化によるコミュニケーションの表層化とその力の低下は決して見過ごすことのできない問題になっているのだ。

また、生理学者のシャステイン・ウヴネース・モベリは著書『オキシトシン——私たちのからだがつくる安らぎの物質』の中で「触れ合い」の重要さとその効果を論じている。モベリによると、「触れ合い」によりオキシトシンという脳内物質が分泌され、それが人に幸せを感じさせるという。幸せ談義をするにも、「触れ合い」は重要な行為であるということが科学的にも実証されたということである。

機械文明の発達により失われてしまった生命力、「潜勢力」の回復の重要性を、また、産業、機械文明が加速度的に進んでいる現代社会において、大自然との関係、そして人間同士の関係、「触れ合い」の重要性を、当時にあって既に訴えて

いたロレンス、機械文明が今日ほど進展してはいない時代にあって、その問題点を見抜き、告発し、また「触れ合い」の重要性を、求める理由は違えども、「チャタレー卿夫人の恋人」以前の『虹』の段階で既に示唆していたことを考えると、ロレンスの先見性には驚かざるを得ない。ロレンスが生きた時代に比べ、はるかに機械に頼ることの多い今日の社会にあって、今だからこそロレンスの警告に真摯に耳を傾ける必要があるだろう。

注

- 1 アイボに関しては、現在ではその製造も中止され、修理サービスも打ち切られたため、「死」を迎えることになったという。
- 2 現代における身体へのこだわりの必要性といえば、武藤浩史氏の「『チャタレー夫人の恋人』と身体知」における『チャタレー夫人の恋人』の精読と身体知の学びの実験が脳裏に蘇ってくる。
- 3 今回ワークショップの準備をするにあたり、ネット上のeBookの*The Rainbow*で検索した結果、人物を表現するにあたり、“snake”, “viper”, “serpent”など、直接、蛇を表わす語が用いられているのはもちろんのこと、その他にも、蛇独自の属性を想起させる語が頻繁に用いられていることが分かった。これらの用語は*White Peacock*や*The Trespasser*あるいは*Sons and Lovers*といった、『虹』以前の作品群においては見出せないものであった。また、大自然を蛇のイメージで描くという技巧については*The Rainbow*以前では、*The Trespasser*の中で既に見られる点を強調しておきたい。
- 4 “Etruscan Places” 207も参照のこと。因みにロレンスは1915年出版の「王冠」(“The Crown”)の中で既に蛇を「新たな生命の……王」と捉えていたことを指摘しておこう (*Phoenix II* 407)。
- 5 2016年3月出版予定の拙論「『虹』における結末解釈——虹と蛇の表象を中心」の中で、筆者はこの点について論証しているので、参照のこと。
- 6 最終的に出版されたのは1923年であるが、1917年ころから既に書き始められていた。
- 7 アーチュラが最後に希望を見出す町の「卑しい」人々も、「固い蛇の鱗で覆

われた」といった表現や、地を「這う」といった蛇のイメージで描かれている（R 495-96）。

- ⁸ スクレベンスキーについては、アフリカから戻ってきて一見変化をしたよう見えるが、実は「変化や疑問などを完全に超越して……宿命的にできあがった人間」(R 291) として描かれ、結局は変わっていないことが強調されている。また彼は、集団や社会を重視し、個人の重要さが分からぬ存在として語り手に批判されている (cf. R 329)。彼は、国家、学校、炭坑、軍隊といった、全体主義の原理で動いているものを良しとし、結婚などの制度にこだわる体制派として描かれる。個人の重要さに目を向けず、軍務に励むだけの彼は「死産児」(R 328) とさえ表現されている。スクレベンスキーの描写を通じて、全体主義的な体制や制度に対するロレンスの批判が見えてくることを指摘しておきたい。スクレベンスキーについての議論は別の機会に譲ることにしたい。
- ⁹ 第1世代に比して、第2、第3世代において蛇のイメージが減少しているのも故なしというわけではないのである。
- ¹⁰ “mechanical” という形容詞に注目すると、学校教育批判も見えてくることを指摘しておきたい。すなわち、物語のアーシュラが教鞭を執る学校現場の描写の中で、その語が頻繁に用いられているのである。
- ¹¹ 「^クれ^ク合^フい」があるからといって、必ずしも相互交流が存在するとは限らないということは指摘しておく必要があるだろう。

引用文献

- Gilbert, S. *Acts of Attention*. London: Cornell UP, 1972.
- Hough, G. *The Dark Sun*. Aylesbury: Duckworth, 1956.
- Lawrence, D.H. *Apocalypse*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1977. (A)
- . *The Complete Poems of D.H.Lawrence*. Ed. Vivian de Sola Pinto & F.W.Roberts. New York: The Viking P, 1971. (CP)
- . “Etruscan Places.” *Mornings in Mexico and Etruscan Places*. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1975.

- . *The Letters of D.H.Lawrence Vol. II 1913-16.* Ed. G. J. Zyraruk & J. T. Boulton. Cambridge: Cambridge UP, 1982.
- . *Phoenix.* Ed. E. D. McDonald. New York: Viking P, 1968. (P)
- . *Phoenix II.* Ed. W. Roberts & H. T. Moore. Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1978.
- . *The Rainbow.* Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1974. (R)
- . *Studies in Classic American Literature.* Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1977.
- Leavis, F. R. *D. H. Lawrence: Novelist.* Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1976.
- Moynahan, J. *The Deed of Life: The Novels and Tales of D. H. Lawrence.* Princeton: Princeton UP, 1972.
- Yudhishtar. *Conflict in the Novels of D.H.Lawrence.* New York: Barnes & Noble, Inc., 1969.
- 甲斐貞信. 「序にかえて——エリウオッシュ渓谷と『虹』」. 『ロレンス研究——「虹」』. 朝日出版社, 1988. 5-10.
- 新保淳. 「『身体』を考察することの現代的意義——中世ヨーロッパにおける心身関係の視点から——」. 『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）第46号』. 1996. 79-90.
- 鈴木俊次. 「キーワードで読むロレンス——「関係性」の視点から——」. 鷹書房弓プレス, 2007.
- 田部井（池田）世志子. 「『虹』における蛇のイメージ」. 『アポストロス』No. 9. アポストロス同人会, 1982. 1-12.
- . 「『虹』における結末解釈—虹と蛇の表象を中心に」. 『北九州市立大学文学部紀要第85号』. 2016(3月出版予定). 37-70.
- 土井隆義. 『友だち地獄』. ちくま新書, 2008.
- . 「キャラ化する子どもたち」. 岩波ブックレット, 2009.
- 中西新太郎, 萩輪明子編. 「キーワードで読む 現代日本社会 第2版」. 刊報社, 2013.
- 正高信男. 『ケータイを持ったサル』. 中公新書, 2003.

- 武藤浩史. 「「チャタレー夫人の恋人」と身体知——精読から生の動きの学びへ」.
筑摩書房, 2010.
- モベリ, シャステイン・ウヴネース. 『オキシトシン——私たちのからだがつくる安らぎの物質』. 瀬尾智子, 谷垣暁美訳. 晶文社, 2008.
- 吉村宏一. 「E・ガーネット宛書簡の解釈と評価をめぐって」. 『ロレンス研究——「虹」』. 231-88.

eBook: *The Rainbow*: <http://www.gutenberg.org/ebooks/28948>
Sons and Lovers: <http://www.gutenberg.org/ebooks/217>
The Trespasser: <http://www.gutenberg.org/ebooks/9498>
White Peacock: <http://www.gutenberg.org/ebooks/38561>

ワークショップ：D・H・ロレンス『虹』を読む ——その総合コメントとして

鈴木 俊次

日本ロレンス協会では、第46回大会（2015年）で出版100周年を迎えた小説『虹』についてのワークショップが、田部井世志子氏を司会兼講師に、麻生えりか氏と巴山岳人氏を講師に、世代的にも批評の方法論的にもバランスの取れた陣容で開催され、その際筆者が3氏の発表内容について総合的にコメントする役をいただいた。大会当日のワークショップは各講師の発表内容が個性豊かなものであり、また『虹』というロレンス研究者にとっては「カノン」ともいえる作品を扱っていたこともあり、フロアーからの質疑応答やコメントも次々になされ、このワークショップは大いに盛り上がり成功だったと言えよう。講師の3人は、このワークショップの発表内容をその後さらに深めて「論文」の形で『D・H・ロレンス研究』発表されることになり、その原稿を基に筆者が今回この総合コメントを書くことになった。

このワークショップの統一的テーマは司会の田部井氏も述べているように「『虹』の現代的意義」であり、各講師は其々の視点から21世紀というIT革命とグローバリゼーションの進む、この困難な時代の中で『虹』を改めて読むことの意味、新しい読みの可能性を提示しようとしている。以下、三者三様の立場からの発表論文の内容についてのコメントをした上で、このワークショップ全体についてコメントすることにしたい。

ワークショップの発表時の順番は異なるかもしれないが、田部井氏の「機械文明を告発する『虹』——蛇の表象を巡って」から始めたい。田部井氏の論は、テクストの精読によるロレンス特有のイメージを中心に小説を解読するという。筆者の世代には馴染みある伝統的な文学批評のスタイルで、これまでにも『虹』についての優れた論考を発表されている。今回の発表では、他の2人の講師と同様

に1914年のガーネット宛ての有名な「炭素の手紙」から始め、この手紙でロレンスは「ダイヤモンド」や「石炭」でなく「炭素」を描くのだと宣言するが、田部井氏はこの「炭素」を人間の内なる「生命力」であり、ロレンスの作品では、それは「蛇」のイメージで表象されているという。『虹』においても多くの登場人物には「蛇」のイメージが付与されている。蛇は「脱皮」を繰り返すことで生命を更新するが、脱皮しなければ生命体としての「腐敗」や「死」に至ってしまう。田部井氏は、この蛇の脱皮という視点から『虹』における現代の機械文明告発のメッセージを読み取ろうとする。『虹』の第一世代トムとリディア、第二世代アナとウイルなどは“rind”, “peeled away”など脱皮現象を想起させる表現が多くあり、更に第三世代アーシュラにも蛇の「脱皮」を暗示する描写があることをテクストの引用によって、先ず明らかにする。しかしながら、今回の発表ではむしろ現代機械文明の中にどっぷりと身を置いて「脱皮できない」人物たちに着目する。すなわち、こうした人物たちとは機械を主人とする炭坑経営者トム叔父とその恋人の教師インガーであり、国家に隸従する兵士スクレベンスキーである。こうした人物は生を更新できない「崩壊」に向かう。特にトム叔父とミス・インガーに焦点を当てている。機械に隸従する彼らに対するアーシュラの批判に現代機械文明への告発を読み取り、そこからの救済を我々が考えるとき、「機械的(mechanical)」に対する「有機的(organic)」というロレンスの用いるキーワードに着目し、「有機的」とは「関係性」の中で生成することであり、つまりロレンスは他者との「触れ合い」にこそ、生の更新、再生の道を見出そうとしているのだという。それは現代の生理学者シャステイン・увネース・モリベの著書で述べられている、「触れ合い」を通して得られる「オキシトシン」という安らぎの脳内物質によっても立証されるものであるという。ロレンスの時代よりはるかに機械化の進んだ今日の社会だからこそ、我々もロレンスの機械文明への告発のメッセージに耳を傾けるべきだと田部井氏は結んでいるが、ある意味「古くて新しい」この主張と、テクストの精読に基づく丁寧なイメージ解釈によるメッセージの解読という、氏の批評スタイルに共感する読者も多いのではないだろうか。

次いで、麻生えりか氏の「『虹』と現代社会——石炭とダイヤと工兵」について、麻生氏の発表内容はかなり多岐にわたっているが、そのどの論点も興味深く示唆に富むものである。その内容を一言でいえば今の時代における『虹』批評の

可能性を探る、ということであろう。そこで麻生氏は現代におけるロレンスの、そして『虹』の相対的重要度の低下という事実から話を始め、次いで『虹』の批評史を概観し、F・R・リーヴィスに代表される「神話批評」対マルクス主義者グレアム・ホルダネスの「歴史的解釈」——『虹』を歴史から逃避した作品と批判する——、そして神話的解釈も歴史的解釈も認めるキンキード・ウイークス、更にハワード・ブースのように『虹』とグローバルな植民地主義とのつながりを指摘するもの（麻生氏の論文のテーマである「戦争」という視点はこのブースの主張の延長上にある）を紹介する。これらとは別に古くはK・ミレットのフェミニズムの立場からのロレンス批判やヒラリー・シンプソンなどのロレンス擁護の立場のジェンダー批評、あるいはセクシュアリティの観点からロレンスを読むリンダ・ルース・ウィリアムズなどを挙げて、手際よくロレンスの批評史を概観してくれていて、我々ロレンス研究者にはありがたい。

上述した批評史概観の後、麻生氏は本題である「『虹』と「戦争」」のテーマを論じていく。その際、ブースの主張する、戦争とロレンス作品の関わりを考える場合に広い政治的コンテクストを視野に入れること、更にロレンスと他の作家の戦争表象を比較することの意義への言及が、麻生氏が後で展開する時代を超えてコンテクストも異なる作品（オンダーチェの作品）と比較することで『虹』の新しい読みの可能性を明らかにできるのではないかという主張と呼応していることが分かる。

『虹』と戦争をテーマとする場合、ホルダネスのようにロレンスがこの小説で第一次大戦を直接言及・批判しなかったことで歴史からの逃避であるという批判に対して、麻生氏はこの小説に第二次ボア戦争を登場させることで、第一次大戦も含めたこれらの戦争が帝国主義の植民地戦争であったという事実を示しているのだという興味ある解釈を提示する。そのために、他の2氏の講師も言及する「炭素の手紙」の中で、「炭素」そのものではなく「もの」としての「石炭」や「ダイヤモンド」に着目する。つまり石炭、ダイヤ、工兵を軸に『虹』の戦争表象を考察するのだ。それはアーシュラの恋人スクレベンスキーが、第二次ボア戦争に参加する工兵であること、彼が植民地戦争で国家のために戦うことに対する意があると主張する人物であることに着目することでもある。個を尊厳するアーシュラのスクレベンスキー批判は、結局の所、生を否定する戦争の非人間性を批

判しているのだという。その意味では、炭坑経営者として「石炭」を産出して国家や戦争に奉仕するトム叔父も同罪であり、炭坑町を支配する非人間的な論理は戦争と共に通るのである。麻生氏は次いで「ダイヤモンド」に着目する。ダイヤモンドはボア戦争などの植民地利権争奪の原因である点で、石炭とも共通する意味を持つ。更に「工兵」ということについて、第二次ボア戦争は近代兵器を用いた最初の戦争であり、「工兵」の役割が大きくなつた戦争である。そしてこの兵士スクレベンスキーに対するアーシュラの問い合わせ「あなたたちはそんな遠いところまで行って、いったい何をしているのかわかっているのか」は、現代の戦争と資本主義の急所を突いているといふ。

終わりに、麻生氏はこの『虹』のアーシュラの問い合わせをめぐって、現代小説、オンダーチェの『イギリス人の患者』との照応（呼応）について検討する。この小説の舞台は第二次世界大戦末期のイタリアで、カナダ人スパイのカラヴァッジョがインド人兵キップに対して、アーシュラと同様に「こんなところで何をしているのかわかっているのか」と問う。この小説ではキップはやがて、西洋列強による搾取の構造を理解し、自分の居場所はイタリアでなく、祖国インドにあることを悟る。戦争が資源収奪の論理で動くことをどちらの小説も暗示している。このようにロレンスからの直接的な影響関係とは別に、『虹』を今の時代の小説と関連付けて読むことは、『虹』の解釈を今の時代に結びつけ、より「開かれた」ものにする可能性があるといふ。その意味ではアーシュラの工兵スクレベンスキーへの問い合わせは、世界各地で今も戦争・紛争の絶えない資本主義世界に生きる我々自身にも向けられており、そこにロレンス作品が今の時代にも生きている理由があるといふ。これは示唆に富む指摘であり、時代を超えて作品同士が呼応し合うことを示していく、一見唐突な感じはするが興味深い、現代小説の読みの可能性を示すものである。

次に、巴山岳人氏の発表論文「D・H・ロレンス『虹』における生命、物質、そして個体性」(ワークショップのタイトルは「『虹』は有機的なテクストか? —エコクリティシズムからの一考察」)について、巴山氏も、他の講師と同様「炭素の手紙」を手掛かりに論を展開している。巴山氏は、この手紙に窺える科学的・生物学的な用語を用いて語ることへのロレンスの「とまどい」に着目する。これは中々鋭い指摘であると思う。このとまどいとは、人間の「非人間的」な側

面、つまり生命を帯びた人間の「物質性」をどう表現すればよいのかというとまどいであり、それはまた、当時の生氣論者と称されたベルクソンやH・ドリーシュらの著作にも見出せるという。彼らは生命と物質性との関係を理解しようとしていたのであり、本論では特にベルクソンの『創造的進化』における生命観と『虹』における生物の物質性や個体化という概念を対比しようとする。

ベルクソンの『創造的進化』には、19世紀に盛んになった生物学を中心とする実証主義的科学からの影響と疑念がうかがえるという。ベルクソンは、生命は常に絶えざる変化（流れ）の中にあると考え、流れとしての生命は一つの「個体性の追求」を目指すが、そこで止まるのではなく、世代から世代へと渡るものだという。ロレンスの場合、『虹』と同時期に書かれた「トマス・ハーディ研究」を見ると、ベルクソンと同様な生命の固体化についての議論がある。こうしたロレンスとベルクソンにうかがえる生命と物質についての視点から『虹』のテキストを探ろうとする場合、第三世代のアーシュラに焦点を当てることになる。

アーシュラの物語は自己成長の物語と言えるが、その成長の各段階で違っていたにもかかわらず「常にアーシュラであった」というテキストの言葉に、変化成長を繰り返しつつも、常にアーシュラの「個体性」を保つという物質的存在としての、生き物としての在り方が示されているという。『虹』における生命、物質、そして個体化という概念は、アーシュラのスクレベンスキーによる支配への批判と大きく関わっているという。彼女を男性として支配しようとするスクレベンスキーとの性的な関係を描く場面では、彼女の「身体」という「物質」(?)が彼女の意志とは無関係に「振動」し、周りの「闇の振動」と重なる様子が描かれている。これは周りの環境とアーシュラの身体とが物質的に一体化することを暗示するものであるという。このように人間の物質性に着目することは「脱人間主義（ポスト・ヒューマニズム）」の可能性を示唆するものであるという。

物質性が人間の脱中心化の契機をはらんでいるとすれば、そうした人間に宿る生命（胎児）が人間に支配されない様を示すのが、妊娠したアーシュラと馬との遭遇というロレンス研究者を悩ませる象徴性豊かな場面である。この場面では胎児の生命が馬の生命力の放つ物質的エネルギーを通して暗示され、彼女を翻弄する馬の姿は、そうした生命が人間の意志に支配されず独立して存在することを暗示しているのだという。それなりに説得力ある解釈であろう。巴山氏は、これま

で見えてきたようにベルクソンの生命哲学との近似性を示しつつも、ロレンスの場合は生命の物質性により積極的な意味を見出し、この生物世界における人間中心主義に対する暗黙の批判も込められているという。これはコメンティターとしての筆者の推測であるが、そこに氏は「エコクリティシズム」に連なる一面を見ようとしているのではないかと思う。

以上のように、大会ワークショップ後に書かれた田部井、麻生、巴山、3氏の発表論文原稿を基に夫々の論文内容をコメントしてきたが、夫々の内容は前述したように各講師の世代を反映して『虹』に対するアプローチの仕方にも個性があり、その好例が「炭素の手紙」という共通の資料を手掛かりにしつつも、その解釈によく個性が出ていて興味深いものであった。また夫々の視点から出版から100年を経た『虹』を、今の時代に読むことの意義、あるいは「新しい読み」の可能性を示してくれている。奇しくもこの大会ワークショップと同じ2015年に、筆者も関わった日本ロレンス協会編『21世紀のロレンス』が出版され、やはり21世紀という「今の時代」のロレンス研究の可能性を示そうとするものとなっているので、この3氏の論文と併せて読めば、一層意義深いものとなろう。

最後になったが、記念すべき『虹』のワークショップにコメンティターとして参加でき、3氏の発表論文からいろいろ学ぶこともでき、かつこのような一文を書く機会を与えられたことを感謝したい。

書評

Modernists at Odds: Reconsidering Joyce and Lawrence, edited by Matthew J. Kochis and Heather L. Lusty. University Press of Florida, 2015.

After Strange Odds? ——差異化／同一化の戯れ

「個性」(パトス／ペルソナ)は、必然的に「エトス」から切り離される。「差異」がその原理となるからだ。「同一」というのでは「個性」とはならない。だから、「コンテキスト」をもちだし議論するのは、「個性」の追究ではなく、「同一」の追究になる。しかし、「個性」が「個性」であると認定されるには、「同一」という基盤がなくては無理だ。とはいえ、この「同一」も普遍的ではない。時間・空間の枠で歴史的・社会的にみれば、他のものと異なることがわかる。「差異」には、いつもすでにひそかに「同一化」が進行し、「同一」も、いつもすでにひそかに「差異化」が進行している。要は、「差異」と「同一」の戯れこそ、リアルなのだ。

とりあえず、「反目するモダニスト：ジョイスとロレンス再考」と訳せる題をもつ本書は、単に「ジョイス」と「ロレンス」の「差異」を、さらに「同一」をいまさら洗いだそうというわけではない。当然、このふたつの「個性」的作家の「差異」への言及も多くなるが、それを産出した「同一」の社会的・歴史的基盤こそが追究課題である。このように読まなければ、ジョイス研究者もロレンス研究者も、本書を読んで既知のことばかりだという印象をもち、納得できないだろう。こうした読者にとって、本書の「未知」なる「知」は、両者の同一基盤をめぐるものとなろう。本書にかかわった研究者で、ジョイスとロレンスの研究者ではない、それ以外の領域の研究者が多いのもその証左である。

本書は、フロリダ大学出版局が1994年に創刊し、これまで継続して60冊刊行し

た「ザ・フロリダ・ジェイムズ・ジョイス・シリーズ」の最新刊の論文集である。これは偉業だ。このシリーズは、国際ジェイムズ・ジョイス財団 (International James Joyce Foundation) の現会長Sebastian D. G. Knowlesが総編集長をつとめ、自身もこのシリーズで2001年に単著、2007年に編著をだしている。同財団は、2009年の年次大会で、ジョイスとロレンスというモダニズムの代表的作家を対比するパネルを組んだようだ。それを始源として、広く論文が公募され、Matthew J. KochisとHeather L. Lustyが編集を担当し、本書が誕生した。「謝辞」からは、そう読める。

本書に付された「執筆者紹介」によると、2015年現在、教授職の者が5名、その他8名 (G. Dohertyは84歳で他界) からなるので、単純にいって世代間のバランスがとれているかにみえる。編集の2人は若い世代に属しており、そのうちのひとり、ロレンス研究者で北米ロレンス協会執行役員のLustyが「序」を書いている。編集者もふくめ、執筆者は研究経歴から判断して、ジョイス研究者4名 (Z. Bowen/M. Brick/E. Duffy/M. Norris)、ロレンス研究者2名 (H. Arai/H. L. Lusty)、双方の研究者4名 (G. Doherty/E. G. Ingersoll/M. J. Kochis/E. Lokopoulou)、その他4名 (J. H. Burgers/L. Kane/C. F. Miller/J. Mitchell) で構成されている。ジョイス研究者が多いのは、土俵がジョイス研究にあるのでいたし方ないだろう。

本書は、単にランダムに論文を配列してあるのではなく、しっかりとした編集方針にもとづき構成されている。最初のBowen論文 (*Lady Chatterley's Lover and Ulysses*) は書下ろしではなく、既刊論文集 *D. H. Lawrence's "Lady": A New Look at Lady Chatterley's Lover* (1985) に収録されたものなので、ロレンス研究者でおやと思う読者も多いだろう。この論文が収録されたのは、本論集の目論見の「起源」的論文ともいえるものなので、「再」録されているらしい。ついでながら、Bowenも「ザ・フロリダ・ジェイムズ・ジョイス・シリーズ」から *Bloom's Old Sweet Song: Essays on Joyce and Music* (1995) をだしている。その他の収録論文は、ふたつの論文が、以下のI～Vの共通基盤ごとに組となって配列されている。構成は、以下の通りである。

I 性／性差をめぐって：

2. (Margot Norris) Love, Bodies, and Nature in *Lady Chatterley's Lover* and *Ulysses*
3. (Earl G. Ingersoll) The "Odd Couple" Constructing the "New Man": Bloom and Mellors in *Ulysses* and *Lady Chatterley's Lover*

II 宗教について：

4. (Gerald Doherty) The End of Sacrifice: Joyce's "The Dead" and Lawrence's "The Man Who Died"
5. (Martin Brick) The Isis Effect: How Joyce and Lawrence Revitalize Christianity through Foreignization

III 文学生産（雑誌）をめぐって：

6. (Louise Kane) "In Europe They Usually Mention Us Together": Joyce, Lawrence, and the Little Magazines
7. (Eleni Loukopoulos) Lawrence and Joyce in T.S. Eliot's Criterion Miscellany Series

IV 精神分析の視座から：

8. (Hidenaga Arai) An Encounter with the Real: A Lacanian Motif in Joyce's "The Dead" and Lawrence's "The Shadow in the Rose Garden"
9. (Johannes Hendrikus Burgers and Jennifer Mitchell) Masochism and Marriage in *The Rainbow* and *Ulysses*

V 文化的視座から：

10. (Enda Duffy) That Long Kiss: Comparing Joyce and Lawrence
11. (Carl E. Miller) "Result of the Rockinghorse Race": The Ironic Culture of Racing in Joyce's *Ulysses* and Lawrence's "The Rocking-Horse Winner"

作家個人の独自性、つまり「個性」を重要視したのは、ロマン派の仕業であった。それを脱しようとした、19世紀末から21世紀初頭のモダニズムを標榜した作家たちは、むしろ同時代の均質性にひかれたはずである。作家論は、どうしてもロマン派的志向性に向かいがちであり、モダニズムの作家にたいしてもそのよう

な視点を投げかけてきたきらいがある。ジョイス研究とロレンス研究においても、大同小異だろう。ちなみに、日本ジョイス協会会員で、日本ロレンス協会会員である者はどれだけいるのだろうか。周囲で、両方の会員である者を知らない。同じことは、国際的にもいえるのだろう。ラティスは、「序」の冒頭でそうしたことを見唆しているようだ——“Such insularism obscures the importance of sociohistorical contexts... For scholars, the porous framework of modernism encourages interdisciplinary approaches that have invigorated twentieth-century studies across fields.”つまり、モダニズムは「大戦争、印刷文化、心理学、帝国、建築とデザイン、商品文化、ナショナリズム」という「外的諸力」と不可分な「まれにみる汎文化」なので、「モダニズム研究者は無数の領域で研究活動をしているので、その基盤がしばしば無視されている」ともいう。つまり、原因是「島国根性／狭量」(insularism) にあるという。ついでながら、“insular (-ism)”に対応する “island” は、「水に囲まれた土地」が原義らしい。つまり、「土地」と「水」という異質の要素を、すでにいつも抱え込んだ語だ。ラティスは「水」に囲まれ「大陸」から切り離され「孤立」した「偏狭さ」の意で使用しているのだろうが、この語は、原義が複合的なので、意図に反して「非・狭量」性を意味してしまう。「水」と「土地」が「反目」(at odds) している事態なのだ。

同じような事態が、本書の基調的目論見を示唆するこの「序」の題名 “Injoynted Perspectives” に使用された語 “Injoynted” にも起っている。ラティスに言及はないが、この語は、シェイクスピアが『オセロ』(1602年) で「繋ぐ」の意味で使ったものである——“The Ottomites, reverend and gracious,/Steering with due course towards the isle of Rhodes, / Have there injointed them with an after fleet.”(I, iii). ところが、同時期、教師・内科医にして翻訳家の Philemon Hollandは、ブルタルコスの『モラリア』の最初の英訳(1603年)で、「分断する／解体する」とシェイクスピアとは「反目」した意味で用いた——“the foresaid bridge by a mighty tempest was injoynted and broken”(126)。そして、その後20世紀になり、ジョイスが *Finnegans Wake*で使った——“In deerhaven, imbraced, alleged, injoynted and unlatched, the birds, tommelise

too, quail silent."(2.1.244, 29-30). ラスティは、この用法のすべてを込めてこの序の題で、「差異」と「同一」の戯れ(at odds)を示唆しているようだ。この題をあえて訳せば、「繋がれ／分断される視点」となろうか。本書の構成は、まず「分断（個別化）した視点」がI～Vと配置され、それぞれは必ずしも「繋がれ（同一化）」されているわけではない。しかし、これらの「視点」は、「繋がれ」て「あまねく」("per-")「モダニズム」の「視点」となっているのだ。

こう読んでみると、本書の標題“Modernists at Odds: Reconsidering Joyce and Lawrence”は、単に「反目するモダニスト：ジョイスとロレンス再考」ではないだろう。つまり、一見すると、「反目」して「差異化」され、一括りにできないといっているようであるが、そうではない。まず、「ジョイス」と「ロレンス」が「モダニスト」として「同一化」されている。と同時に、“at odds”によって「差異化」されている。さらに、これをいい換え、「ジョイス」と「ロレンス」が“reconsider”されるといっている。“re-”は、「再」だけでなく、「新たに～し直す」「戻る」、また「反対」「分離」「否定」の意味作用をもつ。そして，“con-”である。これは「共に」、つまり「同一」の意味作用を起こす。つまり、標題は「ジョイスとロレンスという差異化された作家を、モダニストとして同一化する」といっていると読めよう。さらに、“re-”には“de-”と類似の意味作用があるので、いわざと知れたデリダの“de/con-struct”に通じてくる。ラスティの使った用語もこの用語のいい換えであった。ついでに，“odds”を「賭け金の比率」と読めば、第11論文は「競馬」をめぐるものであるのは、偶然の一一致とは思えない。

ジョイスとロレンスの「個性」が起源か、共通基盤のモダニズムの土壌が起源かは、決定不能である。「戯れ」という以外にいいようのない事態だ。それは、ジョイスとロレンスはどちらが偉かったかと問題化するのと同工である。ジョイスは、*Lady Chatterley*について“the usual sloppy English”と評し、ロレンスは“My God, what a clumsy *olla putrida* James Joyce is! Nothing but [...] deliberate, journalistic dirty-mindedness”と評したという逸話は、両者のたぶん意識的「差異化」行為であり、「戯れ」行為の一環である。そうなると、本書は、「ジョイス／ロレンス」の具体的作品テキストを同時代の「土壌」の「表象」として扱っているといえるだろう。両作家が、どのようにその風土を表象したのか。

その際に、従来型の研究成果が活躍することになる。ちなみに、ラスティはこういう——“Despite the robust body of scholarship on each author, very little considers them as contemporaneous artists with common ground. Yet their importance extends far beyond a genre or style; each writer is vital to the story of literary modernism itself.”

このような読み方からして、本書で興味深く読んだのはⅢ～Vの各論文である。とくにⅢの論文は、ジョイスとロレンスが生産した作品を発表した雑誌メディア、とりわけ両者がかかわった「リトル・マガジン」をめぐる論である。ここは、まさに両作家の作品生産の共通「土壌」にほかならない。土壌づくりをし、植物生育の管理をし、消費者の嗜好と資力を判断しながら生産に従事する農民のような編集者の存在があった。その中に、モダニズムの旗手で『クライテリオン』編集長エリオットもいた。

エリオットの役割については第7論文に詳しいが、第8論文のHidenaga Araiは、エリオットが *After Strange Gods* でロレンスの “The Shadow in the Rose Garden” (1914) と “The Dead” (1914) を比較し「個性化」をはかっているものの、ラカンとジジェクの精神分析で展開された「現実界」(the Real) (ジジェクは the symbolic real/the imaginary real/the real real に差異化) を介して解釈すると、基本的に「近親性」がみえるという。つまり、「現実界」とは、“nothing other than that which dismantles everyday reality, including ‘moral obligations’ or ‘conscience’”のことだ。（ついでながら，“dis-”は“de-”に通じ，“conscience”に“con-”がある。）この指摘も、本論集の目論見にみごとにこたえたものといえる。ちなみに、Araiはエリオットの読みの戦略を “an attempt at ‘ideological closure’” (“closure”は“con-”に相当）と看破している。

本書のを目指した課題を見事に批評論としてまとめ上げたのが、Vの2論文である。第10論文は、モダニズムのポピュラー・カルチャーに視座をすえ、映画、絵画、彫刻、新聞等の多様なメディアとともに、ジョイスの *A Portrait* とロレンスの *The Rainbow* に表象された「人前での愛情表現」としての「接吻」('kiss') を検討している。「以前は〈私的生活〉の領域」とみなされていた「性欲」の「公然」たる表明である「接吻」は、「モダニズムの発明」だとし、芸術家は、従来

は「口にされなかった経験」の言説とイメージを策定しなくてはならなかつたという。

最後の第11論文は、「20世紀初期にはもっとも文化的にありふれた娯楽」の「競馬」を、ジョイスもロレンスも「文化的試金石」として、つまり「倒錯的な経済・社会システム」を使用したと指摘している。ジョイスにとって「競馬」は、「ダブリンの大多数の男たちと共有していた関心」であり、特權的な娯楽であったとし、「イギリスが保有する植民地の主導権」に対し、「アイルランドの国民的アイデンティティ」がいかなるものかを明確に知る手立てとなると指摘している。

ジョイスとロレンスのそれぞれの専門家の読み手が、相互に対象を取りかえて読むことによって、ロレンスは「ジョイス」化され、ジョイスは「ロレンス」化される。「他者」の意識化だ。これは、微笑ましい事態だろうか。「異神」は追うべきなのか？

(荒木 正純)

Nick Ceramella ed. *Lake Garda: Gateway to D. H. Lawrence's Voyage to the Sun*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2013.

本書は、2012年9月20日から23日までの期間、イタリアのガルニャーノ（ガルダ湖）で行われた国際学会（Lake Garda: Gateway to D. H. Lawrence's Voyage to the Sun）の記録である。本書が学会開催からわずか一年で出版されていることから、学会の責任者で、本書の編者であるニック・チェラメッラ（Nick Ceramella）が学会開催に劣らぬ情熱を本書の編集に傾けたことが窺われる。学会の最大の亮りは、アメリカ人音楽家ウィリアム・ニール（William Neil）がロレンスの詩にインスピレーションを受けて作曲した *The Waters Are Shaking the Moon* の世界初演であり、これを本書に附属しているCDで聞くことができるのは貴重である。学会の充実ぶりを伝えるジョン・ワーゼン（John Worthen）の

「はじめに」とチエラメッラの「謝辞」に続き、序論では、学会および本書のテーマ——ロレンス作品における「太陽」——の重要性とガルニヤーノとの関係性が説明され、学会の発表者および本書の寄稿者がこのテーマにどのようにアプローチしているかが丁寧に紹介されている。

本書は、20本の論文と2本のインタビューで構成され、それらはテーマごとに8部に分かれている。第1部は、「『イタリアの薄明』：多様なアプローチ (*Twilight in Italy: Varying Approaches*)」と題し、3本の論文が収録されている。学会の基調演説を行ったポール・エガート (Paul Eggert) は、ロレンスの散文は「参加型 (participatory) と呼びうるもの」であり、「ロレンスは単純に真実を語る人ではない」という見解を示した上で、その理由を彼自身による実地調査、旅行記をめぐる出版文化、「イタリアの薄明」執筆当時のロレンスの状況との関連で考察しながら明らかにしていく。ハワード・ブース (Howard J. Booth) の論文は、『イタリアの薄明』における「一人称の声 ("I"-voice)」をジュリア・クリステヴァ (Julia Kristeva) が言うところの「黒い太陽 (black sun)」、すなわち抑鬱とメランコリーとの関連で捉え、「一人称の声」はイタリア人男性の男らしさに魅惑される一方、両者に交流が欠如していることは前者の「阻害、喪失、この上ない悲しみ (exclusion, loss and potentially overwhelming sadness)」を逆照射していると結論づける。ナヴィード・リーハン (Naveed Rehan) の論文は、ロレンスの旅行記は「創造的ノンフィクション (creative nonfiction)」の優れた例であり、その思想的・私的探求を支える「主観性 (subjectivism)」こそ、現代の学生や作家が学ぶべき点であると言う。

第2部「共感する月と敵意に満ちた太陽 (Sympathetic Moon and Hostile Sun)」には3本の論文が収録されている。ベサン・ジョーンズ (Bethan Jones) は、『最後の詩集 (Last Poems)』における太陽と月の象徴性を詳察し、ロレンス最後の書『アポカリプス (Apocalypse)』との相関関係について論じる。すなわち、『最後の詩集』では、太陽が親和的／敵対的イメージを有するのに対して、月はつねに肯定的なイメージで用いられており、これらのイメージは『アポカリプス』で発展的に継承されているというのがジョーンズの結論である。マリーナ・ラガシェフスカヤ (Marina S. Ragachewskaya) は、ロレンスにとっての

「旅 (voyage)」は地理的空間だけではなく心理的空间の移動を意味するとし、その発展史を概観する。初期の作品『虹 (The Rainbow)』や『恋する女たち (Women in Love)』には登場人物の地理的・心理的「旅」がいくつか見られる程度だが、後期の短編小説「太陽 ("Sun")」や「馬に乗って逃げた女 ("The Woman Who Rode Away")」では主人公の地理的移動が内面への探求にもなっているとする。スザン・リード (Susan Read) の論文は、ロレンスを1919年に科学、宗教、文学など、さまざまな分野で行われていた「思想の冒險 (thought adventures)」の中に位置づける試みであり、とくにA・S・エディントン (A. S. Eddington) によって日食が観測された後、ロレンスを含めたモダニストがどのような反応を示したかを明らかにする。

「なぜ北の人は南に旅するのか (Why a Northerner Travels South)」と題された第3部は、4本の論文から構成されている。イザベル・ブランドン (Izabel F. O Brandão) は、短編小説にこそロレンスの成功と熟達が見られると主張し、「太陽」の第一稿と第二稿を比較する。主人公ジュリアンを、従来の批評のように「神経症 (neurotic)」や「自己陶酔的な (narcissistic)」人物ではなく、「産後鬱 (post-natal depression)」の母親として解釈している点が興味深い。セレーナ・チェニ (Serena Cenni) は、『チャタレイ夫人の恋人 (Lady Chatterley's Lover)』に描かれている空間移動 = 旅を5つのタイプ——「教育的旅 (educational voyage)」、「不快経験の契機となる旅 (dysphoric initiation voyage)」、「陶酔感をもたらすことになる旅 (euphoric initiation voyage)」、「目的を持った旅 (intentional voyage)」、「理想へ向かう旅 (utopian voyage)」——に分類し、とくに最後の2タイプに関わるペニスへの旅にはコニーに「気づき (revelation)」の瞬間をもたらすために最も重要であると主張する。ミハイラ・イリミア (Mihaela Irimia) は、ロレンスの旅行記に記されている「地靈 (the spirit of the place)」の観察を「イマゴロジー的観察 (imagological observation)」と捉える。ロレンスにとってイタリアは「感覚 (senses)」-「南 (south)」-「自然 (nature)」-「そこ (there)」-「過去 (then)」を、イギリスやドイツは「理性 (mind)」-「北 (north)」-「文化 (culture)」-「ここ (here)」-「現在 (now)」をそれぞれ表しており、ロレンスは前者が後者に侵食されていくという価値判断

を示している。シモネット・ディ・フィリピス (Simonetta de Filippis) の論文は、故ピーター・プレストン (Peter Preston) に敬意を表して執筆されたものであり、プレストンの『海とサルディニア (Sea and Sardinia)』や『エトルリア紀行 (Etruscan Places)』に関する論考に言及しながら、ロレンスを新しい旅行記の先駆者と位置づける。

第4部は、「自己発見の旅で南に向かう (Going South on a Self-discovery Trip)」と題し、3本の論文が収録されている。カール・クロッケル (Carl Krockel) は、ロレンスとイタリアの映画監督ピエル・パオロ・パゾリーニ (Pier Paolo Pasolini) を、産業化と消費者主義を特徴とする近代化の渦に飲み込まれた西洋社会に強く反発し、その機械化されたシステムの外側において、それを翻すための活路として、「南」に目を向けた芸術家として比較する。セルジオ・クラピツ (Sergio Crapiz) は、ロレンスの原始主義を20世紀初頭に活躍した人類学者——エドワード・バーネット・タイラー (Edward Burnett Tylor), エルнст・カッシーラー (Ernst Cassirer), およびミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade) ——と比較しながら、その特徴を明らかにしていく。カルメン・ムシャト (Carmen Musat) の論文は、『イタリアの薄明』には、ロレンスのガルダ湖への旅が「自己発見 (self-discovery)」の旅であると同時に、「自己創造 (self-creation)」の旅でもあった軌跡が示されていると論ずる。

第5部「ロレンス、宗教、太陽崇拜 (Lawrence, Religion and the Cult of the Sun)」は4本の論文から成る。学会の最後を飾ったロバート・フレイザー (Robert Fraser) は、「太陽崇拜」に関してジェイムズ・フレイザー (Sir James Frazer) がロレンスに与えた影響を、両者の作品を時系列に比較・考察しながら明らかにしていく。ロレンスとフレイザーの両者にとって、太陽は創造的であると同時に破壊的な力を有するものとして理解・表象されているのが最大の共通点として強調されている。ジェイン・コスティン (Jane Costin) は、ロレンス最後の作品である『アポカリプス』の最後の一文「太陽から始めよう。そうすればあとはゆっくりと、ゆっくりと起こる」に込められたロレンス思想——性・「血の意識」・太陽を中心とする思想——の原点を、ロレンスのガルダ湖への旅に遡る。シェイラ・ラヒリ・チョードリー (Sheila Lahiri Choudhury) は、ほぼ同

時期に執筆されたロレンスの短編小説「馬に乗って去った女」と「太陽」におけるメキシコのアステカ族の太陽崇拜とイタリアの太陽崇拜の描写を比較し、後者がインドの太陽神コナーラク (Konark) と多くの共通点を有し、もしロレンスがインドを訪れていたら、それに共感しただろうとの私見を示す。ポール・ポプラウスキ (Paul Poplawski) は、ロレンスがイッキングからガルニヤーノまでの道のりで見たキリスト像について書いたエッセイの3つのバージョンを比較し、最初の2つのバージョンは、「磔刑のモデル (crucifixion model)^{はりつけ}」の原体験を記録している点で意義深いと主張する。

「ロレンスと踊り (Lawrence and Dance)」と題された第6部には2本の論文が収録されている。ステファニア・ミケルッチ (Stefania Michelucci) は、非言語コミュニケーションとしての舞踊へのロレンスの関心を、20世紀初頭の、分野横断が盛んに行われていた文化的・芸術的状況——セルゲイ・ディアギレフ (Sergei Diaghilev) が主宰するバレエ・リュス (The Ballets Russes) やイサドラ・ダンカン——との関連で考察する。パトリシア・ペレス・ボレロ (Patricia Pérez Borrero) は、1913年のガルニヤーノ滞在がロレンスの身体を中心とする思想に決定的な影響を与えたことを、『イタリアの薄明』の「踊り」の章を考察することによって明らかにする。

第7部「ロレンスと音楽 (Lawrence and Music)」と第8部「ロレンスと絵画 (Lawrence and Painting)」は、分野横断の実践的な試みに関する貴重な記録となっている。まず、国際学会で初演された *The Waters Are Shaking the Moon* を作曲したウィリアム・ニールがロレンスの詩にいかにインスピレーションを受けたか、どのような技法を用いているかなど、知られざる制作の裏側について語る。初演で歌手を務めたシャルロッテ・ストッペ伦ブルグ (Charlotte Stoppelenburg) へのインタビューは、ロレンスの詩およびニールの曲をどう理解し、どう歌っているかが説明されている。第8部では、ガルニヤーノにおけるロレンスゆかりの場所 (ヴィラ・イジェアやサントマソ寺院など) の水彩画の連作 *Via D. H. Lawrence* を制作しているサビーン・フランク (Sabine Frank) へのインタビューが、作品の複製とともに掲載されている。

最後に、〈ロレンスと太陽〉という素朴なテーマに関してこれだけの多種多彩

な論考を集めた本書は、ロレンス文学の奥行きと幅広さ、ロレンス文学研究の潜在的可能性の豊かさを示す、価値ある一冊と言えるだろう。 (星 久美子)

倉持三郎 『D. H. ロレンスの大学ノート：内容と解説』

(光陽社出版, 2015 ISBN978-4-9907612-1-9 C3397 非売品)

D. H. ロレンスが大学時代（1906年10月～1908年7月）に書いた詩や講義録が2冊の大学ノートに残されている。一冊は“Latin Notes”と呼ばれているノート（全159頁）であり、そこには学生時代のロレンスのラテン語学習の記録や未完成のおよそ80編程の詩がインクや鉛筆で書かれている。2冊目は表紙に“Essays”と書かれたノート（全85頁）であり、1907年2月2日以降、彼の大学1年目後半から2年目にかけての講義録であり、主としてShakespeareを中心とする講義に関する記録、もしくは提出を求められた課題エッセーである。John Worthenは『ロレンス伝』(D. H. Lawrence: *The Early Years 1885-1912*, 1991)の中でこのノートをLaL1と呼んでいる。（Worthenは同上書において“Latin Notes”についてはLaL2と呼んでいる。）

この手書きの2冊のノートはマイクロフィルムの形でノッティンガム大学図書館に収蔵されている。本書の著者、倉持三郎氏がこの資料を入手した経緯について氏は次のように説明している。すなわち、この資料に初めて接したのは1966年に彼がロンドン大学で研究に従事していた時、トリニダード出身のSingh氏と一緒にノッティンガム大学を訪ねたことがあり、この2冊のノートブックを興味深く見ていた彼に、Singh氏と知り合いであった大学図書館員がこの資料をマイクロフィルムにして渡してくれたとのことである。この貴重な資料はいざれ写真版で出版されるはずだと倉持氏は考えていたが、その後そのような動きはなく、ケンブリッジ版のロレンスの全詩集（*The Poems Vol. I & Vol. II*）が2013年に出版された段階でもLaL2の草稿本体は活字化されていない。

このマイクロフィルムの活字化の仕事について、倉持氏は2012年9月出版の松山大学紀要、『言語文化研究』に寄せた論文「D. H. ロレンスのノートブック」に

おいて、この資料の存在を知ってから「半世紀以上も経ってしまったのに、寡聞にしてノートブック全体の写真版が出たことを知らない」。しかし、この資料はロレンスの初期の詩の制作時期を決定する上できわめて重要な資料となり得るので、彼が所有しているマイクロフィルムの概要について少しでも早く紹介する必要があるのでないかと考えてこの論文を執筆したと述べている¹。

その言葉通り、倉持氏は、論文「D. H. ロレンスのノートブック」において、ノートブックのどの頁に何が記載されているのかをそれぞれのページ毎に説明している。例えば、冒頭の1頁、および2～10頁についてのコメントは以下の通りである。

1 ロレンスの自署。Latin Notesとロレンスの筆跡で書かれてある。The Nottingham University MS 1479という整理番号がある。

2～10 ラテン語の単語調べ。2の上欄にLaL2という文字が書かれている。(27頁)

これらの頁には単なるラテン語の単語調べの結果が記載されているだけなので、これ以上の説明の必要がないと氏は判断されたようである。しかし、それ以降の頁で詩が書かれている部分では以下のようにやや詳細な解説が付されている。

33 詩 “Dream”。15[頁]と同じくノートを逆さに使って（頁の）下から上に書いている。

“Dream-confused”の原型。詩の関連はRobertsが詳しい。

34 上半分はフランス語、下半分は詩。

35 上の5分の4は詩 “The Crow”。下の5分の1は “Far off the lily-statues...”で始まる詩 (“At the Front”的原型)。

36 ラテン語。ホラチウス (Horace) の英訳。Carmen I (Carminvm, Liber I, 1. Loeb Classical Library ではOde I, 1に当たる)。(27-8頁)

以上の記述からも分かるように、それぞれの頁に何がどのような書き方で書かれているのかが容易に想像出来るように説明されている。倉持氏は頁を追って、どの詩が何頁に書かれているかを列挙しているが、これらの詩がこのノートブックに記載されている順序で書かれたとは断言できない。というのも、このLaL2のノートブックは1906年から使用され始めているが、ロレンスが大学を卒業しクロイドンの小学校で教え始めた後の1910年まで使用されている。それゆえに、このノートブックが詩の制作時期を決定する最終的な証拠にはならないと倉持氏は指摘している。以上が本論文の前半の1～4節の内容である。

後半の第5～8節は、ロレンスの初步ラテン語学習やフランス語学習の状況について言及されている。ラテン語の学習については、ロレンスによるホラチウスの「オード」の第1巻の英訳、その他のラテン語のテキストについてロレンス自身がどのように習得したのか等についての説明がある。また、ロレンスのフランス語学習の状況についても、フランス語のテキストの英訳という形でなされていたということがノートブックでの記録からも分かると述べられている。また、「Essays (LaL1 D. H. Lawrence English Exercise Book) の内容」というサブタイトルがつけられた第8節では、Shakespeareを中心とする英文学講義の受講記録や、提出を求められた課題エッセ一本体が書かれており、これらの記録から若きロレンスがShakespeareやエリザベス朝のその他の作品をどのように受容していたのかが伺える内容となっていることが指摘されている。（倉持氏はこの論文を執筆した段階で、既にLaL1についてはかなりの部分をマイクロフィルムから活字化していることが分かる。）

さて、この書評で取り上げようとしている「D. H. ロレンスの大学ノート：内容と解説」では上記に言及したのと同じ頁（1～10頁を除く）についてどのような解説が付されているのか見て行く。（以下、本書からの引用は引用末尾にその頁数を括弧に入れて示す。）

う区別しているかは未詳。訂正がよりすくないので、この頁の詩稿が第2稿であると考えられる。Latin NotesのままではHeinemannにはない。創作時期は1909年秋(Worthen, p.483)。

下から逆に書いている。改作されて Dream-Confusedとして *Love Poems* (p.32)。一部修正して Secker(p.15)→Heinemann(p.37)→Cambridge (pp.8-9)。

他方、Night Song / Wakenedのタイトルで *The English Review* (1909年4月)に掲載されたものも、この作品を基にしている。(133)

p.35上部

The Crow詩原稿番号 1. Latin Notesのままでは Heinemann には収録されていない。In Churchとして *New Poems* (p. 28)→Secker(p. 187)→Heinemann (pp. 147-8)→Cambridge (p. 108)。創作時期は1910年11月(Worthen, p.486)。

p.35下部

[Far-off the lily-statues]草稿にはタイトルなし。詩原稿番号は付されてない。Latin Notesのままでは Heinemann にはない。改作されて Heimwehとして *New Poems* (p.59)。タイトルのみ At the Frontとして Secker(p.204)→Heinemann (p.159-160)→Cambridge (pp.118-9)。創作時期は1910年11-12月(Cambridge, p.898)。(133-4)

p.36

ホラチウス(Horace)の「頌歌」、第1卷第1頌歌の英訳。このOdes (Carmen)は紀元前23年に刊行された。第1頌歌は文学上のパトロンであるマイケナスへの献呈の詩である。マイケナスはアウグストゥス皇帝の友人であり、ローマの文芸の保護者であった。ロレンスはSnapdragonを *Georgian Poetry*に採録してくれたEdward Marshを書簡でマイケナスにたとえて感謝している。この歌の最後の部分をロレンスは覚えていてJ. M. Murryへの手紙で言及している。(134)

以上のように、それぞれの詩にどのような修正が加えられて最終稿となり、それぞれどのような経過をたどり、最終的にはどの詩集の何頁に掲載されているのかを丁寧に跡づけている。倉持氏は主として代表的な詩集4冊を点検し、Latin Notesに初出の詩がそのまま採録されているケース、あるいは改作されて現在の形になっているケース等についても丁寧に解説しているのである。

倉持氏がここで主として点検した詩集は以下の4冊である。

- 1) Lawrence, D. H. *Love Poems and Others*. London: Duckworth, 1913.
- 2) _____. *The Collected Poems of D. H. Lawrence*. Vol. I. Secker, 1928.
- 3) Pinto, Vivian de Sola and Roberts, Warren. Ed. *The Complete Poems of D. H. Lawrence*. London: Heinemann, 1964.
- 4) Pollnitz, Christopher. Ed. *The Cambridge Edition of the Poems of D. H. Lawrence*. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.

本書の「第1部」の「解説」では、これら1)～4) の詩集はそれぞれ*Love Poems*, Secker, Heinemann, およびCambridgeの略称で示されている。Penguin版の詩集 (*The Complete Poems of D. H. Lawrence*) について、著者はHeinemann版と同じであるので特にこの詩集には言及しない、と述べている。当然の事ながら、本書の「第1部」の参考文献にも記載されていることからも分かるように、上記以外の文献の他に、*Amores*, *New Poems*, *Bay: a Book of Poems*などでの確認もなされていると思われる。

このことを踏まえて、例えばLatin Notesの48頁に関する解説を取り上げてみたい。

p.48

Campions Latin Notesには1から24までロレンスが番号をつけた詩群がある。番号の第1がCampionsである。この番号はWorthenが使っている詩原稿番号とは異なる。この作品の詩原稿番号は5. Latin Notesのまま

Heinemann (p.854) に収録されてある。SeckerやCambridgeにはない。創作時期は1905年頃 (Worthen, p.479)。

p.48

p.47のLast Words to Murielの続きがCampionsと交差して書かれてある。Worthen: *D. H. Lawrence: The Early Years* の写真 (p.194とp.195の間に挿入されてある) 参照。 (136)

上記の説明だけでは分かりにくいかもしれないが、Latin Notesの47頁には“Last Words to Muriel”の第4スタンザの3行目まで書かれており、第4スタンザの終わりの2行が頁をまたがって48頁に書かれている。その詩の次に“Campions 1”的詩の1-3スタンザが挟み込まれている。つまりは“Last Words to Muriel”は全部で6スタンザからなる詩であるが、その第4スタンザと第5スタンザの間に全体で4スタンザからなる“Campions 1”的詩の第1～3スタンザまでが挟み込まれており、この詩は次の49頁に書かれている第4スタンザで終わっている。実際に本書を手にとって頁をめくってみると、それぞれの詩の見出しに当たるところに、[Last Words to Muriel: continued from p.47]とか、[Campions: continued from p.48]などの倉持氏の注意書きが挿入されており、ノートブックへの書き込みの順序がどのようにになっているのかが分かるように解説されている。

本書の「第2部」にはEssaysと呼ばれている大学ノート (LaL1) の「目次」、「本文」、「解説」がある。まず、倉持氏は「序文」で、この全85頁のノートの2頁目に「1907年2月2日」という日付が入っており、最後の日付はこのノートブックの19頁目に「1907年6月1日」と記入されていることから判断して、ロレンスが第2学年に入ってもこれが使用されたものだと推測している (150)。また、ノートの中身がShakespeareを中心とした英文学の講義録や課題エッセーであることから、このノートは当時の大学でどのような講義が行われていたかを知る上でも貴重な資料となると述べている (150)。2頁から22頁までに6編の課題エッセーが収録されているが、それには「8+/10」(10点満点中8+点)とか、「17/20」(20点満点中17点)などのような評点が付されており、6編ともほぼ満点

に近い評価を受けていることが分かる。ロレンスが大学時代に優れた成績を残していることは有名であり、これらの評点がその証明の一部になる。

以上のように本書は大学ノート2冊に収録されている手書きの詩やエッセーのマイクロフィルム版の内容を活字化するとともに、それらに詳細な「解説」を付して出版したものである。マイクロフィルム版の原稿がどのような状態であったのかはその実物の写真がつけられていないので残念ながら不明である。しかし、マイクロフィルム版原稿の文字化という作業はずいぶん根気のいる作業であり、その事自体高く評価されるべきであるが、何と言っても本書の価値は上で見たようにその「解説」の丁寧さと分かり易さにある。

第一級の伝記作家と称されているWorthenは1991年にCambridge版のロレンス伝記を出版しているが、その時の彼の分担は1885年から1912年に至る「若き日のロレンス」の実像を描くことであった。彼は作家の作品と実人生との有機的繋がりを特に重視する研究者であり、後半の人生を含めたロレンスの全体像を自分自身の筆で描くために2004年に*D. H. Lawrence: The Life of an Outsider*を出版している。この伝記は日本ロレンス協会員である中林正身氏によってつい最近日本語に翻訳され、「作家ロレンスは、こう生きた」(南雲堂、2015年11月)というタイトルで出版されている。その「訳者あとがき」で、中林氏が翻訳書のタイトルを決める際に行った著者との協議のなかで、「ロレンスの生涯にわたる（人間として）『生きる』という行為と（作家として）『書く』という作業の切っても切れない濃密な関連性」(521)をどうしても翻訳書のタイトルに反映したいという中林氏の申し出を著者も快く賛同してくれたと述べている。

このWorthenや中林氏のロレンス文学研究に共通するアプローチ、すなわち「生きることと書くこととの濃密な関連性」²という観点から作品を研究する場合、ロレンスが彼の大学時代を通じてどのような意識をもち、若き詩人としてどのように感性を磨いていたのかを検討する上でも、倉持氏の『D. H. Lawrenceの大学ノート：内容と解説』はきわめて重要な資料となり得るはずである。この地道な仕事の成果を十分に生かす為にはこの書物を今後ロレンス研究者がどのように有効に利用するのかにかかっている。

注

- 1 『言語文化研究』(第32巻第1-2号) (松山大学総合研究所, 2012), 26頁. 以下本書からの引用は引用末尾にその頁数を（ ）で示す.
- 2 J.ワーゼン (中林正身訳)『作家ロレンスは、こう生きた』(南雲堂, 2015年11月), 521頁.

追記

『D. H. Lawrenceの大学ノート：内容と解説』はマイクロフィルムを所蔵している Nottingham University Library からの出版許可がとれていなかったため〈非売品〉として、内輪の研究者のためにごく少数部数が印刷されている。本書は現在国立国会図書館と同関西館に収められているが、倉持氏の手元にも少数部残っているとのこと。送料として82円切手3枚を添えて著者宛に申し込めば送付して下さることです。

なお、本稿の校正中に、倉持氏は“Latin Notes”と呼ばれているマイクロフィルム版大学ノートの実物を『写真版D. H. ロレンスの大学ノート I』(光陽社出版, 2016年)として出版されました。このB5判の写真版も〈非売品〉であり、送料として82円切手5枚を添えて編者宛に申し込めば送付していただけるとのことです。

(岡山 勇一)

ロレンス研究文献

(2014年9月～2015年8月)

(日本在住の研究者あるいは国内出版の英語文献)

Arai, Hidenaga, (論文) "An Encounter with the Real: A Lacanian Motif in Joyce's 'The Dead' and Lawrence's 'The Shadow in the Rose Garden'", *Modernists at Odds : Reconsidering Joyce and Lawrence*(University Press of Florida), March 2015.

Kato, Ayu, (論文) "D. H. Lawrence and Australia: Wilderness within the Self in *Kangaroo*(1923)", 『英米文化』45(英米文化学会), 2015年3月.

Mizuta, Hiroko, (論文) "D. H. Lawrence and the Politics of the Symbol", 『待兼山論叢』第48号文学篇(大阪大学大学院文学研究科), 2014年12月.

Nakayama, Motofumi, (論文) "Blood' in D. H. Lawrence and O. Wilde", 『宮崎公立大学人文学部紀要』第22巻第1号(宮崎公立大学), 2015年3月.

(日本語文献)

青木晴男, (共訳) D. H. ロレンス『ユーカリ林の少年』(彩流社), 2015年6月.

石原浩澄, (論文)「リーヴィスと批評の共同体」, 『D. H. ロレンス研究』第25号(日本ロレンス協会), 2015年3月.

稻見博明, (論文)「D. H. ロレンスの『逃げた雄鳥(死んだ男)』の二つの自然とその推移——雄鳥(動物的自然)から蓮・薔薇(植物的自然・宇宙)へ」, 『女子美術大学研究紀要』第45号(女子美術大学), 2015年3月.

井上麻未, (論文)「英國ミッドランド炭鉱共同体と「ストライキの物語」: 'The Miner at Home'における語りの技法」, 『D. H. ロレンス研究』第25号(日本ロレンス協会), 2015年3月.

大平章, (共訳)D. H. ロレンス『ユーカリ林の少年』(彩流社), 2015年6月.

小田島恒志, (翻訳)『ホルロイド夫人, 夫を亡くす』第二幕・第三幕(完), 『D. H. ロレンス研究』第25号(日本ロレンス協会), 2015年3月.

- 木村政則. (翻訳)D. H. ロレンス「チャタレー夫人の恋人」(光文社), 2014年9月.
倉持三郎. (資料など)『D. H. ロレンスの大学ノート：内容と解説』(光陽社出版),
2015年2月.
- 後藤真琴.(共訳)「序文 劇作家 D. H. ロレンス(翻訳)(5) D. H. ロレンス, 『戯曲
集』編者:ハンス-ウィルヘルム・シュワルツェ & ジョン・ワーゼン(出版社:
CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 出版年:1999年)」,『東北工業大学紀
要2, 人文社会科学編』第35号(東北工業大学), 2015年3月.
- 近藤康裕. (著書)『読むことの系譜学——ロレンス, ウィリアムズ, レッシング,
ファウルズ』(港の人), 2014年10月.
- 高橋克明, (共訳)「序文 劇作家 D. H. ロレンス(翻訳)(5) D. H. ロレンス, 『戯曲
集』編者:ハンス-ウィルヘルム・シュワルツェ & ジョン・ワーゼン(出版社:
CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 出版年:1999年)」,『東北工業大学紀
要2, 人文社会科学編』第35号(東北工業大学), 2015年3月.
- 武田久子, (論文)「D. H. ロレンス「イギリスよ, わがイギリスよ」」,『イギリス文
学の悦び:原公章先生古稀記念論文集』(大阪教育図書), 2014年12月.
- 田部井世志子, (共訳)D. H. ロレンス『ユーカリ林の少年』(彩流社), 2015年6月.
田部井世志子, (書評)「飯田武郎著, 「D. H. ロレンス文学にみる生命感——自然,
生命, 神秘」」,『英文学研究』第91卷(日本英文学会), 2014年12月.
- 戸田仁, (共訳)D. H. ロレンス『ユーカリ林の少年』(彩流社), 2015年6月.
- 中林正身, (論文)「D. H. ロレンスのモダニズム」,『相模女子大学紀要』78(相模女
子大学), 2015年3月.
- 野口ゆり子, (著書)『文学のなかの人間と動物——ロレンス, マードック, ダン
モア, ゲイル』(文化書房博文社), 2015年5月.
- 福田圭三, (論文)「恩讐の彼方へ:「最後の笑い」における〈共同体〉」,『D. H. ロレ
ンス研究』第25号(日本ロレンス協会), 2015年3月.
- 松本達郎, (論文)「D. H. ロレンスの詩二つ」,『獨協大学英語研究』76(獨協大学外
国語学部英語学科), 2015年2月.
- 山田晶子, (書評)「Judith Ruderman, *Race and Identity in D. H. Lawrence:
Indians, Gypsies, and Jews*」,『D. H. ロレンス研究』第25号(日本ロレンス協
会), 2015年3月.

日本ロレンス協会第46回大会報告

2015年度の日本ロレンス協会第46回大会は、愛知大学にて6月27日(土)、28日(日)の両日に開催された。第一日目は、まず会員2名による研究発表があり、さらに「〈帰郷〉という危機——エグザイルの経験とロレンスの同時代人たち」というシンポジウムが、会員以外の講師も招いて行われた。その後に総会と懇親会が開催された。第二日目は、「D・H・ロレンス『虹』を読む」というワークショップが『虹』出版100周年を記念して行われ、無事終了した。今年度は『虹』出版の100周年もあるためか、会員以外の参加者も少なからずあり、活発な議論が交わされた。役員会は大会初日の午前中に開かれた。

第一日 6月27日（土）

【研究発表】

D. H. ロレンスとオーストラリアのブッシュ文学

加藤 彩雪（日本女子大学大学院博士課程）

本発表では、ロレンスの『カンガルー』に見られるブッシュ描写に注目した。発表の目的は、オーストラリアの「ブッシュ文学」の系譜の中に、『カンガルー』を位置づけることで、両者の共通点と相違点を明らかにすることであった。

ブッシュは、オーストラリアの獐猛で酷薄な自然を意味し、オーストラリア文学の重要なモチーフとなっている。発表の前半では、ブッシュをおぞましいものとして描写する態度や、人間を受け入れない自然から生まれた「マイティップ」という概念を説明しながら、『カンガルー』に受け継がれているブッシュ文学の伝統を指摘した。また、どれほどブッシュが西洋人にとって奇異に映ったのかを指摘するために、ブッシュを描いた絵画を提示しながら発表を進めた。

発表の後半では、ブッシュという自然から派生したマイティップが、社会的かつ政治的な意味を帯びる時、それは男性同士で力を合わせるという本来の意味を保つことができるのか、という問題提起をした。そして実際に、オーストラリアの雑誌『ブレテン』が積極的に掲載したローソン(Henry Lawson)の作品と、『カンガルー』を比較しながら、両者の相違点を考察した。ブッシュを背景として共

同体を描いたローソンとは異なり、ブッシュの外部に存在するマイティップをロレンスは描いたわけだが、そこには、政治的なマイティップから過度なリーダーシップが生まれることに対するロレンスの危惧が表れている。同時に、当初は奇妙な存在であったブッシュが、集団から離れ、1人で存在することに安心感を覚える主人公にとって、心象風景になっていくことを主張した。ブッシュと孤高な個人が共鳴するという点が、ロレンスの描くブッシュの特異性なのである。

このように、ブッシュ文学の伝統を描きながらも、ブッシュ文学の系譜に当てはまらない、ロレンス独自のブッシュ解釈を発表では明らかにした。

Sons and Lovers の多世界——生命主義とその不満

武藤 浩史（慶應義塾大学教授）

2015年のロレンス協会大会では、*Sons and Lovers* の多世界と題して、この小説にひそむ三つの層、三つの時間性を考察した。

第一の層は、歴史の層で、過去—現在—未来の時間から構成される。冒頭の炭鉱に関する歴史的記述、その文脈の中での坑夫の生活のリアリスティックな描写、フェミニズム（生協の Women's Guild）や社会主義（土地の国有化問題）など時代的に特定できる問題への言及がそれに当たる。

第二の層は、個人の層である。主として、主人公のポール・モレルが、母親をはじめとする登場人物の支援を受けながら、自らの資質を発見し、将来の夢を抱いて、そのために努力を重ねてゆく層を指す。画家として成功し、お金をためて、ロンドン郊外の小ぎれいな家に母親と一緒に暮らすのが、彼の最終的な夢であるが、そこでは、過去は捨象され、現在から未来へと向かう時間が生きられる。

第三の層は、鼓動する生命の層である。それは、過去も未来も切り捨てられて、後の彼の詩学にも通じるような、現在的な時間であり、同時に、生命的であるという点において、永遠性にもつながる脈打つ瞬間である。ポールの母ガートルドが結婚生活の牢獄性に打ちひしがれる箇所、彼女が夫婦喧嘩で夫に家から閉め出されて、自宅の庭で世界の大きさに目覚める箇所、沈む夕陽をながめながら、ある啓示を受けて、赤ん坊をポールと命名することを直観的に決める箇所、青年ポールが恋人のミリアムに自作の絵の魅力を、「光りふるえるプロトプラズム」

といった当時の生物学用語と鼓動概念を組み合わせて説明し、生命原理とつなげる箇所など、*Sons and Lovers*におけるさまざまな重要箇所に登場し、作品の中核を貫く層である。

この第三の層も、当時の印象主義などの美学観、物理学のエーテル概念や生物学の生命原形質概念など、歴史的言説とつなげることが可能であるものの、最終的には、歴史を超えたある種の普遍性に通じているのではないかと述べて、発表の結論とした。

【シンポジウム】「帰郷」という危機——エグザイルの経験とロレンスの同時代人たち

司会・講師 木下 誠（成城大学准教授）

レイモンド・ウィリアムズによるウェールズ関連の論考を集めた *Who Speaks for Wales?: Nation, Culture, Identity*(2003)において、編者 Daniel Williams はその “Introduction: The Return of the Native” を、トマス・ハーディの「ダブル・ヴィジョン」に関するレイモンド・ウィリアムズの言葉——「同時に観察者でもある当事者としてみる」ことが「緊張をもたらすものである」——で始めている。今回のシンポジウムでは、このような「ダブル・ヴィジョン」からロレンスの「『帰郷』という危機」を取り上げることによって、「エグザイルの経験」の意味を、さらには「共同体」の意味を、ロレンスと同時代人たちの「経験」を「補助線」としてあらためて問い直した。

ロレンスとオーウェルの「帰郷」

講師 近藤 康裕（慶應義塾大学専任講師）

ロレンスの “England, My England” は独立の宣言であり、異議申し立てであるが、ジョージ・オーウェルの “England, Your England” はストーリーであって、それが崩壊したとき悪夢となると論じたのは、オーウェルの評伝におけるレイモンド・ウィリアムズである。彼らが共有するのは、「イングランド」からの距離であり、エグザイルの経験と「帰郷」である。ロレンスは労働者階級の青年の成長を描いた *Sons and Lovers* の時期からエグザイルとなり、最後の小説を書く晩年まで「帰郷」しなかったが、その最後の小説ではイングランドの労働者階級に

再び焦点を当てた。オーウェルはアジアからイングランドに「帰郷」し、中流階級の出自であったが労働者階級の暮らしを書くことに力を注いだ。こうして書かれた作品に体现される「危機」が、オーウェルという作家をつくったのだとウィリアムズは述べる。「帰郷」が可能にした「ダブル・ヴィジョン」によってオーウェルという作家が生まれたというウィリアムズの指摘は、ロレンスについてはどう言えるだろうか。本発表では、このふたりの作家のつながりを、「帰郷」とその「危機」という観点から再考した。

ナンシー・キュナードの英国への帰郷体験

講師 三宅 美千代（早稲田大学非常勤講師）

20世紀初めのパリにおいて、前衛芸術家たちのミューズとして知られたナンシー・キュナードは、詩人、編集者、出版業者、報道記者といった様々な肩書きを持つ。彼女の活動の多くは、人種差別やファシズムとの闘いに対する共感に基づくものであったが、トリニダード出身のパンアフリカ主義者ジョージ・パドモアや、チリの詩人パブロ・ネルーダと協調するなど、政治的連帯の姿勢をきわめて実践的な方法で示した。

一方で、キュナードは大汽船会社の相続人を父親に、アメリカ出身でロンドン社交界の女主人として君臨した人物を母親として持ち、このような出自が、彼女の外国暮らしやボヘミアン的生活様式、政治的ラディカリズムに影響を与えたことが指摘されている。今回の発表では、ロレンスの同時代人でもあるキュナードの英国への帰郷体験に注目し、故郷や出自、帝国主義に対する見解を明らかにすることで、それらが彼女の政治的アクティヴィズムに与えた影響を探った。

旧石器時代からの「コンティニュイティ」

——レイモンド・ウィリアムズ『ブラック・マウンテンズの人々』をめぐって

講師 大貫 隆史（関西学院大学准教授）

レイモンド・ウィリアムズの死後に刊行された『ブラック・マウンテンズの人々』(People of the Black Mountains, 1989-90) は、彼の故郷ブラック・マウンテンズを舞台に、旧石器時代から中世にいたるまでの人びとの歴史を記述した二巻からなる異色の小説である。ブラック・マウンテンズ一帯は、ウェールズとイング

ランドの国境沿いに位置する小地域に過ぎない。しかし、そこでの凄惨な争いの数々、文化と社会の複雑な変容の経験を、数万年という長大なタイムスパンで眺めることが、ウィリアムズにはどうしても必要だったのではないか、そしてそれは、ウィリアムズの人生を何度もおそったであろう「帰郷という危機」へのリアクションだったのではないか、という問い合わせを提出した。あわせて、『ブラック・マウンテンズの人々』と装いを近くする人類学的著作、中沢新一『アースダイバー』(2005年)、『大阪アースダイバー』(2012年)を比較参照しながら、同書における「帰郷という危機」の不在を論証した。

第2日 6月28日（日）

【ワークショップ】 D. H. ロレンス『虹』を読む（『虹』出版100周年にあたって）
機械文明を告発する『虹』——蛇の表象を巡って

司会・講師 田部井 世志子（北九州市立大学教授）

ロレンスはいわゆる「炭素の手紙」の中で、従来の作家たちとは異なり、人間存在の表層、つまり「ダイヤモンド」や「石炭」ではなく、まさに「炭素」ともいうべき人間の本質を作品で描くと高らかに宣言した。本発表では、まずその「炭素」を人間の内なる「生命力」や「潜勢力」と捉えた上で、それが物語においてどのような手法で、また、具体的にどのような表象を用いて描写されているのかを探った。作品の細部を緻密に検討することで浮かび上がってくるのが蛇や龍のイメージや象徴であるが、それらにこだわることで、ロレンスのメッセージ——現代人の内なる緑龍（「生命力」の象徴）は灰色の小蛇に変化してしまい、それが硬直化したロゴスを人間に植え付けたために人は自然や生命の母胎から切り離された。今こそ自然界の緑龍に声を傾け、蛇が脱皮を繰り返すことなく、生物としての人間の成就を目指して生を更新させ続けよ——を汲み取った。

上記を前提として作品を再読すると、物語中には脱皮する人物と、それができない人物が登場していることに気づく。作品の現代的意義を考えるにあたり、脱皮できない人物に焦点を当てれば、そこにロレンスの意図を読み取れると考えた。具体的には特にトム叔父とミス・インガーに焦点を当て、彼／彼女が機械文明にどっぷりとつかってしまい、生を更新することなく「腐敗」していく人物として描かれていることを明らかにした。以上の過程を通して、今日、加速度的に進ん

でいる産業・機械文明に対するロレンスの告発を確認することができた。機械によって、ともすると見失いがちな「生命力」を回復し、他者との「触れ合い」(touch)を取り戻す必要性を訴えているのである。

上記のロレンス文学の現代的意義に加え、最後に補足として、アーシュラが結末で見る大空に架かる虹についても「虹蛇」という、やはり蛇と関連した伝説上の異教の神的存在の概念を導入して捉え直すことで新しい解釈ができる可能性を提示した。「蛇」をキーワードに作品を読み直すと、「虹」という作品におけるロレンスの一貫したテーマと重層的な技巧や表現力の妙味を味わうことができるのである。

『虹』 批評と現代社会——戦争、教育、ジェンダー

講師 麻生 えりか（青山学院大学教授）

本発表では、『虹』批評の可能性について考察した。まずは、この作品についてこれまでの批評の代表的なものを、1) 神話対歴史、2) ジェンダー、3) セクシュアリティ、4) 現代作家への影響という4つの観点から紹介した。そのうえで、今、そこに私たちが何を加えることができるのかという問題を戦争に焦点を当てて探った。戦争がロレンスに与えた影響のみに注目するのではなく、より広い政治的コンテクストを考慮に入れ、さらにはロレンスと他の作家の戦争の描き方を比較することについては今後も研究の余地があるというハワード・ブースの指摘は、本発表に大きな示唆を与えていた。ロレンスの戦争表象を第一次世界大戦のみと関連づけるのではなく、他の戦争や読者の生きる世界とつなげて考えることは、作品の批評の射程を現代にまで延ばす「開かれた」批評を実践することになるだろう。

具体的には、19世紀末に起きたアフリカでの侵略戦争であり、大量殺人兵器を導入した初の近代戦である第二次ボーア戦争をロレンスが『虹』に登場させたことの意義を考察した。当時の世界の勢力争いの重要な鍵を握っていた石炭とダイヤと工兵をキーワードにボーア戦争表象を読みとくことで、ロレンスがグローバル資本主義の本質を鋭く見抜いていたことを明らかにした。さらに、作品同士の「対話」という観点から、現代作家マイケル・オンドーチェ（1943-）の小説『イギリス人の患者』（1992）の戦争表象を『虹』の戦争表象と比較した。作品同士

の「対話」を考えることは、あるテクストの問い合わせを、ほかの作品が共有し書き換えることで読者に改めて問い合わせる、そのいわば目に見えない作品同士の関係を重視することである。本発表での議論を通して、戦争の絶えないグローバル資本主義社会においてこそ、ロレンス作品とロレンス批評の役割がますます重要なことを指摘した。

『虹』は「有機的」なテクストか？——エコクリティシズムからの一考察

講師 巴山 岳人（和歌山大学非常勤講師）

今回の発表ではまず、いわゆる「炭素の手紙」においてロレンスが人間存在の物質的・物理的な側面に関心を示していたことを概観し、その視点と近年広く議論されるようになってきた新唯物論（New Materialism）、およびそれに依拠したマテリアル・エコクリティシズムとの関連性について確認した。それらは、有機・非有機に関わらず、人間も含めた生命や世界そのものが物質によって構成されているということ、そしてテクストにおける物質と意味との相互作用的な関係を強調する。さらに動物や機械さえも行為主体になり得る可能性を示すことで、結果として人間の脱中心化を促すことをその主眼の一つとしている。

次にこうした新唯物論との近親性がみられる人物として、20世紀初頭のドイツの生物学者・思想家であるハンス・ドリーシュを取り上げた。ドリーシュの「新しい生気論」は、生命に超越論的・神秘的な力を見出すのではなく、当時の科学・化学に依拠しながら、あくまでもそれを物質的な次元で理解しようとする。しかしそれは機械論のような還元主義的な見方を意味するのではなく、むしろ個々の生物の物質的な生成過程における経験の蓄積と、それが未来の変化について複数の可能性を生み出すことを重視するものである。

これらの視点をてがかりに、「虹」について特に第三世代のアーシュラの表象を中心として分析した。彼女の成長過程においては、人間を生体、すなわち生きた物質とみなす視点がおおいに関わっており、それは特に顕微鏡による植物細胞の観察の場面に顕著である。ここで見出される生命の盲目的な自己生成は、彼女の表象における人間の物質的側面の顕在化へと接続され、通常とは異なる人間概念、またはポストヒューマニズム的な視点を生み出している。さらに從来あまり考察されてこなかったアーシュラの妊娠、そして胎児の存在について、馬との遭

遇の場面に触れながら検証した。そこで示されるのは生体活動のエネルギーそのものとでもいえる動きであり、結論としてそれが家父長制や異性愛主義に対する批判へと至る可能性を指摘した。

西村孝次賞発表および掲載論文講評

今年度は2編の一般投稿があり、結果的に2編とも採用となった。しかし、最初に一度編集委員会で審査したところ、どちらも掲載可能レベルには惜しくももう一歩足りないという判断となり、投稿者に一度書き直しをしていただいた。そして、再審査の上で採用が決定された。従って、残念ながら今回の西村孝次賞の授与は見送りとなった。以下に編集委員会での議論を一部紹介したい。

まず、加藤氏の論文であるが、オーストラリアのブッシュ文学の系譜でロレンス文学を読もうとするねらいは斬新で面白く、委員の間でもかなり評価が高かった。ロレンスとオーストラリアと言えば、ポストコロニアルの視点から語られることが多かったが、ブッシュ文学に注目したものはほとんど見られなかつたと言えるだろう。しかし、論文の構成に粗雑さが見られたり、きちんと論拠を示さず、最初に結論ありきで強引に論を進めている部分が散見されたりと、論文としては未熟な点が多くていたといわざるを得ない。また、論文中で初めて言及される人名がフルネームで書かれていなかったり、注で引用した文献が参考文献表に含まれていなかつたり、不自然な日本語があつたり等の細かなミスも多く、論文のねらいは優れたものであつてもこのままでは掲載できないということで、編集委員会で出た意見をお伝えし、書き直しをお願いした。書き直していただいたものを再審査した結果、最初のものより格段に論がすっきりして改善されていると判断され、掲載可となった。著者はまだ若く論文を書いた経験も少ないため、ミスが多かったのもしかたのない面があり、今後大きく成長する可能性をもつ新人として編集委員一同期待している。

次に巴山氏の論文であるが、これは巴山氏が今年度の大会シンポジウムで発表した原稿をもとに、論文として再構築したものである。この論文に関しては、ロレンスの物質性への関心を新唯物論に接続しようとする試みは評価できるとして、ねらい自体は大変興味深いということで委員の意見は一致していた。が、様々な生物学者に言及していて焦点がどこにあるのかわかりにくい上、論がぶれている部分もあって一貫性がなく、『虹』についての議論にも説明不十分で納得しがたい部分があるなど、問題の指摘も少なくなかった。そこで、やはり一度整理し

直していただこうということで書き直しとなった。その結果、書き直したものはベルグソンに絞って論を展開したこともあるって、最初の版とはかなり印象が異なるものとなったものの、論文としてはまとまりがよくなっているということで、掲載可と判断された。最初の版で多くの生物学者を紹介しているのは、巴山氏の関心の奥深さや広さを示しており、それ自体は評価できる。しかし、短い投稿論文の中でそれを十分に生かし、説得力のある論を展開するのは不可能に近い。投稿論文を書く場合は、それに見合った大きさのテーマに絞り込む必要が出てきてしまうのだ、ということに留意していただきたい。

(編集委員会)

編集後記

今年もなんとか無事に『D. H. ロレンス研究』を発行することができました。私が編集委員長に就任して以来、一昨年度、昨年度と投稿論文が1編も載らないという異常事態だったのですが、今年度は2編掲載できることになり、大変嬉しく思っております。「西村孝次賞発表および掲載論文講評」のところにもありますように、2編とも、一度書き直しをしていただき、再審査を経て掲載に至りました。日本ロレンス協会の編集委員会では、投稿論文の審査の際、①細かいミスを直すだけで掲載可、②一部分、または全体的に書き直した後、再審査で合格すれば掲載可、③掲載不可のほぼ3段階の結論を出しています。③になってしまうのは、書き直しても修正できないだろうと思われるぐらいに大きな問題がある場合です。どの結論が出た場合でも、編集委員会で出た意見は投稿者にかなり細かくお伝えし、今後の参考にしていただいている。私自身が昔に投稿した時も、編集委員の方々ご意見をうかがい、非常に勉強になりました。論文を書いている本人は、自分の書いたものをなかなか客観的に見ることができませんが、他人に評価されることで気づかされることは多いですし、特に若い研究者にとっては、書式などの細かい点でも有益な情報が得られますから、気後れすることなく是非投稿していただきたいと思います。

今年度の大会では、『虹』出版100周年を記念するシンポジウムが開かれましたが、その時の原稿に少し手を加えていただいたものも今号に掲載することができました。この企画は、田部井世志子先生のご尽力により実現したものです。ロレンスの代表作のひとつでもある『虹』に対しては、皆さま思い入れがおありのようで、シンポジウムでの熱心なやりとりが印象的でした。

今号にて、私が編集委員長を務めるのも最後となりました。公私共に多忙で精神的に消耗していた時にちょうど任期が当たってしまい、仕事が遅れ気味で、多くの方々にご迷惑をおかけ通しの3年間でした。なんとか無事に任期を終えられるのも、国書刊行会の竹中朗さんや編集委員の方々はもちろん、多くの会員の方々の支えがあってこそでした。この場を借りて、心より御礼申し上げます。今後の協会のより一層の発展を祈念して、筆を置きたいと思います。

(編集委員長 糸多 郁子)

D. H. ロレンス研究 第26号

2016年3月20日印刷 2016年3月25日発行

発 行 者 日本ロレンス協会 学会番号 (10988)

代 表 者 新井 英永

編集代表者 糸多 郁子

印 刷 所 (株) 国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15

電話03(5970)7421(代)

発 行 所 日本ロレンス協会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15

(株) 国書刊行会内

Tel. 03(5970)7426

Fax.03(5970)7428

e-mail : d.h.lawrence@kokusho.co.jp

ゆうちょ銀行振替口座番号01300-5-44587

(口座名 : 日本ロレンス協会)

<http://language.sakura.ne.jp/dhlsj/>

Japan D. H. Lawrence Studies

No. 26 2016

Articles

- Australia's Bush Literature and Lawrence: Nature and Community in *Kangaroo* Ayu KATO
- Life, Matter, and Individuality in D. H. Lawrence's *The Rainbow* Gakuto HAYAMA
- Special Topic: Reading D. H. Lawrence's *The Rainbow* (Commemorating the Centenary Anniversary of the Publication of *The Rainbow*)**
- Foreword Yoshiko Tabei
- The Criticisms of *The Rainbow* and Modern Society: Coal, Diamond and the Sapper Erica ASO
- The Rainbow*, Denouncing the Machine Civilization: with a Focus on Snake Symbolism Yoshiko Tabei
- A Comprehensive Comment on the Workshop "Reading D. H. Lawrence's *The Rainbow*" Shunji SUZUKI

Book Reviews

- Matthew J. Kochis and Heather L. Lusty (eds.), *Modernists at Odds: Reconsidering Joyce and Lawrence* Masazumi ARAKI
- Nick Ceramella (ed.), *Lake Garda: Gateway to D. H. Lawrence's Voyage to the Sun* Kumiko HOSHI
- Saburo Kuramochi, *D. H. Lawrence's College Notebooks: Contents and Commentary* Yuichi OKAYAMA